

る先に、豫め彼の頭の中にそれを造つてしまふことである。即ち勞働過程の終に現はれて來る結果は、その始に既に勞働者の表象中にあつたものである。換言すれば觀念的にあつたものである。勞働者は常に自然物の形を變ずるやうに作用するばかりでなく、同時にその自然物中に彼の豫め意識してゐた目的を實現するのである。その目的が彼の作業の種類と方法とを決定し、彼の意思を服せしむる所のものである⁽¹⁾といへるが如き、「勞働過程は使用價値を産出せんとする合目的活動である。人間の需用に適ふやうに自然的のものを我がものにせんとする過程である。人間と自然との間の物質交換に對する一般的條件である⁽²⁾」といへるが如きそれである。

唯物論的社會觀からいへば、盲目的であるべき筈の經濟活動が有目的になり、機械的であるべき筈のものが合目的となつたのである。然るに「目的」といふ概念は、意思の存在を豫想してのみ意義のあるもので、意思なしには存在することの出來ぬ概念である。それ故にその人間の目的又は需用に適ふやうに自然物に作用するのが勞働過程であるならば、そしてその勞働過程がやがて經濟活動であるな

らば、經濟活動は始めから人間意思の存在を豫想してゐたもので、その意思が始めから存在してゐなかつたならば、決して人間社會に經濟活動なるものが起つて來るべき筈がないのである。だからマルクスは一面に於いて唯物論的社會觀を否定してゐると斷ずることが出来る。

又自然的必然、若しくは因果的必然は、一定の原因があれば必ず一定の結果あり、一定の結果があれば必ず一定の原因があつて、兩者の關係は全く必然的のもので、その間の連續は切らうとしても、どうしても切る事の出來ぬものである。人間の意思の如きは勿論神の意思といへども此の關係を變ずることの出來ぬ金剛法である。それ故に若し自然的必然、若しくは因果的必然と稱するものにして、少したりとも人間の意思で之を變ずることが出來たとしたならば、それは眞の自然的必然、因果的必然ではない。然らばマルクスの唯物史觀はどういふものであるか。氏は一方に於いては資本の集積資本主義の生産方法及びその生産方法の破滅は、因果の金剛法に循つて自然必然的に消長するもので、人間の意思で如何ともすることの出來ぬものなりと説いて居ることは前節に述べた通りであるが、他方に於

いてはその自然必然的の必至の勢も、人間の意思で變ずることの出来るやうに説いてゐる。それはマルクスが露西亞の一雜誌記者に寄せた書簡の中に明である。もし露西亞が一八六一年までやつて來た徑路をそのまま進めて行くならば、歴史が資本主義的秩序のあらゆる艱難を免れしめんがために、ある國民に與へた最も光榮ある機會も、全く空しくなつてしまふであらう云々と。自然的必然の金剛法はすべて必至のものであつて、「もしならば」といふことは許されない。「もしならば」は人間の意思を豫想して、人間の意思でその過程の變化進止の出来ることを豫想してゐるものである。しかし所謂自然法の方にも、「もしならば」の入り得る餘地があるやうに見えることもある。例へばもし真空中で墜したならば、羽毛と鐵片とは同時に墜つるであらうといふが如きはその一つである。しかし此の場合の「もしならば」は、自然法そのものに加へられたのでなく、實驗をする人間の意思に加へられたものである。自然法そのものは羽毛と鐵片と同時に真空中で墜されたとすると同じ速度で落下するといふことで、その間に何等「もしならば」を入れ得る餘地はないのである。

而もマルクスはその書簡中に於いて彼の「資本論」は必ずしも一般の自然必然的歴史法を述べたものでないことを明に説いて、さやうに「資本論」を解するものは、未だ自分の眞の意味を理解してゐないもので、著者に取つてはむしろ迷惑であるとの意をほのめかしてゐる。

以上マルクスが經濟活動に合目的性のあること、資本の發達及びその破滅は自然必然的のものにあらざることの二ヶ條を認容したといふ點から、彼は自然必然的若しくは因果必然的の歴史法を是認してゐるものでないと推斷することが出来る。

- 一 Das Kapital, Bd. I, S. 140.
- 二 Das Kapital, Bd. I, S. 146.
- 三 露西亞の「Oletsches wennija Sapiski」と稱する雜誌の記者に宛て、マルクスの「資本論」を批評した Michailowski に關して書いた書簡(一八七七)で、始め Prof. Kablukow, "Ueber die Bedingungen der Entwicklung der russischen Landwirtschaft", 1899 中に收められたものである。私に S. A. Altschul, Die logische Struktur des historischen Materialismus, in Archiv f. Sozialw. u. Sozialp. Bd. XXXVII, Heft, 1913, Juli に披露されたものから引用したのである。

„Wenn Russland denselben Weg fortsetzen wird, den es bis 1861 gegangen ist, so wird es die glänzendste Gelegenheit, die jemals die Geschichte einem Volke bot, um alle Qualen der kapitalistischen Ordnung zu entgehen, vereiteln.“
 „Wenn Russland besteht ist, eine kapitalistische Nation nach dem Vorbilde westeuropäischer Nationen zu werden, so wird es dies nicht erreichen, ohne zunächst einen guten Teil ihrer Bauern in Proletarier zu verwandeln. Hat es aber einmal den Weg der kapitalistischen Entwicklung beschritten, so gerät es unter die Herrschaft ihrer eherner Gesetz.....“

Das ist alles! Dies genügt aber nicht meinen Kritiker. Er will unbedingt meine Skizze über die Entstehung des Kapitalismus in Westeuropa in eine geschichtsphilosophische Theorie des allgemeinen Entwicklungsganges verwandeln, in eine Theorie, der sich in fataler Weis alle Völker unterordnen müssen, wie verschieden die historischen Verhältnisse auch sein mögen, unter welchen sie leben, um letzten Endes zu einer Wirtschaftsordnung zu gelangen, welche die grösste Freiheit in der Entfaltung der Produktivität der gesellschaftlichen Arbeit und allseitige Entwicklung des Menschen sichert. Ich bitte um Entschuldigung! Dies hiess mir viel Ehre und zugleich aber auch viel Unehre machen.“

四

マルクスの唯物史観の思想中に含まれてゐる此の矛盾は如何に之を解釋すべきであるか。次に此の問題に移つて考察して見たい。

さてその考察になると是は種々に解釋される。第一には前掲の書簡中にも見えてゐる如く、マルクスは始めから歴史哲學の考察をやつたものではなく、又猶更經濟を以て歴史の進動の唯一の原動力と觀る歴史法を立てようとしたのでもない。歴史の大部分は經濟活動の自然的過程を以て説明することも出来るが、しかしその外にも歴史の過程を進めるものがあることを承認してゐて、時が経ち研究が進むに従つてその思想が益強くなつて、經濟活動の歴史を動かす力が愈制約されるやうになつたのである。かういふ風にも解釋出来る。ベルンシュタインなどの觀方はこんな風である。かやうに解釋する結果はマルクスやエンゲルスは自らでも確定的の眞理であると信じてゐなかつたものがある目的の爲にさも眞理であるやうに述べたといふことになる。殊に「共産黨宣言」や、「家族・私有財産・國家の起源」(Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates, F. Engels)の如きは彼等の一時の迷想を理論の形で言ひ表はしたに過ぎぬもので、學術上の價值は甚だ少いものにならざるを得ない。要するに此の觀方からすればマルクスやエンゲルスは所謂社會煽動家であつて、その目的の爲に多少の理論を研究したけれ

ども、その學術的良心は甚だ疑はしいものであるといふことになるのである。

第二の解釋は彼等の學術的良心は確かであつて純粹に眞理の探究をやつたのであるが、しかし經濟活動そのもの、本質が、彼等の考へたやうに自然必然的に解釋され得るものではない、それには本來的に合目的性が含蓄されてゐるものである。それだから彼等が學術的良心を以て自然必然的に歴史法を解釋しようとする。めつゝある間に、この合目的性のことが論じられたものだらうといふ解釋である。シュタムラーなどの解釋はこれに近く又シュトルツマンなどもこれと觀ることが出来る。

第三には「歴史の哲學」(Philosophy of History)と「歴史についてのある哲學的考察」(Philosophizing about History)とを區別して、解釋する觀方である。歴史の哲學といふのは、歴史そのもの、本質を究明する學問で、是は分れて歴史知識學と歴史本體學との二つとなるのである。歴史學といふ知識の性質、可能成立を論究するのは前者の職分で認識論の一科であり、歴史の實體を闡明するのは後者の職分で本體論の一部である。ギンデルバントやリツカートなどの研究は前者の研究に屬す

るもので、ヘーゲルのは後者に屬するものである。之に反して「歴史についてのある哲學的考察」といふのは、歴史といふものが既に成立したものととして與へられ、その全部又は或る時代について、試に哲學的考察をなすといふのである。故にその哲學的考察は、事實の上にては歴史に加へられ得る唯一の哲學的考察であるかも知れぬが、しかしその考察をなす人は必ずしもそれを唯一の哲學的考察なりと考へもしない又従つて宣言もしない。その外にも猶他の哲學的考察のあり得ることを認容するのである。ロージャースやセリグマン(キ)などの書名としてつかつてゐる「歴史の經濟的解釋」(Economic Interpretation of History)といふ語は最も適切にPhilosophizing about Historyの意義を表はしてゐる。即ち人間社會の出來事を経濟といふ方面から解釋して、その進動の合則ゲゼツツメーシツヒカイト性を表はすといふのである。だからその解釋される部面は必ずしも人間社會の出來事の全部でなくとも宜い、例へばエロイテロプロスが、哲學の發達を經濟方面から解釋したやうに、一部面でもよければ、又サンシモンが佛國革命時代を經濟方面から解釋したやうに、一時代でも宜い。又その經濟的解釋は一面の解釋であるが故に、それと並んで他の解釋

のあることを妨げぬ。例へば歴史は神が人類を教育する過程である(と)と観る見方も、歴史は人類が道徳的理想を實現する過程である(と)と観る見方があつても、是等は必ずしも經濟的解釋と兩立することの出來ぬものではない。かういふのが「歴史についてのある哲學的考察」といふのである。

かやうに歴史に關する理論を「歴史の哲學」と「歴史についてのある哲學的考察」とに區別して、マルクス等の唯物史觀は「歴史の哲學」ではなく、「歴史についての或る哲學的考察」であると解釋してゐるのはクローチエである。(を)

以上述べた理由によつて、「歴史の哲學」は歴史の全體に亘つた全面觀であり、「歴史についての或る哲學的考察」は歴史の全體又は一部に亘つた半面觀である。従つて兩者の妥當となり得る又權威を有し得る範圍は全く異なるのである。唯物史觀は *Philosophizing about History* に過ぎぬものならば、その妥當であり權威である範圍は局限されてゐるものである。クローチエはかく局限されたりとて、それが爲に唯物史觀の價値は減するものでないと論じてゐる。「歴史の哲學」であれ、「歴史についてのある哲學的考察」であれ、彼等が共同に守らねばならぬ一つの約束がある。

それは歴史の理論は必ず目的論的であらねばならぬといふことである。唯物史觀が經濟活動を自然必然的若しくは因果必然的に觀たのは、彼等の大なる失敗である。たとひ經濟的に歴史を解釋するにしても、必ず目的論的であらねばならなかつたのである。故に「歴史法」といふ概念は、自然必然的に見たならば、それ自身成立することの出來ぬ自家撞着性を有つてゐる概念であるが、目的論的必然的に見れば成立し得る概念である。而して凡そ歴史といふものはその概念で編み成された人間社會の出來事の記録ではあるまいか(10)。

- 一 Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus, Elftes Tausend, S. 4 ff.
- 二 Stammer, Wirtschaft und Recht; Stolzmann, Der Zweck in der Volkswirtschaft.
- 三 Windelband, Geschichte und Naturwissenschaft in Preludien, 3. Aufl. 364 ff.; Rickert, Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 1902.
- 四 Hegel, Philosophie der Geschichte.
- 五 Thorold Rogers, Economic Interpretation of History, 1888; Seligmann, Economic Interpretation of History, 1903.
- 六 Eleutheropoulos, Wirtschaft und Philosophie, 1900, 1901.
- 七 Lessing, Erziehung des Menschengeschlechts, 1781.
- 八 Green, Prolegomena to Ethics; Meyer, History as just Ethics.

九 Croce, Historical Materialism and Economics of Karl Marx, Engl. Transl.

二 猶、歴史學の認識論上の性質については、桑木教授著「歴史哲學の問題」、西田教授著「自然科學と歴史科學」(思索と體驗)、拙稿唯物史觀の要訣及びそれについての考察」(日本社會學院年報)第二年第五册所載)及び拙稿「目的論の可能について」(哲學雜誌)所載)等を参照せられよ。

(大正五・三・五稿畢)

—「史林」第一卷第二號(大正五年四月)所載—

四 マルクス主義國家觀の倫理的批判

一 國家と社會

國家を目的論的に考へて、國家は存在する方が宜いか、或は國家は存在しない方が宜いかと云ふ觀方から國家に關する觀方を分けければ、「國家肯定論」(Statism)「國家否認論」(Anarchism)の此二つに分けることが出来るかと思ふ。ウキーンのケルゼン(H. Kelsen)は其の國家學(Allgemeine Staatslehre)の中でかやうに二つに分けて居るが私も之が適當の考へ方であると思ふ。其中で國家否認論は、普通の無政府主義と社會主義との二つに分れるかと思ふが、本來のアナーキズムの方は嘗てはバクレーニンの唱へた説の如き、又近頃にはクロボトキンなどが主張して居る所の説がそれであり、是に對して社會主義の方は社會主義其ものに色々の種類があるから、それが總て國家否認論であると言はれないことは勿論であるけれども、中

に國家の存在を否認するものもあるのである。偕て斯くの如く二つに分けて、然らばマルクス主義は果してどう云ふものであるか、マルクス社會主義は果して國家の存在を肯定する説であるか否定する考であるかどうかといへば、之に就いては學者の觀る所必ずしも一つではないやうであるが、私はマルクス社會主義は國家の存在を否認する所の思想、即ち廣義のアナーキズムに屬して居るものであると斷ずる者である。マルクス及びマルクス主義者も常に國家と云ふことを言ふ。斯くの如く國家と云ふことを言ふ時彼等も國家の存在を肯定して居るやうに見えるのである。併しながら彼等の言ふ所の國家と云ふのはそれは、常に階級國家、即ちクラッセン・シユタートであつて、我々が觀念して居る尋常一様の國家とは其意味を異にして居るものである。「我々プロレタリアは先づ以て政治的支配權を掌握しなければならぬ、其政治的支配權を利用して、以て次第にブルジョア階級から一切の資本を奪ひ取り、一切の生産用具を國家の手に收めて仕舞はなければならぬ、謂ふ所の國家とは支配階級として組織されたプロレタリアを言ふのである」といふマニフェストの文句でも解るやうに、彼等が國家と言ふ場合には常に階

級國家を指して居るのである。謂ふ所の階級國家とは如何なるものであるかと云ふことに就いては、第二節に於いて其意味を明かにしたいと思ふ。

偕て國家と云ふものを認めたとして、其國家と社會との關係に就き、どう云ふ觀方があり得るかと言へば、國家と社會とは全く同じものであると觀る所の同一觀と、國家と社會とは全く相異なるものであると觀る異別觀と此二つがある。さうして此二つのみが存在し得る譯である。國家と社會とは全く同一なものである、従つて國家がありさへすれば社會は必要でない、國家は我々人間が共同生存をする總ての、さうして唯一の形である、と云ふことを主張するのが同一觀であり、此同一觀の近時の代表者は英吉利のボザンケ(Bosanquet, *Philosophical Theory of State*)などの如き人であらうと思ふ。國家と社會とは相異なるものであると云ふ異別觀は二種に小別され得る。その第一種類は排他的の異別を唱へる所の考へ方であつて、國家と社會とは全く別々なものであつて、國家があればそこに社會はない、社會があればそこに國家はない、互々に排他的のものであると觀る觀方である。第二の異別觀は國家と社會とは異なるものではあるけれども、併し兩者相竝んで存在する

ことが出来るものであると観る所の相容的異別観である。マルクス社会主義は以上同一観と異別観との兩者の中のどちらの見解を取つて居るものであるかと云へば、異別観を取つて居るものであり、其異別観の中でも第一種類の排他的異別観を取つて居るものであると私は考へる。其然る所以も亦第二節に於いて明かにしようと思ふ。

次にウキインのマックス・アドラー(Max Adler)はその著「マルクス主義の國家観」の中で(三十三頁)國家は社會の歴史的現象の形に外ならないものである。社會と國家とはマルクス主義者に取つては何等異なる二つのものではない、況んや彼等が互々に對照になつて居ると云ふやうなことはマルクス黨に取つてはとても考へられないと云ふことを説いて居る。併しながら是は正當にマルクス及びマルクス主義の思想を理解したものであるとは観ることが出来ないと思ふ。何故なれば彼等は國家を以て常に階級國家と觀て居る。階級國家と云ふことは強き階級が弱き階級を壓迫する道具としての國家と云ふ意味である。夫故に國家と云ふものがある限りは、彼等の立場からはそこに常に權力的支配及び支配され

ると云ふ關係がなければならぬ筈である。又彼等が階級國家を呪ふ所以は實に其處に存して居るのである。然るに彼等の言ふ所の社會と云ふものには何等さうした支配する、支配されると云ふ關係が存在して居るものではない。其點から見て、國家と社會とは全く異別のものであると見て居ると、斯うマルクス主義を理解するのはマルクス主義の正當なる理解であると私は信ずる。今一つは國家は時あつて死滅して仕舞はなければならぬものである、所謂 *Alsterben* して仕舞はなければならぬものであると云ふことを説くのである。此死 *Alsterben* 滅も第二節に於いて明にする。若し國家が時あつて死 *Alsterben* 滅して仕舞はなければならぬものであるとすれば、さうして國家と社會とが全く同一であるとすれば、國家が死 *Alsterben* 滅すると同時に社會も死 *Alsterben* 滅して仕舞はなければならぬ筈である。然るに彼等マルクス主義者は如何に考へて居るかといへば、國家が死 *Alsterben* 滅してから後に始めて眞の社會が生れて來ると云ふことを考へて居るのである。左様に考へて見ればマルクス及びマルクス主義者は國家と社會とを全く別様に觀て居ると理解するのが正當であると信ずる。アドラーの「マルクス主義の國家観」

を批評したハンスケルゼンは、その「社會主義と國家」(Hans Kelsen, Sozialismus und Staat)に於いて異つた見解を示して居る。更にレントツ(F. Jentsch)は「國家とマルクス主義」(Staat und Marxismus)の中で、ケルゼンと共にアドラーの說に反對して、マルクス社會主義は國家と社會とを別様に觀て居るものであると云ふことを説いて居る。私は以上述べた理由に依つてケルゼンやレントツの説いて居る所のものを以て正しいものと考へて居る一人である。

一 マルクス主義の國家觀

マルキシストの考に依れば、今日の經濟は非常に發達して來て國家と云ふものの限界を超越する有様になつて居る。即ち今日の經濟は所謂國家若しくは國民經濟の範圍を脱却して、今や超國家的、社會的の經濟になつて居るのである。夫は資本の側から見ても勞働の側から見ても同じことである。資本も勞働も何れも皆國家の領域に極限されて居ると云ふやうなことは少しもない。彼等は用ゐる所があれば世界のどこにでも夫を利用しようとして居るのである。夫故に今日

は經濟狀態の方から云へば、寧ろ祖國や民族性と云ふものを破壊しようとして居り、又破壊することの方が寧ろ利益であると考へるやうになつて居るのである。併し資本と勞働との間には——兩者共に國家の領域を超越して居るものではあるけれども——相違する點がある。といふのは、其國家は所謂階級國家で今日では現在の優強階級である所の資本家の國家である。即ち今日の國家は資本家の利益と云ふものを能く保護して居るものであるから、假令經濟は國境を超越して居るとは言へ、國家が存在すると云ふことは何等資本家の不利益でないばかりではなく、寧ろ資本家に取つて非常に利益があるからして、資本家は寧ろ國家を維持存続しようとするのであるが、劣弱階級たる勞働者の側から見ると、其國家と云ふものは却つて彼等の爲に非常に不利益をなすやうになつて居るのである。彼等はそれ故に國家と云ふもの、寧ろなからむことを希うて居る者である。のみならず一國の中に於いて劣弱階級たる勞働者が、一國內の優強階級たる資本家に對抗して彼等を打ち倒すやうなことがあつても、尙他の國の資本家が自分達勞働者を壓迫して來るのであるからして、勞働者は世界的に一致團結して其共同の敵であ

る所の世界のブルジョア階級を倒して仕舞はなければならぬ。國家の中に搾取り搾取られると云ふやうな關係が存續して居る限りは、國家と國家との間にも其關係は絶えるものでない。即ち強國は常に弱國を凌ぎ壓迫する。それ故に我等労働者は政治的革命に成功するまで世界的に一致團結して共同の敵、世界のブルジョア階級を倒して仕舞はなければならぬ。政治的革命に成功すると云ふことは他ではない。今日の有産者階級の國家を打倒して、自分達プロレタリア無産者階級の世界を實現すると云ふことである。夫迄は我等無産者は有産者に對する攻撃の手を緩めてはならない。マルキシストはかう説いて、全く國家を無視し、世界的に労働者の團結を圖らうと考へてゐるのである。以上は「マニフェスト」哲學の貧困等に現はれて居る考へ方であるが、是等所々に散見して居る考を一つに纏めて、マルクス主義の國家の起源及び其本質に關する考を説いたのが、エンゲルス (F. Engels) の *Ursprung der Familie, des Privateigentums und des States* (1886) の中にある考へ方である。而してエンゲルスがこの著書の中にどう云ふ風に説いて居るかを述べることに依つて、階級國家の意味が最も明白になるやうに思はれる。以下こ

の著書の中にある意味を幾らか敷衍して述べようと思ふ。

原始時代には國家と云ふものがなくして唯社會と云ふものがあつた。それが幾らか進んで來た所で國家と云ふものが生れた。更に其國家と云ふものは或る時になると死滅して仕舞つて、其死んで仕舞つた後で理想社會が現はれて來る。エンゲルスは斯う云ふ風に大體から説明して居る。此原始的社會と云ふのはまだ分業も何も起つて居らないやうな、所謂狩獵漁撈ハンティング・フィッシングの時代である。其時代に於いては部族とか種族とか云ふものゝ中に屬して居る所の人々は皆同じやうなことをやつて居つて、そこには何等分業ディフェレンシエーションと云ふことも私有財産と云ふこともなく、總て共產主義的生活をやつて何等分化ディフェレンシエーションと云ふものがない。分化がないと云ふことは、社會的階級がないと云ふことである。さう云ふ何等社會的の階級と云ふものゝない時に當つては階級闘争と云ふものがない。階級闘争のない所には唯社會と云ふものがあつて國家と云ふものがないのである。然るに段々人類が進歩して或は牧畜の時代になり或は農業の時代になると、そこに段々分化が生ずる。牧畜と云ふことは或る個人が或る一定の家畜を飼育すると云ふことであり、或る家

畜を飼畜すると云ふことになれば其家畜を所有して居る者、所有して居ない者と云ふやうな所謂有産者無産者と言つたやうな差別が生じて来る。又牧畜と云ふやうなことになれば自然將來と云ふ考が這入つて来る。狩獵ハンティングや漁撈フィッシングの時代に於いては唯人々は現在に生きて居るのである。腹が空いた時に直ぐに獵に行くといふやうな譯である。然るに牧畜になると、今飼育して居る所の家畜は現在に利用されるのでなくして、將來に利用されるので、將來肉を食ふとか皮を着るとか云ふ必要の爲に今日飼育して居るのである。この將來と云ふ考が這入つて来る所からして段々私有財産と云ふやうな形が現はれて来る。それから所謂農業時代に進んで来れば荒蕪の地を開墾した場合、其開墾した所のものをむざむざ他人の手に之を分けてやると云ふことも嫌である。又一度自分が耕作した所の土地を他の人の手に渡してやると云ふことも好まないことである。それから常に一定所に居なければならぬ。一定所に居れば耕作に利用し得る地域の範圍と云ふものが殆ど極つて来なければならぬと云ふことになる。さうして人口は段々殖えて来る。かくの如く農業に於いては牧畜などより更に將來といふ考が多く這入

つて来る。さう云ふやうな事情からして愈私有財産と云ふものが現はれて来る。私有財産制度が現はれるやうになつて、そこに有産者、無産者と云ふやうな社會的階級が存在して来る。のみならず勞働そのものは好ましきものではない、出来るならば勞働をせずに唯收穫だけを得たいと云ふのが人情であるからして、そこで所謂戰に勝つた所の自由民は地主になつて、負けた種族の者共は奴隸になつて力役に従事せしめられるやうになり、所謂地主とか農業勞働者とか云ふやうな社會的階級が現はれて来る。さう云ふやうな事情に依つて段々社會が進歩するに依つて社會的階級が分裂して来るのである。社會的階級が分裂して来ればそこに所謂階級闘争が現はれて来なければならぬ。而して人は國家は其階級闘争を調停せむが爲の調停の役として、或は調停機關として生れたものであると云ふやうに説くのであるけれども、それは全く間違である。斯くの如く階級闘争が起るやうになると、強い所の階級は有らゆる手段を用ひて自分達の強い權力を永遠に維持し、弱者をいつ迄も弱者たらしむるやうな方法を講ずるものである。國家は強者が自分達の特權を維持する所の道具として之を作り出したものである。と云

ふのは國家に絶對至上の權力を與へて、其國家の名に於いて法律を制定し、法律の力を以て自分達の特權を維持し、弱者の自由を壓迫して行くと云ふやうにして置けば、強者は事のある毎に出でて弱者と戦つて行く必要がない、常に國家の名に於いて國家の力に依つて總括的に彼等の特權を維持し弱者を壓迫して行くことが出来る。さう云ふ意味に於いて國家は強者の爪牙として強者の道具として現はれた所のものである。と云ふのがエンゲルスの説明である。

この強者の爪牙として道具として現はれたものであると云ふ意味に於いて國家は所謂階級國家である。即ち彼等マルキシストの考へ方に依れば國家と云ふものがある以上は、其本質上それは階級國家でなければならぬ筈であると云ふことは、實にエンゲルスのこの理論に基いて居るものである。斯くの如くにして或は奴隸と自由民、或は大名と家來及び大名の中に屬して居つた所の農民と言ふやうに時代に依つて色々な階級が現はれて来る。何れも國家は強い自由民或は大名或は組合コンビネートの親方の機關として現はれて来る。今日は商工時代で、所謂資本家と云ふものが強者の地位に立ち、労働者と云ふものが弱者の地位に立つて居るか

らして、近代の國家と云ふものは優強階級たる資本家階級の國家であつて、其資本家階級の國家として労働者階級たる劣弱者階級を抑へ付けて居る國家である。今日の資本主義、今日の經濟的秩序と云ふものは、彼等マルクス主義の所謂唯物史觀の考へ方に依つて必然的に倒壊して自ら滅びて仕舞はなければならぬものである。今日の生産は彼等の言葉に従へば全く無秩序な無政府主義的な生産である。無政府主義的な生産は矢張り彼等自ら今日の經濟組織を打壞して仕舞ふ所の仕方である。即ち今日の資本家は彼等自ら墓穴を掘りつゝあるものである。今日の資本主義經濟組織と云ふものは次第々々に倒れて仕舞ふ。倒れて仕舞つた其後に於いてはどうであるかと云ふと、そこで始めて誰でも働かない限りは食ふ權利がない、働かさへすれば必ず食ふことは保證されると云ふ時が現はれて来るのである。さうなると階級分裂がなくなつて仕舞ふからして階級闘争もなくなる。階級闘争がなくなれば優強階級の道具として存在して居つた所の國家其ものは死滅して仕舞はなければならぬものである。これがエンゲルスの所謂死滅アッパシユアルベントイの根據である。併し今日の資本主義が壞れて直ちに理想社會に行く

のではなくして、矢張りそこに幾らかの期間は今日のプロレタリアが、今日のブルジョア階級に代つて國家の権力を用ひる時代がある、それが所謂過渡的國家と言はれて居るものである。其過渡的國家を経て始めて理想の社會が現はれて來ると云ふのがエンゲルスの考へ方である。之に依つて第一に國家と社會と云ふものは全く別なものであると云ふやうに考へて居ると云ふことが明である。さうして社會がある時國家はない、國家がある時社會はない、國家がなくなつて本當の社會が現はれて來ると云ふ考へ方であるからして、國家と社會とは全く異別なものであり、而もそれは互に排他的のものであると云ふこともこれから分り、國家がある限りは、其國家と云ふものは是非とも階級國家でなければならぬ筈である。と云ふエンゲルスの説明も分るのである。

三 「階級國家論」の誤謬

然らばこの階級國家論は果して正しき考へ方であるかどうかと云ふことを是から研究して見ようと思ふ。先づ第一に階級國家論の骨子として居る所は、國家

は一つの階級が他の階級を壓迫せむが爲の道具として存在して居るものであると云ふのがそれである。私は歴史に就いては極めて淺薄な智識しかないのであるが、其淺薄な智識を以てしても總ての國民史が此階級國家を以て説明され得るとは考へられないのである。或る國民の或る時代の歴史は之を階級闘争に依つて説明することが出来るでもあらうけれども、總ての歴史を階級闘争の歴史として見ると云ふ事は事實に悖つてをりはしないかと思ふ。他の國民史は姑く惜いて、我日本の國民史を見る時、我國の國民史の果して總ての頁が皆一つの階級が他の階級を壓迫することに依つて綴られて居るであらうか。恐らく誰もがさうだと斷言する勇氣は有たないであらうと思ふ。否さうでないばかりでなく、我日本の國民史の如きにては、一つの階級が他の階級と争つた場合には弱い階級を助け、憐れなる階級を救つて來た所の歴史であると觀るのが寧ろそれを理解するのに、妥當な觀方ではなからうかと思ふのである。所謂天下の窮民、天下の鰥寡孤獨の者、天下の無援ヘルレスな階級が其救ひを求め、其窮狀を訴へた時、彼等は何に對して救ひを求め窮狀を訴へたのであるかと言へば、それは國家である。而して國家は其聲を

決して聞流しにはしない、常に彼等の味方になつて出来るだけ、彼等を救ひ、彼等を賑はして来たのである。若しそれが我日本の國民史であるとすれば、假りに外の國民史は總て一つの階級が他の階級を壓迫せむが爲の道具として生れて居るものであると云ふことが許されるとしても、所謂全稱肯定命題は特稱否定命題に依つて直ちに打破られる如く、エンゲルス或はマルクスの考へて居る所の全稱肯定命題、即ち國家は一つの階級を壓迫せむが爲に出來たのであると云ふ其命題も、我日本國家は然らずと云ふ特稱否定命題に依つて之を破るに十分の力を持つて居ると言はなければならぬ。近頃のマルキシストの中、殊に文明批評家として名を出して居るオットー・パウエル(Otto Bauer)は其の著書 *Die österreichische Revolution* (Wien, 1923)の中に於いて前に述べたエンゲルスの説を冷笑して居る。パウエルは先に述べた所の國家は階級闘争の起つた場合に其闘争を調停する調停役として現はれたものであるかの如く見えるのであるが、併しそれは見えるだけであつて、實は強者の爪牙となり道具として現はれたものであると言つて居るエンゲルスの言葉を捕へて、成程エンゲルスは國家は調停役であるかの如く見ると言つて居る

けれども、今日西歐羅巴の近代國家モダン・ステイツが起つてから少くとも三世紀程經過して居り、而して其三世紀間の各西歐羅巴の國家の進展を見ると矢張り國家は階級闘争の調停役であるやうに見えて居るのである、其見えて居る期間は三世紀にも亘つて今日猶持續して居るのであると皮肉を浴せ掛けて居る。このパウエルの説に徴して見ても、一つの階級が他の階級を壓迫せむが爲に國家は出來て居るものであると云ふやうに觀る觀方は妥當を缺いて居るのではないかと思はれる。

次に第二點は彼等階級國家論を主張する所の人は、今日の優強階級は有産者であり資本家である、今日の國家は有産者資本家の爪牙であり道具である、故に今日の國家内に於ける富の分配とは常に全部か無かであつて、有産者資本家が總てを取るか、無産者或は勞働者は無を取るかである、であるから今日の國家の存續する限りは公平なる富の分配があり得ると云ふことはないから、今日の國家は之を潰して仕舞はなければならぬと云ふのである。其論も果して正しき論であるかどうか。今日近代國家モダン・ステイツに於いては所謂社會政策、それに立脚せる社會立法を行つて居ない國家は一つとしてない。或は工場法の制定、工場官の設置、或は小作官の設

置、少年婦人労働者の保護乃至諸々の職業紹介所などの設備、或は諸々の労働保険法(日本では簡易保険である)とか、さう云ふやうな所謂社會政策を實行して居ない國はないのであるが、然らば斯の如き社會政策とは果してどう云ふことを意味して居るものであるかと言へば、出来るだけ無産者、労働者、貧民の利益を保護し、彼等の生活を保證し、彼等をして向上發展せしむるが爲のものに外ならないのである。と同時に或は銀行法であるとか、或は會社法であるとか云ふやうなものに依つて、又それぞれの官吏を設置して——彼等の營業經營の狀態を審査、監査せしめて居るのである。それは一方無産者の利益を保護すると同時に他方所謂有産者、資本家の間に不義不正のことなからしめむが爲に國家が施設して居る事柄である。又今日では相續税の如き税目を設置して居ない國は一つもないのである。而もそれ等の税目に關しては可なり強い累進税率を課して居るのである。それ等も所謂社會政策的の施設と言ふことが出来るであらうが、それ等も國家と云ふものゝ作用に依つて出来るだけ各人の間の富の分配を公平ならしめむが爲に出來て居る所の施設と見なければならぬのである。若し果してさうであるならば今日

の國家の下に於ける富の分配とは、或は多いか少いかと云ふことはあるかも知れないが、全部が皆無かでないことは明かである。それ故に今日の國家のある限りは富の分配は全部が無かと云ふやうな極めて不公平な不正義なものだから、今日の國家を潰して仕舞はなければならぬと云ふ彼等の論も、事實を無視した考へ方であると言はなければならぬのである。

第三には彼等階級國家論を主張する所の人達は、國家と云ふものは階級國家であつて、今日の優强者はブルジョアであり、資本家であるからして、今日の國家と云ふものは私有財産制度を保護することに於いては至れり盡せりである。併しながら他の一方に於いて労働と云ふものに對してはそれ程十分に保護して呉れない。それ故に今日の國家は其點に於いて誠に片手落の國家と言はなければならぬ。嘗にそればかりではない。今日の社會上の缺陷は私有財産制度即ち所有權と今日の經濟事情との矛盾から生じて來て居るものである。謂ふ所の矛盾とは今日の生産は總て社會的になつて居るのに、私有財産制度があるが爲に分配は個人的になつて居る事である。生産が社會的になつて居つて、分配が個人的になつ

て居る所からして所謂搾取る、搾取されると云ふ今日の社會上の缺陷が生れて來て居るのである。それ故にこの缺陷を矯す爲には私有財産制度を打破つて所謂共產主義にして仕舞はなければならぬ。共產主義にする爲には其私有財産制度の有力なる保護者である所の國家を倒して仕舞はなければならぬと云ふのである。然らばさう云ふ論は果して正しき論であるかどうかと云ふ事を考へて見よう。彼等階級國家論者は所有權と云ふものは不定不動のものであるかの如く説いて居るのであるけれども所有權の實質と云ふものは決して一定不動のものでないことは之まで私有財産制度の發達を研究した所の多くの人々の認めて居る所である。即ち所有權の實質は始終變動して來るものである。例へば我國に於いて氏族制度の行はれて居つた時には土地は其氏族の私有物であつたらしく見えるのである。晉に其土地が氏族の私有物であつたばかりでなく其土地に土着して其土地を耕して居つた所の民も矢張り其氏族の私の民であつたかの如く見える。併し其後になつて口分田の法、班田の法が布かれ而して其口分田、班田法の行はれて居つた當時に於いては土地は寧ろ國有であつたと觀ることが出来るの

である。斯の如く唯一例だけを見ても所有權の實質は其時々事情に依つて變つて來たので決して一定不動のものであるとは言はれない。尤も所謂個人主義の非常に盛であつた時代に於いては其個人自由主義の最も有力なる一つの現れとして所有權は絶対に動かすことが出来ないものであると言ふやうな考も嘗てはあつたのである。さう云ふ考から見れば前の第二點に説いた所の所得税であるとか或は相続税であるとか云ふやうなもの乃至累進税と云ふが如きも皆個人の所得權を侵害するものとして考へられて居つたのである。併し斯くの如き考は最早八九十年前の過去のことに屬し今日では所得税なり相続税なり累進税率なりは寧ろ當然のものであると承認されて居るのであるし加之今日は獨占的の性質を有つて居る事業は國家若しくは公共團體が之を企圖經營する方が宜いと云ふ様な考になつて來て例へば郵便、電信、鐵道、市内電車、電話、水道、瓦斯等は大抵國家若しくは公共團體が之を經營して居るのである。若し個人の所有權の絶対不可侵と云ふ見地から見たならば斯くの如き國家の獨占と云ふものは個人經營上の自由の權利である企業經營を妨げる事であつて従つて其意味に於いて國家が

個人の所有権を侵害して居るとも考へられるのである。國に依つては今日に於いても未だ鐵道は國有になつて居らない。亞米利加の如きそれである。或は電信の如きも國有になつて居ない所がある。けれどもさう云ふ風に國の事情の如何に依つて未だ國家の經營になつて居らない所もあることは事實であるけれども、さう云ふ獨占的の性質を有する事業は國家若しくは公共團體が之を企業經營すると云ふことは、個人の所有権を侵害するから理論上間違つて居ると考へる者はなくなりつゝあるのである。是等の事に徴して見ても、所有権の實質と云ふものは決して一定不動のものでない事は明である。シカゴ大學のタフツ(Taft)はその倫理學の中に於いて、所有権は富の管理の一つの方法であると説いて居るが、誠に妥當の言であるやうに思はれる。即ち一切の富は天が我々人類の一切に對して與へて呉れたものに相違ないが、併しそれを如何に管理すれば最も能く人生の充實、人生の貢獻、人生の自由、換言すれば人生の理想に適ふであらうかと云ふことを目安として、其當時の道德、社會其他諸々の狀コンディション態に應じて、規定せられたる所の富の規定に應じて、其富を管理して行かなければならぬ。斯くの如くにして私有

財産は生れて來て居るのであるからして、實質は一定不動のものではないけれども、人生の充實、貢獻、自由等を目安として、歴史的、道德的、社會的の事情によつて規定されたものに應じて之を管理して行かなければならぬものであつて、彼等所謂有産者富豪達が若し此財産は自分のものである、従つて自分が勝手にこれを處分し消費することが出來ると云ふやうに考へたならば間違である。と同時に彼等マルキシストが此一切の私有財産制度を一躍撤廢せんとし、其爲に私有財産制度の保護者たる國家をも討滅して仕舞はなければならぬとすることは、全く以上の理論を無視した考であると言はなければならぬ。其意味に於いて私は彼等の第三の論據も亦甚しく誤つた考であると思ふ。

更に第四に、彼等は階級闘争、階級闘争と言つて、唯國家内の或る國民が必ず甲と乙とに分れて仕舞ふものであると云ふ分裂の方面のみを考へて、其分裂の中にそれを結束する所の強い、民族意識のあることを忘れて居ることである。我々には或場合に於いて所謂分裂意識と云ふものゝないこともないが、併し分裂意識のみかと云ふと決してさうではない。自分達が同一の血統に屬して居ると云ふ

意識、同一の風俗、習慣、歴史を有つて居ると云ふ意識、同一の言語を使用して居ると云ふ意識、是等は暗黙の中に非常に力強き結合の作用をなして居るのである。それ故に平素分裂意識のみが働いて居るやうなことがあつても、一朝何事かあると民族意識が猛然として現れて今迄の分裂意識が消えて仕舞ふことがある。即ち兄弟牆に闘いでも外侮りを防ぐと言ふやうな作用が矢張り國民民族の間にも強く行はれて居るものである。而して此民族意識が非常な強い強い統一作用を持つて居つて、夫が國家の脊柱を成して居ると云ふことは是亦各國の國民史に於いて證明することが出来るのである。であるから各國の國民史は分裂の歴史であるよりは寧ろ統一の歴史であると云ふ風に見るのが妥當であるやうに思ふ。

最後に斯の如きマルクス主義の階級國家論には幾多の誤謬が含まれて居るので、所謂マルクス主義者の中にも國家の存在を否認するのは宜しくない、否よく考へて見るとマルクス其人の考も決して國家の存在を否認する考ではないやうであるなどと理窟を付けて國家の存在を肯定する所の者が續々と現はれて來たことである。前述のマルクスの正統派（マルクスの正統派）の方からして機會主義者（オポチュニスト）と言はれて居る所

の修正派に屬して居る人は言ふ迄もなく國家を是認しようとするが、其外の所謂正統派（マルクスの正統派）のマルキシストと見られて居る所の人達で國家の存在を肯定しようとする人達が續々と現はれて來たのである。既述のオットー・パウエル（Otto Bauer）の如きも其の一人であるが、同じく塊太利のカール・レンナー（Karl Renner）は *Marxismus, Krieg und Internationale* (1917) の中に於いて、今日の所謂資本主義的の國家を觀ると、どの國家でも其中に多分に社會主義の種を含んで居るやうになつて居る。今日では唯經濟の方面のみが資本家に奉仕して居るやうであるが、國家は寧ろ今日の所（所）横杆（横杆）になつて居るのである。エンゲルスが國家は死滅しなければならぬと言つたのは、それは資本家的國家であつて、國家其ものがなくなつて仕舞はなければならぬと云ふのではない、などと言つて、國家は存續させなければならぬと言ふやうなことを述べて居る。カウツキーは一九二二年に出版の著書 *Die proletarische Revolution und der Programm* の中に於いて、レンナーのこの言と同じやうなことを述べて居るが、今日社會主義者が呪つて居る所のものは今日の國家の形態なのである。即ち今日の官僚的な、軍國的な、國家を呪つて居るのであつて、國家其ものを呪

つて居るのではない。さう云ふミリタリズムの國家は死滅アウフユタルベンしなければならぬものであるが、眞のデモクラシーの國家は必ず永遠に存続して行かなければならぬものであるなどと云つて居る。更に最も興味あるのはルドルフ・ヒルファアーディング(Rudolf Hilferding)である。獨逸の社會民主黨の機關雜誌として一八八二年に「新時代」(Die neue Zeit)と云ふ雜誌が月刊で發行されて居たのであるが、之が一九二六年に至つて廢刊した。其廢刊した事情はマルキシストの間に於ける内訌に依るのであるが、其の代りとして現はれた雜誌が「社會」(Gesellschaft)である。此「新時代」を改題して「社會」として第一卷を出した時の卷頭の論文は「現時の問題」と云ふのであつたが、其中にも矢張り前に述べたカール・レンナーなどの説いたやうに、所謂あらゆる國家をなくして仕舞ふと云ふのではない、一つの官僚的な軍國的な國家を否定するのであつて、理想の國家を否定するのではない、否其國家と云ふものがなければ我々は我々の理想、社會主義的理想を實現することが出来ないと云ふやうなことを述べて居るのである。それから伯林大學のクノー(Cunow)は一九二〇年に Die Marxsche Geschichts- Gesellschafts- und Staatslehre と云ふ著書を出版

して居る。此書は出来るだけマルクスを辯護しようと努めて居るのであるが、併し國家論に就いては矢張り國家はどこ迄も存続して行かなければならぬもので、以前は國民は一向國家とは没交渉のやうな有様であつたのであるが、近頃は段々變つて來て國家は我々の國家であると云ふ者——意識が段々明かになつて來たのである、此我々の國家と云ふ意識が明かになるやうになればそれが本當の國家である、さう云ふ國家はどこ迄も存続して行かなければならぬ、マルクスの本當の考も其處にあるのだと言ふやうなことを説いて居る。斯くの如く正統派オルドックスのマルキシストと言はれて居る人、マルクスをどこ迄も辯護しようと云ふやうな人々の間にも、國家論に於いては、國家は是非とも存続して行かなければならぬものであると云ふことを考へるやうになつて來たと云ふことを見ても、如何にマルクスの國家論と言ふものが誰が考へても十分のものでないと云ふことが分ることと思ふ。

四 レーニン主義とマルクス主義

レーニンの書いたもの若しくは演説の筆記等は可なり澤山出版されて居り、其

中に目ぼしいものも随分澤山あるが、茲には特に「國家と革命」(Staat und Revolution)に基いて述べようと思ふ。是は自分の考を積極的に述べたと云ふよりは、カウツキーとの議論に於いて書いたものである。それ故に可なり色々の點に於いてマルクス主義が力強く言ひ現はされて居る所もあるのであつて、旁レーニンの思想を窺ふに便利であるやうに思はれる。此書に依ると、レーニンは今日マルクス主義者と自ら標榜して居る人はなか／＼數多くあるけれども、私を以て之を見れば彼等の多くはマルクスを誤解せる者か、曲解せる者か、若しくはマルクスを極く淺薄に觀て居る所の者であつて、マルクスの思想を正しく且深く觀て居る者は甚だ乏しいやうである。少くとも自分は自分の思想を以てマルクス主義の正當なる繼承者であると思つて居る者であると言つて居る。而してレーニンは所謂第三インターナショナルを首唱し主宰し指導した所の人である。それ故にレーニンの思想を側面から特徴付ける意味に於いて、第三インターナショナルは如何にして生れたものであるかを一應述べることは必ずしも無益なことでないと思ふ。この點に就いてはブハーリン(Bucharin)とプレオブラシエンスキー(Preobraschensky)との合

著になつて居る Das A B C des Kommunismus とカール・ディール(K. Diehl)の Ueber Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus 等の書物に依つて述べることにする。ブハーリンの書物は寧ろ自分達の露國の革命を謳歌する方の立場に立つて居るものであるから是は餘程割引をして讀まなければならぬ。カール・ディールの方はプロフササーとしての態度を取つて、別に辯護するとかどうとか云ふことでなく、極く公平な立場に立つて書いて居る、それ故ブハーリンの書物を補ふにディールの書物を以てすれば先づ大體の真相を得ることが出來ようと思ふ。第三インターナショナルは第一インターナショナル、第二インターナショナルに對する第三インターナショナルであつて、第一インターナショナルは一八六四年にマルクスが主唱し、マルクスが主宰者となり指導者となつて始めて起されたものであるが、一八七六年にマルクス派とバクーニン派との間に争が出來て、其内訌の爲に、繼續すること十餘年にして滅びて仕舞つた。其後一八八九年になつて第二インターナショナルが生れ、現今に至つて居る。それに對して第三インターナショナルは一九一九年、丁度世界戦争の濟んだ翌年レーニンの指導の下に莫斯科に於いて始めて第一回のコンGRESを開い

て組織され、之が現今に至つて居るのである。第三インターナショナルは第二インターナショナルから或る一派が分離して現はれたものである。其分離に至る事情がヒューゲンツの思想を特徴付けることになるのであるから、其分離に至る経過の概要を述べようと思ふ。

第二インターナショナルの起つた一八八九年の當時は世界が總て帝國主義を實行して居た時代である。H. Friedjungの「帝國主義時代」(Das Zeitalter des Imperialismus)と云ふ二卷よりなれる大冊の中にも、一八八四年から一九一四年までの間をば世界の帝國主義時代としてある。帝國主義時代と云ふのは言葉を換へて言へば、各家の國家權が非常に發達し、隆昌になつたことを意味するのである。其國家權が發達し隆昌になつたと云ふことは、同時に各國が殖民政策を採つて來た、さうして殖民地が段々と發展するやうになつて來たと云ふことを意味して居る。其帝國主義時代に於いての産業の^{インダストリー}有様はどうであつたかと言へば、國家權の隆昌に連れ、て産業も亦非常に發達した譯である。同時に殖民地との取引乃至世界の商業が非常に活潑になつて來たのであつて、所謂好景氣の時代であつた。好景氣の爲に

自然労働者の収入歩合も甚だ良好な状態に置かれてゐた。従つて一八八九年に第二インターナショナルは出來たけれども、さう云ふやうに労働者の収入状態が甚だ佳良の状況にあつたので、表面は國家を呪ひ國家の惡口を言うて居りながら、陰では寧ろ國家權の隆昌を謳歌すると云ふやうな態度が尠からずあつた。その爲に第二インターナショナルは活潑な花々しき活躍を試みるこゝが出来ないやうな状況に置かれてあつたのである。そこへ現はれたのが一九一四年の世界戦争である。其世界戦争の結果第二インターナショナルの聯盟に屬して居る各國の労働組合及び社會主義者の團體に對して非常な擾亂、動搖が惹起されることになつた。其結果は大體之を三派に分けることが出来る。即ち第一派は極めて尋常一様の國民と同じやうな考を有つて居るのであつて、即ちもう戦争が始つた以上には仕方がないから、獨逸は獨逸、佛蘭西は佛蘭西と銘々自分の國が勝利を得て終結して行くやうにするより仕方がない、それ故我々は戦争に出て行くのは勿論のこと、軍費の募集があれば、それにも應じなければならぬと云ふやうな、極めて温和な考を有つて居るものであつて、彼等は「社會主義的愛國者」と云ふやうな名を付けられ

て居つたのである。第二派は、どうも戦争が始つた以上は是は仕方がないけれども、出来るだけ早く此戦争を終結させるやうにしなければならぬ、それには自分達は戦線に立つと云ふことは止さうではないか、と言ふやうな稍々過激な思想を抱いて居つたのであつて、之は「中央派」と名付けられて居た。それから第三派は、どうも過激な方で、我々の主義は本來基礎的に非戦論者である、亦非戦論者であらねばならぬ筈である、戦争が始つたからどうも仕方がないでは自分達の主義を裏切る譯であるからして、我々社会主義者としては今度始まつた所の戦争を即時撤廢すると云ふ事をやつて行かなければならぬ、大體戦争を起したのは現在國家の政を預つて居る國家當局であるから、此戦争を即時終結させる爲には其戦争をやりに出た今日の政府を打倒顛覆する所謂革命手段に依らなければならぬ筈である、と云ふ考へで、戦線に出て行かないことは言ふ迄もなく、軍費の募集にも應じない、さうして銘々國內に於いて革命を惹起すことに依つて、世界戦争を終結させて仕舞はなければならぬと云ふのが第三派の最も過激な一派であつたのである。此第三派の者は一九一四年戦争が始まつてから暫くの間は第一派第二派の者と

一緒になつて居たけれども、段々時間が経過して來ると、到底自分達は他の第一派第二派の者達と一緒に事をやつて行くことは出来ない、彼等は社会主義の本來の考へを裏切つて居る叛逆者である、その叛逆者と我々とは到底一緒に仕事をして行くことは出来ない、と考へる様になつた。而して露西亞は既に革命を斷行して、所謂戦争即時撤廢を決行して仕舞つたのである。そこで遂に一九一九年に、レーニン自身が露西亞革命で斷行したこの主義を旗印として、即ち社会主義の本來の考を旗印として、第一派第二派と分れて第三派だけを以て、莫斯科にインターナショナルを拵へた。これが所謂第三インターナショナルと言はれるものなのである。此経過の概略から見ても、第三インターナショナルと云ふものは非常に過激な思想を抱いて居るものであると云ふ事が解かる譯であるし、其第三インターナショナルを指導した所のレーニンの思想も亦さう云ふ過激なものであると云ふ事を、側面から特徴付けることが出来る譯である。然らば第三インターナショナルが第二インターナショナルから分離するやうになつた表面の主義主張はどこにあるか。即ち第二インターナショナルと第三インターナショナルとを區別する最も顯著なる

點はどこにあるかと言ふと、それは第五節で述べようと思ふ所の革命と無産者の獨裁と云ふ點にあるのである。即ち第二インターナショナルに於いては革命主義でなく進化主義で行かう、^{レヴォルチオン}革命の方法に依らずして進化の方法に依つて行かうと云ふのである。之に反して第三インターナショナルは進化ではいかぬ、矢張り革命で行かなければならぬと云ふことを主張して居るのである。それが第一の違ひであつて、更に第二インターナショナルは飽くまでもデモクラシーで行かうと云ふのに對して第三インターナショナルは無産者の獨裁で行かうと主張するのである。この兩者の行き方の違つて居る所が第二と第三との分れて來た所である。それ故にレニニズムの思想の焦點として、マルクス主義の正當なる繼承者としてのレニニズムの焦點として考ふべきは、以上の革命と云ふことと無産者の獨裁と云ふことであらねばならぬのである。

五 革命と無産者の獨裁

カウツキーはマウエルブレヒェル(Mauerbrecher)と「新時代」の紙上に於いて論争し

たが、その論文を集めて一九〇九年に「權力への道」(Der Weg zur Macht)といふ著書を出版した。一九二〇年には第三版を出して餘程變へて居る。權力へと云ふ此權力は言ふまでもなく政治的權力を指して言ふのであるが、此政治的權力を獲得するの急進主義で行くべきか、將た漸進主義で行くべきか、即ち革命の方法で行くべきか、進化の方法で行くべきかと云ふことに就いては、餘程前からマルキシストの間に議論があつたのである。先づ第一にマルクス自身の説は一體どうであるかを窺つて見ると、マルクス自身の説いて居る所は極めて曖昧で、はつきりした考が出て居らないのである。マルクスは或る所では革命主義で行かなければならぬと云つて居るし、又或る所では漸進主義で行かなければならぬと云ふやうに論じて居るのであつて、どつちがマルクスの趣意であるか、少し分り兼ねるやうになつて居る。例へば「共産黨宣言」中には無産者が一致團結して政治的權力を獲得しなければならぬ、政治的權力を獲得することに依つて nach und nach 云々と云ふ言葉を使つて居るが、段々資本家の資本を奪ひ取つて仕舞はなければならぬと云うて居る所から見ると、マルクスは漸進主義を取つたものであると云ふやうに

解釋出来る譯である。それは初めマルクスは佛蘭西語で書いたのであるが、其獨逸譯の一六三頁の所には矢張り、政治的權力を獲得する爲には段々とエヴォルチオンの方法で行かなければならないものであると云ふことを説いて居るのである。又一八七二年に國際的の労働團體の會議が和蘭に開かれた時に、其會議が濟んだ後でアムステルダムで一派の大講演會が開催された。其席上に於けるマルクスの演説の中には、我々無産者が政治的權力を獲得するには其國々の事情に依つて行かなければならないもので、總て革命手段でやらなければならぬとか、總て漸進主義でやらなければならぬと言ふものではない。例へば米國、英國、和蘭と云ふ國の如きは之まで既に平和的な適法的手段に依つて、段々と労働者が政治的權力を獲得するやうになつて來たのである、と云ふ意味のことを述べて居る。それから見ると矢張りマルクスは其時々の事情、其國々の具合に依つて漸進主義で行つて宜いものもあるし、又急進主義で行かなければならぬ場合もあると言ふて、矢張りどつちでなければならぬと云ふはつきりした考を出して居らないやうである。斯くの如く一方から觀るとどつちでも宜い、否寧ろ漸進主義で行かなけ

ればならないと云ふやうに説いて居るかの如く見ゆるのであるが、併しながら他面に於いては一八四八年十一月七日、「新ライン新聞」に革命的恐怖主義を謳歌した熱烈なる文章があるのである。それに依ると、古い社會の死んで行く惱み、新しい社會の血腥い出生と云ふことを出来るだけ短縮せむが爲に革命を用ひて行かなければならない、そしてそれは我々が用ひる所の唯一の手段であると言ふやうなことを述べて居るのである。それから見るとマルクスは全然革命主義の謳歌者であると云ふやうにも觀られるのである。斯くの如くマルクス自身の文献に依つては、マルクスは果して革命を是認したかどうか、漸進主義を謳歌して居つたかどうかと云ふことに就いては甚だ不明瞭なのである。

このマルクスの見解の不明瞭なためにマルクス主義者の間にも色々説が分れて來たのである。例へばカウツキーの如きはマルクスの眞意は進化で漸進主義であると考え居るし、レーニンの如きは革命主義がマルクスの本來の考へ方であると言ふ様な風に説いて居る。併しさう云ふやうに異論はあるが、前に述べた彼等の所謂階級國家クラッセン・シュタートと云ふ本來的の考へ方から推して考へて見た場合には、マル

クス主義は寧ろ革命主義を謳歌して居るのである。否、革命主義でなければ到底今日の労働者は今日の國家の政治權力を獲得することは出来るものでないと思つて居るのではないかと推察出来るのである。何故かと言ふと、前述の如く彼等の國家は階級國家である。謂ふ所の階級國家とは優強階級が自己の權利を維持し劣弱階級を壓迫せむが爲の道具としての國家である。それ故に國家内に於いて所謂國會主義の手段即ち適法的手段に依つて現代の國家を打壞さうとしても是は全く不可能なことである。丁度船の中に這入つて居つて、さうして少しも外部からの關係なく船を動かさうとするやうに。それ故に今日のブルジョア階級國家を打倒して、自分達プロレタリアの國家を建設しようと言ふことであるならば、國家の外に出て國家の力を借らずして自分達自力で行かなければならぬ筈である。斯う考へるのは階級國家論から出て来る所の結果でなければならぬ筈である。若しこの階級國家と云ふ考へ方がマルクス主義の本來の立場で、その立場から叙上の解釋をすることが出来るならば、彼等は寧ろ革命主義を彼等の手段であると云ふやうに考へて居つたものであらうと察せられるのである。彼の革命

的サンヂカリズムを唱へた所の佛蘭西のソレルは、之までの所謂漸進主義、温和主義の人々を非常に罵倒して、何處までも革命主義で行かなければならないと云ふことを説いて居る。ソレルの言ふ所に依ると之までの所謂漸進主義者の運動に依つて各國家は所謂社會政策と云ふものを實行するやうになつて來た。社會政策を實行することに依つて労働者、無産者の状態が改善されて來た、それは確かに事實に相違ない。けれども此社會政策に依つて無産者、労働者の状態が幾らか改善されて來たなどと言ふのは言はず所謂對症療法の仕事であつて、お腹が痛いから痛くないやうにモルヒネで止めて仕舞ふと云ふだけの事であつて、何等根本的治療にはなつて居らないのである。それだから一時治まつたにしても病根にして除かれない限り又再び此病氣は現はれて來るに違ひない。謂ふ所の病根とは何であるか。それは今日の私有財産制度である。それを除かなければ幾ら一時的の對症療法をやつて見た所で、決して病氣を根本的に治療する事は出来るものでない。然るに之までの所謂社會政策であるとか或は漸進主義の人達の言つて居る所に依れば、果して病根である私有財産制度の撤廢と云ふことを彼等は説い

て居るかどうか。否今日の國家は所謂ブルジョア國家である、私有財産制度と云ふものを保護する爲に出來て居る所の國家である。だから根本のことになると今日の國家は一步も譲らないのである。一步も譲らないからして所謂漸進主義が幾ら運動して見た所で、従つて幾ら政策的の設備が實行された所で、決して今日の國家及び社會と云ふものゝ病根を絶つて仕舞ふことの出來るものでないからして、病根を絶つて行く爲にはどうしても革命主義で行かなければならぬ、と言つて漸進主義の人達を罵倒し、自分達の革命主義の正當であることを力説して居るのである。さうしてソレルも矢張りレーニンと同じ様に我こそマルクス主義の正當なる繼承者であると云ふ事を説いて居るのである。レーニンも亦同様であつて、後でカウツキーとパンネコック(Pannekoek)との論争に對するレーニンの批評を更に述べるが、決して尋常一様の漸進主義では到底今日の社會上の病根を除き去る事は出來るものでないからして、どこまでも革命主義で行かなければならぬと言つて、自分が露西亞に斷行した事を辯明して居るのである。即ちレーニンは、マルクスは革命と云ふことを是認して居つたのである、従つて革命を實行した所

の自分はマルクス主義の正當なる繼承者であり實行者であると言はなければならぬ譯である、と云ふやうに自分自身を辯明して居るのである。偕て然らば此革命主義と云ふことゝマルクス及びマルキシズムの體系システムの全體とどう云ふ風な關係になつて居るか、即ち革命主義と云ふものは果してマルクスの體系の中に何等の矛盾なしに這入つて居ることが出來るものであるかどうかと云ふことを考へて見なければならぬ。マルクスは彼の著述の中に於いて折々、自分達の社會主義運動は助産婦の仕事をやつて居るものである、と云ふことを説いて居るのである。其顯著なる一ヶ所を指摘して見れば「資本論」第四版(一八八四年)の第一卷七一六頁に、古き社會、即ち現代の資本主義の社會からプロレタリアの新しき社會が生れて來るのであるが、其新しき社會の生れて來るのを助ける爲に、我々は社會運動をやつて居る者であると云ふことを説いて居るのである。偕て此助産婦と云ふ考を文字的に眞面目に考へて見るならば、古き社會が自分の胎内に新しき社會を懐胎する、懐胎すると云ふことは是は人工で出來ることではない、又懐胎された新しき社會が古き社會の母胎を離れて將來自身が獨立の社會として現はれるやうに

なるのも、是も人工で行く譯のものでなく、矢張り一定の自然の経過を待たなければならぬ譯である。それであるから若し助産婦と云ふ考を文字通りに正確に考へて行つたならば矢張り自然の経過を待たなければならぬ、自然の経過で来るものを唯人間が多少それを助けてやると云ふまでに過ぎないことであるからして、是は革命にあらずして矢張り漸進でなければならぬ筈である。それ故に、ラッサールは「科學と勞働者」(Wissenschaft und Arbeiter)の中に於いて、佛蘭西の革命三〇年の革命、四八年の革命等を歴史的に論じて來て、最後の結論として、我々は革命に對して何もさう怖がることも、心配することもない、革命は自然にして起り自然に生じて行くものである、と論じて、レオナルド改命と革命と云ふことをはつきり區別し、ブリンシブル唯新しきものが古きものに代つて行く、代つて行つてもそこに何等の原理の變化と云ふものがないのが之が改命であり、之に反して矢張り新しきものが古きものに代つて行くことであるけれども、其新しきものと古きものとの兩方の共同生活の原理が變つて仕舞ふのが革命であるとして、其意味の革命は決して恐るゝことも何もない、たゞ革命は自然に生じ自然に現はれるもので、革命を拵へるとか、革命を起す

とか云ふことは全く馬鹿氣たことであると云ふことを述べて居る。といふのは矢張り助産婦的の考で、時の自然の経過を待たねば新しき原理が形成されて來ないものである、新しき原理が形成されて來ない時に無理に革命を起さうとか現はさうとか云ふやうなことをするのは馬鹿氣たことである、といふ意味に於いてラッサールは唯自然の経過と云ふことを以て革命を説いて居るのである。而してマルクスの助産婦的の考がどこ迄か徹底され、ば矢張りラッサールのやうな考にならざるを得ない譯である。従つてマルクス及びレーニンが革命を謳歌して革命でなければ彼等の主義を實現する事が出來ないと云ふやうに言ふのは、彼等の全體の體系から考へて自家撞着の考であると觀なければならぬやうに思はれるのである。

扱、又現代のブルジョア國家と云ふものは自然に破れて、理想の社會に變つて行く譯であるが、其理想の社會へ至る間に矢張り暫くは無産者が政治的權力を掌握して、之まで權力を握つて居つたブルジョア階級を抑へ付けて行かなければならぬとレーニンは説いて居る。この抑へ付けて行く間がレーニンの所謂過渡的國家で

ある。過渡的國家の間もそれが國家である限りは矢張り壓制とか壓迫とか云ふ事はなくてはならない譯のものである。其場合には壓迫する者は誰であるか、壓迫される者は誰であるかといへば壓迫する者は言ふ迄もなく其中で政治的權力を握つて居るプロレタリアの連中であり、壓迫される者は今迄國家の權力を握つて居つたブルジョア階級である。併し斯くの如くにして壓迫と云ふことがあるのだけれども、プロレタリアの數は之をブルジョアの數に比べて見れば遙かに多數である。それ故にプロレタリアがブルジョアを抑へ付けて行くと云ふのは、是は多數が少數に對する壓迫であつて、少數者が多數に加へる所の壓迫ではない。之を現代のブルジョア國家と比較して見ると、現代のブルジョア國家に於いては少數なブルジョアが多數のプロレタリアを壓迫して居る、即ち少數を以て多數を壓迫して居るのである。それ故レーニン等は所謂デモクラシー派を評して、彼等はデモクラシー／＼と言ふけれども、實は今日のデモクラシーは眞のデモクラシーでないといと云ふことに氣が付かないで居るのだ。即ち今日は少數ブルジョアが多數プロレタリアを壓迫して居るのであるからして、此社會に於ける所謂デモクラシーと

云ふのは實はブルジョア・デモクラシー或は少數者のオルガニチイ・デモクラシーであつて眞のデモクラシーではない。我々の過渡國家に於けるプロレタリアダイクテ獨裁タインツと云ふ社會に於いては、多數の少數に對する壓迫であるが故に、名は獨裁であるけれども、實はデモクラシーである。我々の獨裁と云ふものとデモクラシーと云ふものとは、言葉は違ふけれども其内容に於いては實は同じものである、と云ふやうに極論して居るのである。之に對してカウツキーは、それは間違つて居る、レーニンの様な思想であるならばそれは國家を粉砕するものであつて、決して國家を克服するものではない。成る程マルクスは折々破壊ツエルブレンしなくてはならぬと云ふことを言ふけれども、併しながらそのマルクスの破壊と云ふ言葉は文字通りに解釋すべきものでないと論じてゐる。即ち前に述べた如くに所謂マルキシストの間にも國家は是非とも立て、行かなければならぬものであると云ふ者が段々出て來て居るのであつて、カウツキーなども其一人であるからして、國家は破壊してどうなる、矢張り我々はどこ迄も國家を存續させて行かなければならないもので、我々は唯今日の官僚的な軍國的な國家を克服して、さうして我等の國家を本當の

デモクラシーの國家にしさへすれば宜いのである。だからレーニンの如き考へ方は全くマルクスの考を履違へて居る所のものである、と言つてレーニンの考を駁して居るのである。

所がレーニンはカウツキーを彼とバンネコツクとの論争に關して非難して居る。カウツキーとバンネコツクとの間の論争は、マルクス主義は國家を否認する。廣義のアナーキズムであるかどうかと云ふ事に就いての論争であつて、カウツキーは自分の立場から、マルキシズムは決して廣義のアナーキズム即ち國家の存在を否認する様な説ではない、所謂アナーキズムと云ふものとマルキシズムとは斯くの如く異つて居るものであると言つて、それ等の差違を三點挙げ、マルキシズムはアナーキズムでないと言ふことでバンネコツクに對して居る。先づカウツキーが指摘したマルクス主義とアナーキズムとの違ひを云ふと、マルキシズムの方は勿論國家を全然排除して仕舞ふことを目的として居るのは言ふ迄もない、併しながら、社會主義革命を起して、其結果として國家を克服して、階級を排除して仕舞はなければならぬと云ふことを論じて居るものである、然るにアナーキズムは之

に對して、さう云ふ社會革新を起して、段々と國家を排除して行かうと云ふのではなく、今直ちに何等の條件なしに國家を全然抜取つて仕舞ふと云ふことを主張して居るものである、それが一點。それから第二點は、プロレタリアが國家の權力を得た後に於いては、今日の國家の機關を全然壞して仕舞はなければならぬが、併しながら其代りに嘗て彼の巴里で試みられた所の手本に従つて労働者を武装させ、全然新しい國家機關を入れて仕舞はなければならぬものであると云ふことを唱へるのがマルキシズムの考へ方なのであるが、アナーキズムはそれに對して國家機關を壞して仕舞つた後に、労働者をどうすれば宜いかと云ふ考を少しも有つてゐないことである。即ち彼等は如何に彼等が獲得せる政治的權力を利用すれば宜いかと云ふことに就いては何等の考もないのである。更に、マルキシズムは、現在の國家を出来るだけ利用してプロレタリアをして將來の革命に對する準備をなさしめなければならぬと云ふことを説いて居るものであるけれども、アナーキズムの方はそれを拒絶して仕舞つて居ることがその第三點である。即ちカウツキーは此三點を擧げて、マルキシズムは決してアナーキズムではない、と説い

てパンネコックに對して居るのである。所がレーニンは之に對して、それはカウツキーの誤解であつて、パンネコックが言ふが如くにどこ迄も革命で、又無産者の獨裁で行かなければならないものであると主張し、パンコネツクの説の方を正し、いととして居る。さう云ふ點から見てもレーニンは革命を謳歌し、無産者の獨裁と云ふ考を取つて而も自分がマルキシズムの正當なる繼承者であると云ふ事の考を有つて居つた、と云ふことを觀ることが出来るのである。

六 將來の社會

以上述べた如くレーニンは過渡的國家と云ふ事を説いて居る。而して苟くも國家がある限りは、それがどんな國家であるにしても、そこに必ず壓制とか壓迫とか云ふものがなければならぬものであつて、國家が全然なくなつて仕舞つた時、そこに始めて眞の自由を語ることが出来る、と云ふことを繰返し述べて居るのである。而もレーニンがそれを説く時には屢々エンゲルスの議論を引證して居るのである。即ちエンゲルスも矢張り同じやうに國家の存在する限りは眞の

自由は語ることは出来ない、國家と云ふものを全然排除することに依つて始めて眞の自由を語る事が出来る、と云ふ意味の言葉を述べて居るのである。即ちレーニンにしてもエンゲルスにしても國家は過渡的國家に至つてやゝ理想的の國家になつた、しかしそれはまだ所謂眞に自由なる社會國家ではない、眞に自由なる社會は次に現はれて來る理想的社會であると考へてゐるのである。然らばマルクスはそれに就いてどう考へて居るかと言ふと、マルクスも矢張り理想の社會と云ふものは何等の干渉とか壓迫とか抑制とか云ふことのない自由の社會であると云ふやうに言つて、其理想社會を *Verein der freien Menschen* と云ふ言葉を以て現はして居る。即ち自由なる人間の結合、之が我々の將にあるべき共同生存の形であると云ふやうに説いて居るのである。*Verein der freien Menschen* と云ふ言葉だけ聽くと新カント派の *Gemeinschaft der freien Menschen* が人間の理想であると云ふのと甚だ似て居るが、併しながら是はマルクスの意味とは甚だしく違つて居るのである。自由と言ひ結合と云ふことを非常に喧しく言ふことはマルクスに於いても同様である。しかしながらマルクス及びマルクス主義は唯物論哲學の上に立つて居る

ものであり、物質が唯一の實在であると云ふことを主張する世界觀を有つて居るものである。而して其物質と云ふものは言ふまでもなく常に因果の理法に依つて動かされて居るもので、そこに何等此因果の理法と云ふことに違つた意味に於いての自由と云ふことがあり得ることは出来ないものである。従つて彼等が自由と言ふ時には、それは其因果の理法と矛盾しない意味に於いての自由なのである。エンゲルスは彼の「アンチ・デュリング」(Anti-Dühring)一九二四年版の中に於いて自由の意味を説き(一一一頁、一一二頁)必然性ノイットウエンツァイウィツカイトと觀るのが自由であると云ふ説明を與へて居る。總て物は必然であると言ふのである。而してもう一つの意味は意志の自由で、其必然の智識を澤山有つて居つて、其必然の智識に依つて事を誤らないやうに判斷して行くと云ふことが意志の自由と云ふことであると定義して居る。それであるから此エンゲルスの説を他の言葉で翻譯して考へて見れば、自由とは必然が必然の通りに行はれて行くことであると言ふのである。例へば物體を真空の中に於いて落した場合には、其物體は自由に落下すると言はれる、或は庭園の中に生えてゐる樹木と原野に生えて居る樹木とを比べて見ると、庭園の

中にある所の樹木は植木屋の手に依つて或は枝を切られたり、或は矯められたり、色々の事をされるのである。従つてそれは自由に成長したものではない。之に反して原野に生えて居る所のは其樹木の本質のある通り、又其周圍の事情に適應する通りに其儘に成長發達して行つて居るのであるから、それは自由に成長發達して居るものである。さう云ふやうに真空に於いて物の落下するのは是は言ふ迄もなく必然である。其必然が必然の通りに何等外物に妨げられないで必然の通りに落下した場合にそれは自由である。また原野に生えて居る樹木は其樹木の必然の通りに成長發達して行くからしてそれは自由であると云ふ意味になるのである。更に他の方面から解釋すれば自由は積極的ポジテイヴと消極的ネガテイヴとの二つの解釋が出来るのである。消極的の方面から之を解釋すれば或る物が何等外のものに依つて其活動が妨げられない時之が自由である。之を積極的に言へば其物が其物のある通りに活躍した時それは自由である。斯う云ふ意味になるとエンゲルスの説を解釋することが出来る譯である。

アドラー(M. Adler)の「因果關係と目的論」(Kausalität und Teleologie)に於いて、マルクス

主義の因果關係と目的論と云ふものは何等矛盾するものでないと云ふ風に西南學派の立場からして之を巧く結付けて居るのであるが、それは詰り今のエンゲルスの説いて居るやうな自由をカントの自由へ結付けて行かうとする爲に言つたのであつて、エンゲルスの説明は今述べたやうなものである。偕て彼等唯物論の立場に立つて居る自由の意味は今述べたやうなものであるとして、更に唯物論の哲學に立つて居るのであるから、言ふ迄もなく、人間も亦物質より成立つて居るものである、否人間の物質は物質である、と言はなければならぬ譯である。それ故にマルクスは五九年の「經濟學批判」(Zur Kritik der politischen Ökonomie)の序文中に於いて存在ザインを決定するものは意識ベウストデインではない、寧ろ意識を決定するものは存在であると言ふことを述べて居る。唯物論の立場に立つて居る者としては當然の議論であると言はなければならぬ譯である。従つて人間の物質マッセを形作るものは精神とか意志とか云ふものではなくして全く身體ケルバウであると言はなければならぬ譯である。若し身體が人間の物質であるとしたならば、人間の物質に従ふ根本動欲と云ふものは何であるかと言へば感覺に基けるものであると言はなければ

ばならぬ。即ち感覺に基ける諸々の衝動であるとか言ふやうなものが物質に従へる根本動欲であると言はなければならぬ。それが人間の根本動欲で、其ものの物質のある通りに活躍することが自由である。さうしてそれが外のものに依つて妨げられないことが自由であるとしたならば、其感覺的の根本動欲の起るまに、満足させると云ふことが積極的の自由である。さうして其根本動欲が起つた場合に何等外のものから妨げられないと云ふことが消極的の自由であると云はなければならぬ譯である。是は彼等の論から當然生じて來る所の論理的歸結であるが、偕てさう云ふ意味の自由と云ふものは我々が考へて居る所の人間の自由と云ふものであるかどうかと云ふことを研究して見たいと思ふ。

私は茲にカントの自由を引證して見たいと思ふのである。カントの自由は私の觀た限りに於いては三つの意味がある。第一は超越的の自由であつて、第二は自律としての自由、第三は選擇の自由である。第三はどうも今では人が説いて居らぬので、従つて多少誤解があり私の説を人が誤解して居るやうであるが、兎に角斯う云ふやうな三つの意味があると思ふ。第一の超越的の自由と言ふのは、唯カント

ト以前の哲學に現はれて居つたやうな第一原因と云ふやうな意味のものと理解されるのであつて、或は出來事を惹起す所のものと云ふやうにも理解されるのである。單にそれだけに解釋すれば何等道德の方に關係のない様に見えるのであるが、併しながら此超越的自由を第二批判の中に出て來る人格ペルソナと結付けて考へて見ると、人格が所謂第一原因として自己自身を開展して行くものであつて、人格が自己自身を開展して行く所第一批判の超越的自由が成立つことになる。人格が自己自身を開展して行くのであると云ふやうに見ると、それは所謂福德一致を目的として永遠に活動して行つて居るものである。それが超越的自由とすると福德一致を目的として永遠に活動して行くと云ふことは、矢張り惡を亡して段々善に變へて行くと云ふやうになるのである。それから第二の自律としての自由と云ふのは、若し形式的に言へば自己の打立てる法則に依つて自己を律する、即ち自律である。併しながら之を内容的に考へて見ると、自己を律する所の立法である。法則は常に善き法則でなければならぬ筈である、従つて善を以て惡を克服して行くと云ふことが自己立法の自由の意味であると見なければならぬ。

選擇の自由も善惡を選ぶ善を選んで惡を棄てると云ふことが選擇の自由であると云ふことに觀たのである。私は斯くの如くカントの自由と云ふものを理解することに依つて、カントの自由と言ふ時は、之を道德の方から考へた場合、善の惡に對する自由と云ふことであると解釋したのである。即ち善其ものが惡に依つて妨げられない、惡に依つて其活動を停止されないと云ふことが、之が聽てカントの言ふ意味の自由である。斯う云ふやうに觀たいのである。善が惡の爲に妨げられないと言ふ所の自由は、茲に言ふ所謂倫理的の自由である。之に反して曩に擧げた眞空の中に於いて物を落した場合には自由に落下するとか、或は原野に生えて居る所の樹木は自然に成長するとかいふ場合の自由は、カントに於いては石を投げた時石が外物に依つて妨げられなかつたならば、投げられた石は理想的の拋物線を描いて地上に落下すると云ふ例と、掛時計の彈條ゼンマイを巻いて置けば外の物が妨げなかつたならば、彈條が振子に利いて居る限り時計の針は動いて居るものであると云ふ二つの例を擧げてあつて、さう云ふ自由は之を自由と云ふけれども、心理學的若しくは機械學的の自由であると言はれて居る。此心理學的機械學的の自由

と云ふのは是はカントが名付けた名である。そこで前の感覺的の衝動、本能と云ふものを起るまに、満足させる、さうして何等他のものに妨げられないと云ふが如きことは、是は唯今述べたカントの所謂心理學的機械學的の自由である。眞の倫理學的の自由ではないと言はなければならぬのである。而して彼等の消極的の意味に言はせると、外の物に依つて妨げられないと云ふ場合には自由であると言ふのであるが、其外の物と云ふものは彼等の意味からすれば物質が人間の本質を形作つて居るものであるから、人と言へば空間に依つて隔つたる他の個人が、我ならぬ他の人である。即ち彼等の他のものに依つて妨げられないと云ふことは、それ故空間に依つて隔つて居る他人に依つて自分の感覺的根本衝動の活動が妨げられないと云ふことが自由である、といふ意味になるのである。斯くの如きことは國家や社會共もの、獨自の存在を認めて居ないのであつて、彼等の立場からすればそれ等の國家や社會と云ふものは、全く空間的に隔たれる所の個人の集りと云ふことになつて居る譯である。即ち彼等の社會觀と云ふものは原子論的の觀方であらねばならぬ。原子論は既に十八世紀の終りに於いて倒れて仕舞つた所

のものであつて、若し今日彼等が原子論を主張するならば、それは時代錯誤的な考へ方であると言はなければならぬのである。

然るに今カントの自由に依據して、カントのやうな自由は之を倫理的の自由と云ふといふことを述べたのであるが、其倫理的の善が惡に勝つたと云ふ時の善、即ちカントから言へば實踐理性或は純粹意志と云ふものであるが、此の實踐理性或は純粹意志と云ふやうなものは是は感覺的に隔つてゐる又空間に依つて區別されたる所の個人個人に依つて異なるものではなくして、空間に依つて隔つてゐる意味の個人を超越して居る所のものであつて、即ち普遍的なものである。それ故にカントの自由の意味は惡が善に従ふと云ふこと、感覺的の個人的のものが實踐理性とか或は純粹理性とか言はれる所の超個人的のものに服従して行くと云ふことでなければならぬ。而して其超個人的の純粹意志とか或は實踐理性とか云ふものが具體化されたものが國家であると云ふやうに考へて見た場合には、其個人の感覺的の慾望、根本衝動を國家の權威或は國家の權威の發動である所の規律と云ふものに服従させる所の倫理的の自由、即ち道德的の自由があると言はな

ければならぬのである。従つて彼等は消極的意味に於いて我ならぬ外のものに依つて妨げられない時之が自由であると云ふのであるけれども、其我ならぬ外のもものと云ふのは彼等の唯物論の立場から述べた通り隔つてゐる他の個人であるが、理想的に考へた場合には我ならぬ外のもものと云ふものは自分の心の中にも澤山ある譯である。即ち疑惑の考へ、邪念・妄想と言ふやうなものが我々の心の中に澤山あるのである。我と非我との差別と云ふものは彼等が考へたやうに空間に依つて妨げられるものではなくして自分の心の中にも我と非我とが存在して居る。心の中の此我は純粹意志とか實踐理性とか言はれるもので、非我と云ふのは所謂感覺的の根本衝動と言はれるものであるからして、外部のものに依つて妨げられないと云ふことも是等の意味の自由では理解の出来ないことであるやうに思ふのである。

—昭和三年八月十日—十四日 文部省思想問題講習會講演—

五 マルクス主義價值論の倫理的批判

一 餘剩價值論の要旨

エンゲルスの著書「空想的社會主義より科學的社會主義へ」はアンティ・デューリングの中から或る部分を抜いて、一つのパンフレットとしたものである。是は最初佛蘭西語で書かれたものであるが後に獨譯が出来た。此書でエンゲルスは、唯物史觀と餘剩價值論とはマルクスの二大發見である、而して唯物史觀はマルクス社會主義の方法論を規定して居るものであり、餘剩價值論はマルクス社會主義の根本内容を形成して居るものであるといひ、更に議論を進めて、マルクスは餘剩價值論に依つて搾取、被搾取と云ふ關係を明かにし、資本が如何にして起つて來たものか、従つて如何なる性質を有つて居るものであるかと云ふことを明かにし、それによつて現在の資本主義的經濟組織の秘密を曝露することが出来たと言つて、極力

マルクスの唯物史観と剰餘價值論の二つをば稱讚し切つて居るのである。更にエンゲルスはアンティ・デューリングの中に於いて、或は此剰餘價值論は實にマルクスの仕事の中で劃期的のものであると言つて稱讚し、或は剰餘價值論に依つて現在の社會のクリスタル・ケルンの如何なるものなるやを現はすことが出来たと云つて到る處に剰餘價值論を讚美して居る。而して彼自身も「資本論」第四版第一卷一三八頁に於いて此剰餘價值に依つて始めて剰餘生産が生ずるやうになつて来る、剰餘生産が生ずることに依つて次第に資本が出来て行くことの秘密が全く明かにされたのであると言つて居る。之を以て見ても此剰餘價值論はマルクス社會主義に於いて主要な地位を占めて居るものであると觀ることが出来るのである。

然らば剰餘價值論とは如何なることであるか。剰餘價值論だけはマルクスの書物の中に極めて明白に徹底的に論ぜられて居る。即ち彼は資本論の第一卷に可なり大部分を費して剰餘價值のことを説いて居るのである。其中にある所の思想を搔摘んで要領だけを述べて見ると、彼は先づ商品とは個人の或る物的欲

求を充すことの出来る性質を有つて居る物といふやうに之を定義し、更に進んで總ての商品は皆一定の使用價值と交換價值の二つを有つて居るものであると言ふ。謂ふ所の使用價值とは商品の性質に依つて人間の或る需要を充す所のものを言ふのである。水には水の性質があり、鹽には鹽の性質がある。水の性質は我々人間の要求のあるものを充す、又鹽の性質は我々人間の要求のあるものを充すことが出来るのである。それ故に其意味に於いて、水なり鹽なりは總て使用價值を有つて居ると云ふ風に説明されてるのである。交換價值とは一つの商品に依つて計られたる他の商品の値打である。牛と米と換へるに際して、牛一頭に依つて米何石が計られた場合、米何石は牛一頭の交換價值を有つて居る、牛一頭は米何石の交換價值を有つて居ると云ふやうに稱へて居るのである。以上使用價值・交換價值の兩者の中で剰餘價值論に取つて大切なのは交換價值である。偕て一つの商品と他の一つの商品とが交換され得る爲には其處に何等か共通なものがなければならぬ譯である。使用價值は皆商品其ものゝ特殊の性質に依るものであるが故に、使用價值の如何に依つて交換價值に置換へることは出来ない。性

質の違つたものでは彼と是とを交換させる基礎となることは出来ない。彼と是とを交換させる爲には彼と是とは何等か共通なものがあつて、其共通なものをメジヤメントとして計ることに依つて始めて交換することが出来る譯である。マルクスは其共通なものをば労働であると考へたのである。

労働と云つても或る鐵工場に働いて居る労働と、紡績工場に働いて居る所の労働とは、若し其性質を言へば必ずしも同一ではない。けれども鐵を扱ふと云ふことを抽象し、糸を紡ぐと云ふ作業を抽象して、即ち内容を抽象して残つたものだけを見る時には、内容を離れた所の労働が残つて來るのである。内容を離れた所の労働は、それ故に鐵工場の労働も紡績工場の労働も抽象された労働其ものとして、は全く同一なものであると見なければならぬ。即ち各商品に共通なる所のものは労働である、内容から抽象された労働である。然らば内容から抽象された所の労働を、如何にして比較するかと云へば、それは分量に依つて比較するのである。分量に依つて比較するとは、然らば如何なることであるかと云へば、働く時間に依つて其分量を計量することが出来る故に、労働の分量は労働時間に依つて計られ

ると云ふことになるのである。従つて各商品に共通なものは其労働時間に依つて計られ抽象された労働其ものであると云ふことになる。併し謂ふ所の労働時間と云ふことに就いても、同じ八時間労働でありながら、極く充實した八時間もあり、極く懶けて居つた空虚な八時間もあるといふことも考へられ得るのであるし、又其技術に能く秀で、居る八時間と云ふこともあり、技術に極く不熟練であると云ふ八時間もある譯である。それ故に労働の時間を精確にはかつて見ても、唯單に八時間と云ふだけでは労働の分量を表はすことが出来ないやうに考へられる譯である。マルクスは労働時間と云ふことを考へた時、矢張り其問題に逢着し其難點に思ひ及んで居るのである。彼は其問題に就いては、如何にも其通りである、併しながら社會的に必要な平均の労働時間と云ふものを我々は考へることが出来る、社會的に必要な所の平均の労働時間と云ふものは考へられるのである、即ち熟練と言つても熟練に程度があり、不熟練に程度がある、それから勤勉と言つても怠慢と言つても各々其程度がある、其勤勉とか怠慢とか云ふことにも、此物を作り出すのに社會的に必要な所の平均の時間なるものが考へられるのである。

る、であるから社会的に廣く之を見た場合には、かゝる特殊の場合に於けるやうな難點を超越して、労働時間と云ふものを定めることが出来る、即ち社会的に必要な平均の労働時間なるものを定めることが出来ると言つて居るのである。斯様にマルクスは社会的に必要な平均の労働時間なるものを考へて、商品をそれに依つて計量^{メジャー}することが出来るとした。即ち労働時間の單位を一〇とか或は二〇とか云ふことに依つて計量すれば、一〇のものと二〇のものは一〇のものを二つと二〇のものと換へて、それで損もなければ得もなく、交換と云ふことが出来る考へたのである。斯くの如くにして商品は交換に依つて流通することが出来ると言ふのである。

其商品の流通と云ふのにマルクスは二様の型^{タイプ}を提出してゐる。商品を金に換へると云ふことは賣ると云ふこと(W-G)であり、又金を商品に換へると云ふことは買ふと云ふこと(G-W)なのである。即ち百姓が米を金に換へて、其金で着物を買ふと云ふやうなのが一つ、これを纏めてW-G-Wが一つの型^{タイプ}である。それから今一つの型^{タイプ}は一旦買つた米を更に金に換へると云ふG-W-Gの関係である。第一の流通

の方は商品の爲の流通である。自分は實際あり餘る所の米を持つて居るけれども衣服がないからして、あり餘る米を賣つて衣服を買ふと云ふのであるからして、是は商品の爲の流通である。然るに第二の方は先づ金を持つて居る者があつて、而して米を買ふて其米を更に金に換へる、前の金がG後の金がG'であればG=G'+AG(AGは剩餘價值で、従つて同じことではなくして幾らか儲けて賣らうと云ふのであるから、是は商品の爲の流通ではなくして、寧ろ利得の爲の流通であると云ふことになつて来る。この第二のG-W-Gの流通の場合に於いては、或る特殊の商品が問題になるのである。米着物等と云ふ物は價值を形成することが出来ないが、或る特殊な商品は價值を形成することが出来るのである。それはかの労働力である。金を持つて居る所の人は労働力なる特殊の商品を買つて其労働力なる特殊の商品を賣ることによって更に金に換へる。然るに今述べた通り労働力なる商品は特殊の商品で價值を形成する所のものであるからして、そこで、後で得た所の金は最初出した所の金に或るものゝ加はつた金になつて来る。この加はつた或るものが謂ふ所の剩餘價值である。以上は「資本論」によつて説明したのである。

以下はエンゲルスのアンティ・デューリングから要約するが、エンゲルスはその二一七頁二一八頁に於いてマルクスの剰餘價值論を極めて簡単に説いて居る。彼に依ると、労働者は一定の賃銀を受取つて自分の労働力を賣つて仕舞ふ。例へば三圓の賃銀で自分の労働力を十二時間に對して賣つて仕舞ふ。今三圓の金を得るのには六時間の労働力で十分だとする。さうして此六時間と云ふのは此處で言ふ必要労働時間で、六時間だけはどうしても働かなければ一人の労働者が三圓の金を得ることは出来ないのである。即ち三圓の金を得ることが出来なければ自分及び自分の妻子の生活を遂げて行くことが出来ないものであるから、其六時間といふものは必要労働時間なのである。然るに實際はこの三圓を十二時間に依つて得るのであるから、六時間働いた上に尙ほ六時間働かなければならぬ。此後の六時間なるものは聽て剰餘労働時間で、この六時間の労働から更に三圓の金が出て来る譯であるから、此後の三圓は剰餘價值である。何故剰餘價值であるかといへば、労働者から言へば、報酬を取らずして働いたのであるし、金を持つて居る資本家から言へば、何等資本を卸さずして唯儲けたからである。即ち之が剰餘價值

として生れて来るものである。と言ふのがエンゲルスの中に見えて居る説明である。之がマルクス及びマルクス主義の剰餘價值論の要旨であるが、尙色々の點に就いて今一度述べる機會がある。

二 剰餘價值論と労働説

マルクス及びマルキシストは此剰餘労働時間、従つて剰餘労働價值を、働いた所の労働者に與へずして、働かない所の資本家が取ると云ふことはそれは不當であり、不正であるからして、不當不正な分配の仕方を改めて行かなければならない、と云ふのである。然らば何故働いた所の労働者に與へないで、資本家自身が取ると云ふことは不當であり不正であるかと云へば、その根柢には、凡そ富と云ふものは天が我々人類に等しく與へて居る所のもので誰の物と云ふことはある譯ではない、唯労働を加へることに依つてそれが人間に利用され得る價值になるのである、従つてそれが自分の物と云ふことになるのである、人間に利用され得る價值になると云ふことは、聽て我々に取つて財貨ギューターになると云ふことである、故に財貨ギューターなるも

のは労働を天然物に加へることに依つて、我々人間の需要に應ずることが出来るやうにした者のみ^が之を取るべき筈である、即ち労働して得たる結果は總て労働した其人^が取るべきである^{と云ふ}ことが豫想されてゐるのである。労働して得た結果は總て之を^{作出した}人に歸すべきである^{と云ふ}説は労働説と言はれて居る。それ故に餘剰價值論を吟味するには、餘剰價值論と労働説との關係を見て行かなければならぬと思ふ。之に就いて、ツガン・バラノフスキー(M. Tugan Baranovsky)が彼の *Theoretische Grundlagen des Marxismus* の中に於いて、餘剰價值論を論述するに労働説を以てするのは、見當違ひの議論である、労働説を以てマルクスの餘剰價值論を批判するのは正當なる見點に觸れて居るものでないと云ふことを論じて居る。併しながら私はバラノフスキーがさう言つて居るに拘らず、今述べた不正とか不當とか云ふことは何處に在るか^{と云ふ}ことを考へる時、どうしても労働説に歸着せざるを得ないのであるからして、矢張り餘剰價值論と労働説との關係を考へて見なければならぬと思ふ。謂ふ所の労働説は、決してマルクス其人の始めて説出した説ではなくして、既にアダム・スミスもリカードも^{オールドリッチ}正統派の經濟學を承繼いで

英吉利の社會主義的の經濟學を立てた所のタムソン、ブレイの如きも矢張り同じやうに説いて居るのである。佛蘭西のブルードンの如きも矢張り同じやうに説いて居るのであつて、決してマルクスが始めて説いたのではないのである。併しながら私は歴史上の先取權^{プリオリテット}が誰にあるかと云ふやうなことは此處では別に問題にしないで、直ちに労働説と云ふものが果して正しい考へ方であるかどうかと云ふことの批判に這入つて行きたいと思ふ。

労働説が正しい説であるかどうかと云ふことに就いては、Ryanが *Distributive Justice* に於いて相當論じて居るのであるが、こゝでは特に W. Willoughbyの *Social Justice* と云ふ書物を紹介しようと思ふ。彼は其中に特に一章を費して労働説を論じて居るが、其ウィルロービーの説いて居る所を大體述べて見よう。第一には富の生産には單に労働のみが必要なものではなくして、土地も必要であり資本も必要であると云ふことは多く論を費さずして明かなことである。所謂社會主義者と雖も其明白なる事實を無視することは出来ない。必ずしも彼等も無視して居るのではない。即ち生産には土地が必要であることは言ふ迄もないが、資本も所謂固定資本

とか流動資本とか云ふものがなければ生産が出来ないと云ふことも明である。そこで其明白なる事實をば彼等社会主義者と雖も無視することは出来ないのであるが、唯彼等社会主義者は資本と土地とは生産に必要なものであるけれども、所謂資本家が利子を取り、所謂地主が地代を取ると云ふことは分らないと云ふだけのことである。斯う云ふ風に彼等の論はなつて来なければならぬ譯である。かくウイロービイは論じて、従つて労働説の當不當を吟味するのには、先づ第一に資本家が利息を取ると云ふことは正か不正か、地主が地代を收得すると云ふことは正か不正かと云ふことを検討して行かなければならないと論ずる。そこでウイロービイは色々の説を擧げて、彼の有名な Röhmbawerk の「資本と利息」(Kapital und Zins)を引證し、「之に關しては色々の説があるがそれらは利息と地代とを眞に説明するものではない。唯時が経過すると云ふことが地主が地代を取り、資本家が利息を取ると云ふことの理由になるとする外考へられない。即ち正月元日の百圓は十二月三十一日の百五圓と同じ價值を有つものであると云ふこと以外に考へられない」と云ふ彼の結論を取つて、利息と地代との權利付けを試みて居るのである。

ウイロービイは第二に、自分は自分のものであると云ふ説の誤謬を指摘して居る。自分は自分のものであると云ふのはもう既にロックなどに根差して居る所の思想である。自分の身體は總て皆自分に屬して居るものであると言はなければならぬ。若し自分の身體は自分のものであるならば、其の身體の活動に依つて生ずる労働も矢張り自分のものであると觀なければならぬ譯である。自分の労働が自分のものであるならば、其労働の結果も亦自分のものであると言はなければならぬ譯である。さう云ふ理論からして労働して得たる所の結果は全部労働した者が之を取るべきであると云ふ Das Recht des vollen Arbeitstages 労働全收權なる思想が導き出されるのである。それに對してウイロービイはハックスレーの説を引いて云ふ。自分は自分のものであると云ふこと自體が既に間違つて居る。自分は親から享けた者で、親なくしては自分はない、然らば自分は自分のものであるか親のものであるか分らない。家族なくして自分と云ふものがあることは出来ない、又社会なくして自分があることは出来ない。然らば自分は家族のものであるか社会のものであるか自分のものであるかは分らない譯である。とすれば

自分のものは自分のものであると云ふやうなことは全く誤れる考へ方であると言はなければならぬ。従つて自分の身體で働く所の労働は自分のものであると云ふ説も亦誤つて居る。労働をする時にはそれ〴〵道具も必要である、機械もなくてはならないものである。謂ふ所の道具、機械は自分が之を拵へたものでなくして他人が拵へて自分に與へて呉れた所のものである。然らば他人の作つて呉れた道具、機械を以て働く其労働は、矢張り總て自分のものであると云ふことは不當な考へ方であると言はなければならぬ。加之、労働をする時には労働をする期間自分の生活を支へて行くだけの資料がなければならぬ。其食料品も矢張り他人の作つて呉れたものであるし、又自分が労働をする場合にはそれ〴〵原料が必要になつて來るのである。其原料も他人が與へて呉れた所のものである。従つて労働が可能であると云ふことは社會の人々が自分の爲に皆努力して共同して働いて居つて呉れると云ふことを豫想して居なければならぬのである。故に個人の労働は總て個人のものであると云ふ考へ方も誤れるものであると言はなければならぬ譯である。従つて労働の結果は總て労働した個人が之を所得すべき

であると云ふ所謂労働説は誤つて居るのである。

第三にウィルロービイは國家の法制及び其作用、社會の組織に就いて言つて居る。今日生産が可能であるのは國家が其法制を立て、其法制を執行して行く作用をするからである。若し國家に一定の法制がなく、従つて其作用がなくして、唯彼等強者が勝手なことをし、亂暴な者が勝手なことをする世の中であつたならば、そこに労働とか生産とか云ふものがあらう筈がないからして、労働をなし、従つて生産をすると云ふことは、總ての國家が一定の法制を立て、其作用を逞うして居ることを豫想しなければならぬ譯である。同様に又諸の社會上の機オルガニゼーション構諸の分業があればこそ、人々は皆一定の労働をなし、生産をすることが出来るのである。さう云ふやうな組織が十分行はれない所には十分な労働、十分な生産があり得ることは出来ない譯である。それ故にその意味に於ける労働説と云ふものは、國家の法制及び其作用、社會の組織と云ふものを無視した所の誤れる見解であると言はなければならぬのである。

第四に——尤も是はウィルロービイも餘り力説して居らない點であるが、私は矢張

り斯う云ふ事も考へなければならぬ事であると思ふ——労働説は智能の作用を無視した所の見解である。其智能の作用とは如何なることであるかと云へば、此前提も申した通りに今日の工場生産乃至農業生産に於いても同じであるが、其農場や工場等に働いて居る所の技手、技師の働に依ることが甚だ大きいのである。又其技手、技師等は最新の機械を應用して、出来るだけ作業を少くして結果を餘計擧げようと試みてゐるのであるが、最新の進歩した機械は矢張り智能の結晶として現れたものであると見なければならぬ譯である。即ち科學の進歩、技術の發達と云ふことを豫想しなければならぬ譯である。今一つ智能の大事なことは所謂能率と云ふことに就いてある。工場の組織とか或は設備とか云ふものゝ良いか悪いかに依つて、同じ千人、二千人を使つて居る工場でも、能率に於いては甚しき違ひを生じて来る。若し組織、管理等が良くなかつたならば千人が八百人の働きしかしないであらう。若し其組織、管理等が良ければ千人が千五百人の働きもすると云ふやうな譯になつて、例へば彼のフォードの工場の如きは今にも一週五日間一日六時間労働にしようと言ふやうなことを考へて居るやうに見えるが、それは

必ずしも生産を減ずるものではなくして、作業時間を短くして而も生産は増して行かうと云ふのである。即ちそれだけ能率を高くしようと云ふのであるが、其能率を高くすると云ふことは工場管理、工場經營の如何に依ること、工場管理、工場經營の如何は總て智能の如何に依ることである。それ故に今日の科學の進歩、技術の發達の世界に於いては、殊に此智能の働きと云ふ事が非常に生産上重要なことになつて來て居るのである。然るにマルクスは餘剩價値に就いて「絶對的餘剩價値」と「相對的餘剩價値」とを分けて論じて居るのである。相對的餘剩價値とは、所謂一日の勞働時間が十二時間なら十二時間と云ふものを變へないでさうして機械を使ふとか或は機械の中でも能率の良く擧る機械を使ふとか、或は其工場管理經營を良くすると云ふことに依つて所謂必要勞働時間が今まで、頂度六時間なければならなかつたものを、四時間に短縮し、夫によつて得る所の餘剩價値を言ふのである。此相對的餘剩價値は然らば如何なる所から生じて來るか、と云ふと、マルクスは、勞働力の能率が段々高まつて行くことに依つて生じて行くものであると説いて居る。従つて相對的餘剩價値は何等勞働力を損するものでもなけ

れば労働者其人が損するものでもないと言つて居る。又生産力が高まつて行くのは、工場の組織オルガニゼーションを良く整理して、即ち個々の労働者の労働力の管理を良く整へて行く事に依つて生ずるものであるとも言つて居る。更にマルクスは資本 (Capital) を不変 (Konstantes) と可変 (Variables) との二つに分けて居るが、相対的剰余価値はこの不変資本、例へば原料とか機械とか工場とか云ふやうなもの、良い物を應用することに依つて生ずるものであつて、従つて、彼は相対的剰余価値を論じた後「資本論」の中に次のやうなダイヤグラムを書いて居るのである。



a—c は一日の労働時間、
 b は必要労働時間の短縮指標である。良い機械を据付けるとか或は原料を精選するとか或は工場の管理を良くするとか言ふやうなことに依つて必要労働時間は段々短縮する事が出来る。六時間なら六時間であつたものが五時間、次に四

時間と云ふ風に、段々必要労働時間が少なくなつて剰余労働時間が餘計になる。剰余労働時間が餘計になることに依つて剰余価値が餘計になる。即ち相対的剰余価値が餘計になると云ふことを説いて居るのである。マルクス自身が既に斯う云ふ事を説いて居る以上は、必要労働時間が段々と短縮されつゝ、資本は段々に餘計になつて來ると云ふことが生じて來なければならぬ譯であり、マルクスがさう云ふことを許して居る以上は、矢張り此生産と云ふものには智能と云ふものが非常に必要なものである。否、智能が寧ろ生産の重要部分を働くものであると云ふことを、彼マルクス自身が認めて居るものであると言はなければならぬ譯である。若しさうであるならば、唯労働して得たる結果は労働者自身が全部獲得しなければならぬものであると云ふ議論の誤れることは、明かなることであると言はねばならぬ。

次に第五にはウイロービイは労働の価値比例を定めることは出來ないと言つて居る。マルクスは労働と云ふものは、先に述べたやうに、その内容を抽象して仕舞へば、残る所のものは唯労働したと云ふ活動性アクティビティだけであつて、其活動性アクティビティに於いて

は何れの労働も全く同一の性質のものであるからして、それを單に分量の上だけで換算することが出来る。と云つて居るのであるけれども、ウイロービイの言ふ所に依ると、其労働から内容を抽象して仕舞ふやうなことは到底出来ないことである。内容なしに労働と云ふことはあり得ないことである。然るに其労働と云ふものには愉快な労働もあり不愉快な労働もある。又極く安んじてやることの出来る労働もあり、危険な労働もある。又極く容易な労働もあれば困難な労働もある。さう云ふやうな事は労働其者からは決して抽象して見る事の出来るものではないからして、若しそれ等を労働其者の中に入れて見たならば労働の價值及び其比率を定めると云ふ事はどうして出来るか。其處に或る共通のものがなければそれを比較する事は出来ない。のみならず生産と云ふものには間接のものもあり、間接の間接のものもある。直接な物質の生産の労働と云ふものと、間接な學術の研究であるとか云ふやうなものと、どう云ふ風にして其價值を比較する事が出来るであらうか。斯う云ふ點から考へても労働説は正しい考へ方ではないとウイロービイは唱へて居るのである。以上は大體ウイロービイの労働説に對する難

點であつて、ウイロービイは尙ほ其外に、實際上の難點として色々のものを擧げて居る。例へば國內或は社會内の人々が總て同じやうな労働をやらうとする、皆が着物の製作に従事する。さう云ふやうな労働を好んで他の米穀を作るとか、食料品を作るとか、或は家屋を建築すると云ふ方へ廻つて呉れなかつたならば、どうすると言ふやうな事、其他數點の難點を擧げて労働説の實際的のものでないと云ふことを説いて居る。之が大體ウイロービイの考であるが、之に依つて考へて見ると労働説と云ふものは頗る不完全な考へ方である、其労働説を基礎として立てた所の勞果全收權、其勞果全收權に基いた所の餘剩價值論と云ふものも亦不十分不完全なものであると云ふ事は當然の結論として言はれなければならぬのである。

三 餘剩價值論の方法・歸結・抽象

第一に餘剩價值論の方法である。先に述べたやうに搾取被搾取といふ秘密は此餘剩價值論に依つて曝露されたと言はれて居るのである。即ち今日の經濟上の不正不當と云ふものがどうして起つて來るか、と云ふ事は、此餘剩價值論に依つ

て分つたとマルクス自身も考へエンゲルスも唱へて居るのである。其言葉を翻譯して考へて見ると、搾取することは要するに資本家が労働者の労働の結果を盗むと云ふことに翻譯して宜しい譯である。當時のマルクスは、ブルードンの影響を烈しく受けて居つたので斯う云ふやうな考が盛んに猛烈に出たのである。そのブルードンは財産と云ふものは略奪であると云ふことを言つて居る。「財産とは何ぞや」と云ふ著書の中に於いてさう云ふことを説いて居るのであるから、その點から併せ考へて見ても、マルクスの説いて居る搾取る或は吸上げるとか云ふ言葉は、之を盗むと云ふ言葉に翻譯して一向差支ないことと思ふ。偕て盗むと云ふ言葉に翻譯して考へて、今日の資本主義經濟組織の不正は、資本家が労働者の成果を盗む所に存すると言へると見なければならぬ譯であるが、然らば盗むと云ふことは何故悪いか、一體どう云ふことが盗むと云ふことであるかと云ふことを更に考へて行かなければならぬ譯である。假りにエンゲルスの説に依つて六時間働けば宜いのを、更に十二時間働くのだから、此六時間働いた所のものを資本家が持つて行くのが不正だ、之が不當だとする。それだけの成果を盗んで行くと云ふこ

とを何故不正と言ふかと云ふと、それは當然この六時間も労働者に歸すべきであるのに、資本家が取つて行くから不正である。斯う云ふのであらうと思ふ。けれども盗むこと自體が悪いとしても、どう云ふことが盗むことであるかと云ふことは、随分時代に依り社會に依つて異なるものである事は、*Westernark* が *The Origin and Development of Moral Ideas* の中に澤山の例を擧げて居るのでもわかる。例へば晝の泥棒は罪がない、夜の泥棒だけを罰する。首尾好く盗み了はせた窃盜は罪がない。まご／＼して盗みつゝある間に捉つた者だけ罰せられる。或は人の管理に屬して居らないと見ゆるやうな處置をしてあつた物を取ると云ふことは何等罪がない。管理して居つたのが明かな物だけについて罰する、其他色々雑多な例を古今東西に亘つて列擧してゐる。斯くの如く考へて見ると、どう云ふことが盗むと云ふことであるかと云ふことは、其時代に依つて分けて考へなければならぬ譯である。従つてどう云ふことが盗むことであるかと云ふことは、國家の法律とか社會の慣習とか云ふものを豫想しなければその概念がはつきりしない。斯う云ふものを此社會、此國家に於いては窃盜として論じ、之を罰すると云ふ法律があ

り慣習があつて、そこで盗むと云ふ概念がはつきりして来る譯である。従つて今六時間の餘剰時間を働いたものを、資本家が取つて行くと言ふことは盗みだと言ふならば、それを盗みだと云ふことを認める國家の法律、社會の慣習を豫想しなければならぬ。さうすればこの不正と云ふことは唯經濟的エコノミックに考へられ得ることではなくして、法律とか或は慣習とか或は道德とか云ふ方面から考へて見なければならぬ譯である。従つてそれが不正である、盗みであると云ふ時には、マルクス及びマルキシストは經濟と云ふ活動の外に、更に法律とか慣習とか云ふものがあることを許して居なければならぬ筈である。然るに、これは後で述べる筈であるが、彼等マルキシストは所謂唯物史觀の考へ方に依つて、國家社會の基本現象基
本事實は經濟であつて、法律なり道德なり慣習なりと云ふものは其結果として生れて來たものであると云ふ考へを有つて居るのである。即ち經濟、法律、道德等には時間上の前後の關係を付けて見て居るのである。然るに前述の理由に依つて、それは時間上に前後の關係があり得るものでなくして、經濟活動と云ふものと法律、道德、慣習と云ふものとは同時に存在して居なければならぬものであるから

して、其點に於いて彼等は之を不正だと言つた其時既に方法論上の誤謬をやつて居ると言はなければならぬ。其方法論上の誤謬であると云ふ事を指摘したのが R. Stammler の *Wirtschaft und Recht* でこの書の論點は全く其處にあるのである。

それから餘剰價值論の歸結であるが、餘剰價值とは一體どう云うことを言ふのであるか。彼等は繰返して餘剰價值論に依つて現代資本主義のからくりがすつかり分つて來た、今日の不正と云ふことが曝露されて來たと云ふことを述べて居る。そして今日の資本主義經濟組織が不正であり不義であるならば、直ちにこれを打破つて正義な公正な社會に立直して行かなければならぬ筈である。だから彼等が餘剰價值論を喧しく言ふのは、實は現代の社會を破壊して直ちに理想の社會を實現して行かうと云ふ點にあらねばならないので、餘剰價值論は直ちに社會革命と云ふ事を豫想して居たのである。而してマルクスがさう云ふ意氣に又さう云ふ考に熱して居たのは四三年から四四年の頃であつて、四三年にはライオン新聞の發行を禁止され直ちに巴里に行つて、そこで經濟學を勉強してゐる。其經濟學を研究したのは主にブルードンの影響、寧ろブルードンの指導を受けてなして

居つたのであつて、従つてその頃の考と云ふものは何處までも今日の資本主義經濟組織は不正不義の社會であるから、之を直ちに破壊して仕舞はなければならぬと云ふ思想に燃えて居つたのであつて、前述の如く四年の十一月には「新ライン新聞」の中に革命的恐怖主義と云ふやうなものを謳歌して、舊時代の死んで行く惱み、新時代の生れて来る惱みと云ふものを縮めて行くには、我々は革命的恐怖主義を斷行して行かなければならぬと云ふやうな事を言つて居つたのである。然るに其後彼の考は段々に變化して、餘剩價值論の歸結と云ふものは頗る平凡なことに終つて仕舞つた。謂ふ所の平凡な結果と云ふのは何であるか。正常勞働日(Normal-arbeitsstag)を法律で規定して貰はねばならぬと云ふことを信ずることが餘剩價值論の歸結であると云ふ風になつて來たのである。それはどう云ふことであるかと云ふに、一八六八年に、資本論第一卷が出たのであるが、先に述べた通り、其中に餘剩價值論を詳しく論じてあるのである、その詳しく論じた終りに、餘剩價值論に對する歸結を求め、正常勞働日と云ふものを法律に依つて決めると云ふことになつて行つたのである。謂ふ所の正常勞働日とは、最少勞働日と最大勞働日との其中

間に位する所のものである。謂ふ所の最小勞働日とは段々必要勞働時間が短縮されて、四時間だけ働けば十分勞働者が生活することが出来る、三圓得ることに依つて生活が出来るやうになつたとすると、此四時間が最小勞働日である。最大勞働日と云ふのは勞働者がもう之以上働けば倒れて仕舞ふと云ふ勞働者の最大の力を盡すことである、例へば十二時間働いて居つたものが、十六時間も十七時間も働く時は勞働者は倒れて仕舞ふ。最小勞働日と最大勞働日との間の極く正常な一定の八時間なら八時間と云ふ時間がある、それを法律に依つて規定して貰はなければならぬと云ふのである。然るに今日から見れば此正常勞働日と云ふものは、國際勞働會議でもう殆ど議決になつて居て、各國は其勞働會議の結果として色々之を實地にやつて居ると云ふやうな譯であるからして、今日では殆ど怪しむことなく之を行つて居るやうな具合である。それをマルクスは餘剩價值論に依つて現代の秘密を曝露したと云ふやうな大袈裟なことを言ひながら、今日では誰も怪まずにやつて居るやうなものを歸結としたのは、前の一八四三年、四四年、四八年の革命的恐怖主義を謳歌して居つた時と、資本論の第一卷の一八六七年頃にな

つた時とでは、全く彼の考が異つて来たからなのである。即ちもう一八六七年以後の資本論以後のマルクスと云ふ者は謂はば極く尋常一様の經濟學者になつて仕舞つて、以前述べて居たやうな共產主義、社會主義の寵兒として働くと言ふやうなことがなくなつて仕舞つたからではなからうかと察せられるのである。詰り正常労働日を決定すると云ふやうなことは所謂泰山鳴動して鼠一匹と云ふやうな譯で、そのためエンゲルスの如きはマルクスの死んだ翌年の八四年に彼の *Die Elend der Philosophie* を改竄して第四版を出したが、その序論の中に次の様なことを書いて居る。マルクス及び我々は一生懸命になつて此餘剩價值論を以て今日の不正不義と云ふことを論じたのである。併しながらそれは唯我々は餘剩價值と云ふことが今日の經濟組織の中に事實として存在すると云ふことを言つただけで、何等それ以上のことを言つたのではない、と。嘗て餘剩價值論から今日の不正不義を唱へ、その不正不義の爲に革命を斷行しなければならぬと言ひ、而もマルクスの死んだ翌年に至つて我々は唯其事實を言つたに過ぎない、それ以上を言つたのでないなど、いふのは、如何に彼等の思想に變化があるかを示してゐるものである。

最後の抽象と云ふのは餘剩價值論が餘り抽象論であると云ふことである。搾取されると云ふことを能く言ふが、搾取する者は誰であるか。これに就いてマルクスは餘程變なことを言つて居るのである、搾取する所の者はそれは工場經營者であると云ふのである。販賣する商人は搾取者ではないと言つて居る。考へて見ると労働者は生産者として搾取されるかも知れない。併し生産者として搾取される外に尙ほ消費者として搾取される。商店に行けば一圓のものを一圓二十錢で買つて來なければならぬのである。此二十錢だけは搾取されると云ふことになる。又例へば酒税を課せられるやうなことがあると假定すると、彼等は納税者として搾取されなければならぬ。又彼等が土地を借りて家を建て、居るとか、或は土地と家とを共に借りて居るとか云ふ場合には、地代や家賃を搾取されると云ふやうな事もある。マルクスは搾取されると云ふことを喧しく言ふが、それは唯労働者が生産者として搾取されると言ふことだけを見て、消費者として納税者として地代、家賃の支拂者として搾取されると云ふことを見逃して居る。のみな

らず或る工場で出来た所の生産品を商つて利潤を得て居る商人は搾取者ではなくて唯共同の享受者である、即ち商人は唯工場經營者が搾取した所のものを共同に享受して居るに過ぎないから、彼等商人は共同の享受者であるけれども搾取者ではないと云ふ所からして、マルクスは資本論の五二七頁に利潤(Profit)利子(Zins)利得(Handelsgewinn)と言ふやうなものは何等搾取したものではない、これは工場經營者が豫め斯う言ふやうなものを差引いて自分の製品を賣捌いて居るのであるからして、商人が斯う云ふものを取つた所でそれ等は搾取ではないとを述べて居るのである。然らば一體工場經營者が何故自分の製品を値引して卸してやるかと云ふ事自體が分らない。元來取引の關係であるとか、或は各人の間の利害の關係であるとか云ふものは、實際に於いて非常に複雑になつて居るのであるが、マルクスはそれを唯單に抽象して見たために、かゝる商人は搾取するのでなくして、搾取する者は工場經營者であると言ふやうな議論になつて來たのであらうと思ふ。其處にマルクス餘剩價值論が非常に抽象的なものであると云ふ理由が存在して居るかと思ふ。

—昭和三年八月文部省思想問題講習會講演—

六 階級闘争論の倫理的批判

—本論はマルクス及びマルクス主義の階級闘争論を對象としてそれを批判するのである—

一 「階級」の意義

それは多くの場合でも同様であるが、特に或る自分の思想を世間に向つて宣傳しようとするに當りては、先づ第一に、そのモットーになる言葉を擇ばなければならぬのであつて、それが巧に擇ばれたか否かに依つてその宣傳力に甚しき相違が起つて來る。同じやうな思想であつても標語の取り方の巧な者は非常に強く、且つ廣く宣傳されるのに、その標語の取り方の不味い者は、たとひその思想は立派なものであつても一向宣傳されずに終ることがあるのである。マルクスの書物を

讀んで感ずることは、彼の標語の擇び方が如何にも巧であるといふことである。マルクスの思想が多くの社會主義的思想の中で、最も廣く世界的に宣傳されてゐるやうであるが、そうなつた原因の一つは、恐らく此の標語の擇び方が、實に巧妙であるといふ點に存するかと思ふ。

階級闘争といふ言葉の如きも矢張りその一つであつて、階級闘争といふ言葉自体が何となく無産者の氣を唆つて、その結束を促し、有産者、資本家に對して敵對心を懐かしめるやうな、微妙なる力を有つてゐる言葉であつて、而してマルクスや、エングルス等は到る所に於いてその巧なる標語を操つて巧みに讀者の氣を唆つてゐる。今その二三の例を擧げて見よう。「すべて從來の社會の歴史は階級闘争の歴史である」(Manifest, S. 9) (宣言書には此他に猶一七頁、二三頁にも同様な文句がある)。或は「無産者、即ち社會の最下層に在る所の者は、官僚社會を形成してゐる所の上層建築を吹き飛ばしてしまふに非ずんば、到底その頭を擡げることが出来ない」(Manifest, S. 17) とか、或は「文明の基礎は一階級が他階級を搾取することに存するが故に、文明の全發展は常住の矛盾の中に進動する」(Ursprung der Familie, S. 144) とか

は「被壓迫階級は階級對抗の上に建てられてゐるあらゆる社會の生活條件である。(中略) 被壓迫階級が解放されることが出来るべきであるならば、その場合は既に獲得されたる生産力と、現存してゐる社會的設備とが最早相兩立することが出来ない階段に到達された時であらねばならぬ。(中略) 革命的要素が階級として組織されるのには、一般的に舊社會の内部に於いて開展することの出来た一切の生産力が成熟してゐる事を必要とする」(Das Elend der Philosophie, S. 181) とか、或は「自然生的生産發展を持つ社會に於いては——現代も亦それに屬してゐる——生産者が生産方便を支配せずして、むしろ反對に生産方便が生産者を支配する。かゝる社會に於いては、すべての新しい生産の槓杆は必然に生産方便の下に生産者を奴隷にする所の新しい方便に急變してしまふ」(Anti-Dühring, S. 314) などといつてをる。(此等の他にもかうした論述は猶澤山ある。) 以上で分るやうにマルクス及び其一黨は寔に巧に階級闘争なる語をかゝげて、それによつて大衆の心を擱んで之を煽動するやうな言葉遣ひをやつてゐる。かやうに標語の取り方は實に巧妙を極めてをるが、それはそれとして、マルクスの階級闘争論といふのは歴史は必然に搾取

階級と被搾取階級との階級闘争の歴史であるといふのである。

そこで吾人はその階級闘争論を検討するに當り、先づ第一に謂ふ所の階級とは如何なる者であるかを吟味しなければならぬ。エンゲルスはその著アンチ・デュリング(一九一四年、八版、三〇三頁)に於いて「社會に分業が起るに随つて、その分業が基礎となつて、社會的階級が生じたものである。即ち分業の法則はやがて社會階級分裂の基礎を爲すものである」といふ言葉を以て階級の意味を表はして居る。しかし若しさう云ふやうに分業から社會階級が生じたといふことであれば社會階級とは職業階級といふと同意義の者となつてしまふであらう。然るに職業階級が社會階級であるといふことになる、社會階級といふ者は實に分らない者にならねばならぬ。何となれば分業とは人々の執る所の職業若しくは作業が、何等原理の上に於いてなく、單にその形の上に於いて甲と乙とによつて異なることをいふものである。例へば工場に働いてゐる職工と、田圃に働いてゐる農夫とは、少くとも作業としては違つてゐる。加之同じく工場に働いて居つても、職工達の執る所の作業はその持場々々によつて種々に分れて居るのである。随つてかうし

た分業によつて、社會階級が生れたものであるとしたならば、工場労働者と農民とは別々の社會階級に屬してゐる者であらねばならず、又同じ工場労働者であつても、その職業如何に依りて別種の階級を作らなければならぬわけである。是は社會闘争論の説いてゐる搾取階級と被搾取階級との對立の意味ではない。此等兩種の階級とは、さう云ふ職業別の如何に依つて分れたものを言ふのでなく、工場労働者や小作百姓やはむしろ搾取せられる一つの階級に屬してゐる者と見られてゐるのである。それ故にエンゲルスの分業から階級が生じたと云ふ風に説くのは、マルクスの意を得たる者ではない。

此等マルクスやエンゲルス等の前に佛蘭西のジュアン・ポール・マラー (Jean Paul Marat) も階級闘争といふことに注意して佛蘭西革命は畢竟階級闘争から起つたものであると言つて居る。

然らばその謂ふ所の階級とは何であるかと言へば、マラーは財産の有無及び其大小若しくは多寡に依つて生ずる所のものであると説明して居る。しかし是も亦社會闘争論で説いてゐる階級ではない。

然らばマルクス其人は階級を如何に説明してゐるかといへば、彼は階級闘争と云ふことを彼の思想體系の中心概念としておきながら、而も之を明瞭に定義してゐる所は無いのである。僅かに之れ有るは浩漭なる氏の著作の内に、私の見たる限りに於いては、僅かに資本論第三卷第二部の終りに説いてゐるだけのやうである (Hamburg, 1894, S. 421-422)。

其處にどう説いてあるかといへば、資本主義的生産方法に基く所の近代社會は三種の階級から成立してをる。第一種は唯單に勞働力だけを有つてゐる階級であり、第二種は資本を有つてゐる階級、而して第三種は土地を有つてゐるそれである。此等三種の階級は各彼等の生産に参加する形を異にしてゐる。即ち勞働力を有つてゐる者はその勞働力を、資本を有つてゐる者はその資本を、土地を所有してゐる者はその土地を提供する事に依つて各生産に参加してをる。随つて彼等の所得の形も亦それ〴〵異つてゐる。勞働力を提供した所の者の所得は、勞銀、又は賃金と謂はれ、資本を提供した所の者の所得は、利潤と謂はれ、土地を提供した所の者のそれは地代と謂はれる。此等の賃金、利潤、地代は、全く異つた性質のもので

あつて、此の三つの收入に依つて生活してゐる所のものは皆それ〴〵異つた性質の上に生活の基礎をおくものであつて、従つて異つた階級を形成し、それに屬してゐる所のものである。是が纏て階級と稱する所のものである。斯う云ふ風に説いてある。然るに此の資本論は未だ完了に至らずして絶筆になつてをるので、最後の第七編第五十二章階級論は僅かに二頁弱ばかり論述されてゐるだけで、従つて右に説明した以上、更に詳細なことを聽くことは出來ないのである。

それで、此の資本論の中にある所の勞銀と利潤と地代とに依つて生活する所の三階級、即ち勞働者、資本家、地主、此の三階級は之を社會上の事實に當て嵌めて見て、果して階級と云ふ觀念を明瞭に限定することが出來るかを吟味して見ると、中々さうではない。實際上の社會には資本家でもあり地主でもある所の、その中間の様なものもあり、勞働者でもあり、資本家でもある所の、その中間の様なものもある。即ち社會上には勞働者、資本家、地主と判然たる輪廓を有つて階級が對立してゐるといふよりは、それ等からいへばむしろ中間階級と觀られ得る者が多く存在してをるものである。加之、勞働者、資本家、地主といふが中にも、皆それ〴〵更に小別す

ることが出来る。例へば労働者といふが中には所謂熟練職工と、不熟練職工とが各々その利害を異にして相對立してゐることがあり、又資本家、地主の中には大資本家、大地主と小資本家、小地主とが其利害を異にしてゐるが如くである。かやうに労働者、資本家、地主等が更に小別されるれば、そこに下級階級ともいふべきものが生じて來る譯である。かやうに謂ふ所の三階級の外に中間階級、下級階級が生れて來るのであるが、その他に猶第三には推移階級とも名づくべきものさへある。例へば甲の階級から乙の階級へ移る、労働者から資本家になるといふやうな場合である。斯くの如く社會的階級は種々雜多の者が混在してゐるもので、労働者、資本家、地主と云ふ極めて單純なる三階級から構成されてゐるものではない。換言すればこれで階級の意義が明瞭にされたといふことは出來ないのである。それ故マルクスは階級といふ語を用ゐるに當つては、多くの場合之を定義的に説くことを避けて、單に列舉的に述べてゐる。共產黨の宣言書の劈頭に、これまでの歴史はすべて階級闘争の歴史であると云ふ文句が陳べられてをりながら、然らばその謂ふ所の階級とは何であるかと云ふことに就いては、何等之を明瞭に限定するこ

とをせずに、唯その後列舉的に自由民と奴隸、大名と家來、組合の親方と弟子、換言すれば、壓迫するものと、壓迫せられるものとの階級、是等が從來絶えず相對立して互に闘争をつゞけて來たものであると云ふ風に、列舉的に述べてゐるに過ぎないのである。

それ故マルクス及び其一黨は階級闘争と云ふことを盛んに説くのであるけれども、其階級とは何ぞやに就いては、何等科學的正確さを以て述べてゐる所はなく、唯所謂機會主義に依つてその時、その時に都合のよいやうに意味を變更して行くだけに過ぎないやうに見えるのである。機會主義に依つて意味を變更することは所謂戰術としては寔に都合のよいことであつて、即ち味方に取つて都合のよい者は、それを自分達の階級に屬する者として仲間扱ひをなし、自分達の階級に組入れて都合のわるいものは何とか理由をつけて、その階級の外に出してしまふのである。

これに就いてはクローノー(H. Cunow)——マルクスの辯護者である——の *Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staatstheorie* (1923) と云ふ書物は可なりマルクスを辯護し

てゐるものであるが、此の階級闘争、階級といふことに就いても亦同様に辯護して居るのである。その辯護に曰く、必ずしも所謂科學的正確さを以つて階級とは何ぞやと云ふことを定義する必要は無い。その時その時の意味で階級といふことが判りさへすればよい。だからして階級の觀念が明かでないからと言つて、それがマルクス主義の缺點であると云ふことは出来ないと言ふ辯護を與へてゐるのである(Bd. II, S. 56)。

然し乍らこれは全く道理といふ者を無視した辯護であるといはざるを得ない。もしマルクス主義を以つて一つの思想體系と見ず、唯單なるアジテーションの爲のスローガンに過ぎないとしたならば則ち已む。若し然らずして苟くも一つの思想體系として見られると云ふことであるならば、必ずや階級とは何ぞやと云ふことを判然究明してかゝらなければならぬ筈である。況んや次に述べる通りマルクスは階級闘争といふことを一つの歴史原理と觀ようとしてゐる位である。その位ならば、尙更階級と云ふ概念を明晰に限定して置かなければならぬ筈であると思ふ。であるからクルノーの辯護は全く辯護にならないのである。要す

るに階級といふ言葉はマルクス主義に於いては甚だ重要な位置を占めてゐる概念でありながらその意味は甚だ漠然たるものであつて、何等科學的正確さが與へられてをらぬのである。

二 「階級闘争」の役目

私は階級闘争と云ふ概念は、マルクス主義の中に於いては二つの役目を演じてゐると思ふ。一つは歴史を説明する歴史原理としての役目であつて、他は無産者、乃至は労働者の運動戰術としてのそれである。

先づ歴史原理としての階級闘争について述べれば、前にも引用した處の共産黨の宣言書の文句であるが、即ちすべて從來の社會の歴史は、總て階級闘争の歴史であると言ふ彼の文句であるが、それによれば人間の歴史は總て階級闘争に依つてのみ進展して行くものであると説明してゐるのである。而してマルクスに於いてはその階級と云ふものは「共産黨宣言書」の中に在る通り、壓迫するものと、壓迫されるものとの二つが對立してゐるものであり、而してその二つの階級が出来て來

る所以はその當時の經濟事情に依るのである。要するに此等二階級の反對と闘争とからして歴史の進展は生れて來るものである。即ち進歩は唯反對から生じて來るもので「反對なくして進歩があることは出來ない」とはマルクスがその謂ふ所の辯證的發展のモットーとして高調してゐる所の文句である。マルクスは「共產黨宣言」並に「哲學の貧困」の諸所に於いて重ねてこの義を説いてゐる。つまりその時代時代の經濟事情の必然の結果として種々の社會階級が現はれる。其社會階級は種々あつても、所詮利害が正面的に相對した所の壓迫階級と被壓迫階級とに別れる。此の相對した二種階級の闘争によつて歴史は進展する者である。若しかうした闘争がなかつたならば、人類の歴史に進歩はない。斯うしたのがマルクスに於ける歴史原理としての階級闘争の觀方である。かうしたわけであるからマルクスに於ける歴史原理としての階級闘争論は、畢竟彼の思想體系の二つの根本思想の一である所の唯物史觀と同じ思想を意味してゐる者であるといふことなのである。従つて此の歴史原理としての階級闘争論の検討は必然に唯物史觀の検討にならねばならぬ。しかしそれは今此處の問題でない。それは唯物

史觀の検討にゆづるとして、こゝでは單に階級と身分との差別について一言しておきたい。ラッサル(F. Lassalle)は階級(Klasse)と云ふ言葉よりも身分(Stand)と云ふ言葉を多く使つてゐる。即ち佛蘭西革命は第三級團の革命であつて一八四八年の二月革命は第四級團の革命であると云ふ様に Klasse と云ふ言葉よりも Stand と云ふ言葉を以て表はして居る。然らばマルクスに於いては如何であるかといふに、彼は Klasse と Stand とを差別して用ゐてゐる所もあり、混同して使つてゐる所もある。例へば「ヘーゲルの法理哲學批判」(Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie)と云ふ書物の中に於いては兩者を混同して用ゐて居り、「哲學の貧困」(Das Elend der Philosophie)と云ふ書物の中に於いてはハツキリ之を差別して使つてゐる。

然らば階級と身分とを差別して使つてゐる時には、どういふ風に差別してゐるかといへば階級と云ふ方は自然に生じた社會的層別又は團別であつて、身分と云ふのはその社會的區別がある政治的權力例へば國家に依つて認可せられたる場合を指してその認可せられたる公權私權の上に判然たる差異が認められたる場合を指してゐるやうである。重ねていへば階級は唯社會的に自然に生じて來たもので、それ

に對して何等政治權力によつて認められてゐる公權も私權もないが、身分といふ者はそれと異り、ある政治的權力がその層別、或は團別を承認して、それに對し或はそれに屬する者に對して或る一定の義務を負はせたり、或は又一定の權利を與へたりしてゐる者である。斯う云ふやうに差別されてゐるやうに見える。

さてさういふやうに階級と身分とを分けて居るが、それを分けずに兩方を混同したやうな概念に近い所の社會上の分裂は、これは何處の國の歴史にも、又多くの時代に於いて觀る所のものであつて、或は階級と言はれ、或は身分と言はれる。例へば我國史に於ける侍と百姓、町人とは一種の社會的階級である。又上代に於ける部曲の民と云ふが如きものもやはり社會的階級である。

さう云ふやうに判然と階級とか、又判然と身分とかいふやうにそれを區別しない所に社會的分裂があつたことは歴史上確かなことである。併しながら社會的分裂の現象その者が必ずしも歴史でなく、又分裂した爲に、その分裂した者が互に闘争すると云ふこと自體も亦必ずしも歴史ではない。何となれば社會が進歩すれば、その組成分子の間に複雑なる分化の起き、その事實である。その分化を

分裂といふならば社會の進化又は進歩といふことには分裂のあるのは事實である。しかしながらそれは唯半面だけの事實であつて、他の半面には分化と共に、若しくはその中に即して統一といふ事實がある。ディフレンシエーションとインテグレーションとは常に相伴つて、決して離れない社會進化の事象である。若し分化若しくは分裂だけがあつて、統一がなかつたならば、社會は生物などの場合に於けると同様に、むしろ死滅又は崩壊してしまふものであつて、決して進歩などのあるべきものでない。

階級の分裂その者が歴史でないことは右に述べた通りであるとして、然らばその闘争といふことはどうであるかといへば、それも亦前述の分裂と同様である。闘争は唯結合の豫想の上のみ可能なことであつて、結合がなくなつて闘争はあり得ない。それが一つの社會上の事象である限り、加之、觀方によつてはワルトマン——修正派社會主義者の一人である——が論じてゐるやうに (Woltmann, Der historische Materialismus) 部族、民族等の間に存する階級闘争の中に根本的な一致點を見出して、それによつてその闘争を緩和若しくは撲滅せんとするのが、寧ろ人類歴史であり、

國民の歴史であるとも観られ得るのである。即ち道德上の偉人が世界の舞臺に出現した場合には多くさうした現象を観るのである。即ち彼等はいづれも皆既存の社會階級を打破して所謂四民平等の原則を確定し實現せんとした者である。この如き世界的事實は到底階級闘争論の見解を以てしては解釋することの出来難い事實である。猶特殊的に各國の國民史を繙いて觀て、それが果していづれも階級闘争論の見解で解釋が出来るであらうか。わが日本の國民史はどうであるか。闘争の方面は單に表面上の一現象であつてその中心には非常に鞏固な統一力があつてそれ等を結合してをる。日本の歴史は分裂闘争の歴史であると觀るよりは、むしろその統一力の發展史であると觀るを以て、最もその真相を把捉した者と思ふ。果して然らば此一事を以てしても、歴史は階級闘争歴史であるといふ全稱肯定命題は破れなければならぬ。

併し階級闘争が歴史であると言ふのは、前に述べたやうに、それはマルクス主義に於いては歴史原理の根本的なものでなく、歴史原理の根本は唯物史觀である。それ故に歴史原理としての階級闘争の役目を根本的に検討せんが爲には、どうし

ても唯物史觀の中に這入つて行かなければならぬのであるが、是は今こゝで論じない。

三 運動戰術としての階級闘争

前に述べた如く、階級闘争と云ふ言葉自體が、人心を興奮せしめて、或る結束又は團結を促さしめ、而して更にその團體的運動を起さしむるのに、極めて適切なる微妙な力を有つてゐるかの如く見えるのである。随つて階級闘争なる標語はマルクス主義の中に於いては歴史原理としての役目よりも、寧ろ實際運動に於ける一種の御題目として戰術上の役目の方を最も顯著に働いてゐるやうに見ゆる。マルクスは共產黨の宣言書に於いて、吾等共產主義者の直接の目的は、其他一切の無産者黨のそれと同じものである。それは他でない。無産者が相結んで一つの階級を形成し、依つて以てブルジョア階級の支配を覆し、その無産者の手に政治的權力を收得してしまふことであるといつてをる(Manifest, S. II)。又その宣言書の最後の結論は、「それ故に萬國の勞働者よ、參加せよ、加盟せよ」と云ふのである。即ち勞

働者は個々分離した孤立の力を以てしては到底資本家の勢力に對抗して、その當然の権利と自由とを恢復することが出来ぬ。そうした場合には彼等は銘々で自分の生活を支持して行かなければならない必要上、労働契約をなす場合如何なる不利、苛酷な条件であつても、資本家の提出したまゝに之を承認しなければならぬのである。

だから労働者が個々獨立した離群孤立の有様に於いては到底資本家に對抗して彼等の十分なる権利を發揮することが出来ない筈である。然らば、どうすれば労働者は彼等自身の本來の権利を恢復獲得することが出来るだらうかと言へば、それは他でもない。一つの團體に團結して、團體の力をもつて資本家に當つて行くといふ途である。斯くてマルクスは飽くまでも労働者を一つの階級に形成して、さうしてブルジョア階級の支配を顛覆し、政治的權力を掌中に握つてしまふと云ふことを考へたものである。彼は「哲學の貧困」の終に於いて屢々階級闘争といふことを激越な筆で書いて、而してジョージ・サンドの「戦か死か。血みどろな戦争か、無か。問題はつまりそうなんだ」といふ語を以て結んでをる(Das Elend der Philo-

sophie)。

然らば労働者を連ねて、之を一つの團體に形成するには怎うすればよいか。どういふ方法が最も有効で而も適切であるか、それは先づ階級意識、即ち敵對意識を涵養し、且つ出来るだけ之を尖銳にすることであらねばならぬ。即ち労働者の意識の中に吾々は労働者である、彼等は資本家である、吾々は壓へ付けられてゐるものである、彼等は壓へ付けてゐるものである、吾等は搾り取られてゐるものである、彼等は搾り取つてゐるものである、彼等は吾等の敵である、そうした敵對意識を出来るだけ強く、出来るだけ鋭く、出来るだけ鮮かに涵養することが、總て彼等無産者をして資本家に對抗して團結せしむる所以の確實にして有效なる途であらねばならぬ。それ故にマルクスは出来るだけ無産者乃至労働者の敵對意識を熾烈にしようと努めてゐるのである。「哲學の貧困」や「共産黨宣言書」の中に於いて労働者に支拂はれない労働に依つて、資本家は彼等の懐を肥やしつゝあるのであるなどと、極めて皮肉な筆を以て、巧に人の腸を抉り、感情をわき立たしめてをる所が尠くない。

又エンゲルスはその「アンチ・デュリング」の中に於いて、吾々は今日一部の人間が、何か犠牲といふことを言つて犠牲と云ふものは大變貴いものである、又社會と云ふものは總て犠牲に依つて支配されてゐると云ふことを言ふて居るが、その謂ふ所の犠牲などと云ふものは全くノンセンスなものである。又一部の者は、今日は色々貧民救濟であるとか、或は貧乏になるのを防ぐとか、即ち救貧とか防貧とかの途が大いに開かれてゐると云ふなど言ふけれども、その救貧、防貧、救恤と云ふやうなものはいくらもつまらないものである。そう云ふことをハッキリ意識するに非ざらんば、今日の社會の缺陷を救濟することは出来ない。今日は——曩にいつた通り——一切の生産道具は、生産する所の労働者がそれを使ふと云ふことになつて居らずに、むしろ労働者を壓迫してゐる。即ち今日の社會は使ふ可きものが却つて使はるべき者に使はれてゐる所の社會である。全くあべこべの冠履顛倒してゐる所の社會である。それをハッキリ意識して、その害惡を取除くことをやらなければ、今日の社會の缺陷を直して行くことは出来ないといつてゐる。

彼等は飽くまでも階級意識、敵對意識と云ふものを強め、且つ明かにせんとして

ゐるのである。それ故に彼等の立場から言へば「敵對意識は相對してゐる所の階級、即ちブルジョア階級の倒れるまでは飽くまでも之を強くして敵愾心をゆるめるやうなことは決してあつてはならない」と考へるのである。それで彼等の最も忌み嫌ふ所のものは妥協である。僅の利益で眩まされて、所謂資本家的權力と妥協することは最も惡むべきことであるとい考へてゐる。例へばベルンシュタイン(Bernstein)の如く修正派の人でさへ「妥協は吾人の主義の恥づべき放棄である」といひ殊にリープクネヒト(Liebkecht)のやうな正統派に至つては實に痛烈なる言葉を以て妥協を排して居る。是等は皆彼等が階級闘争を一つの戰術として考へた以上には、必ず左様にならなければならぬ筈である。

加之階級闘争を彼等の戰術に使ふと云ふことはそれ自身彼等のシステムに對し自家撞著を含んでゐると言はねばならぬ。若しこの階級闘争が實際効果があると云ふことであるならば、即ち資本主義經濟組織がそれ等の闘争に依つて破壊されるといふことであるならば、それは總て彼等の唯物史觀の主張と矛盾することであらねばならぬ。何となればそうした社會進歩の過程に於いてプロレタリ

アが意欲して爲した所の目的が實現されたといふことでなければならぬから。而してその事はその目的の觀念が、聽て彼等の所謂自然必然的な歴史過程、即ち資本主義經濟組織の現はれて來た歴史過程を打ち破ることが出來ると云ふことであらねばならぬ。これ即ち自家撞著ではないか。

カール・ムース(Karl Muls)はその著「反マルクス論」(Anti-Marx)の中に於いて「階級闘争の觀念は労働者階級の行動が、その階級の目的通りに歴史過程を指し向けて行くことが出來ると云ふことを豫想して始めて了解されることが出來る。何故ならば若しさうでなかつたならば闘争及びその力のポスチュラートは全然無意味になつてしまはなければならぬ。何となればそれは全く無用の者になるから。資本主義的自然法に反對して、或る力を用ゐることを承認することは、やがて自由の理念を豫想することであり、歴史過程の必然性の命題を否定することである」(28)と言ふて居るが、全くその通りであると思ふ。

加之階級闘争をやつて何物を得ようとするのであるかといへば、それは次に述ぶるが如く今日のプロレタリア階級が政治的權力を握り、その握つた政治的權力の

力で經濟的自由を獲得しようといふのであるが、さて闘争の結果目的通りに政治的權力を獲得することが出來たとしてそれで階級闘争は永遠に止んでしまひさうして彼等の懷抱してゐる理想社會が實現されるであらうかと言ふと決してさうではない。假令今日のプロレタリアが旨く今日のブルジョア階級を倒して、彼等が政治上の權力を掌握した所で、その爲にすぐに他の階級は倒れてしまふものではない。論より證據今日のロシアを觀ればすぐわかることである。

それであるからして、レーニンも「經濟と政治」の中に於いて、無産者の獨裁と云ふ時代の中に於いても、階級闘争は依然として存在するであらうとか、又プロレタリアの獨裁時代になつても、階級闘争は消えてしまはなるとか言つて居る。これは明かにロシアの現状を言ひ現はしたものでなくて何であらう。而もレーニンがさう言つてゐるだけで無く、前に説いた處の「哲學の貧困」の中に於いても今日の労働階級が解放され得るのには一切の階級が總てなくなつてしまふことを條件とする云ふ事を言ふて居るし、又マックス・アドラー(Max Adler)は「マルキシズムの國家觀」(Die Staatsauffassung des Marxismus)の中に於いてプロレタリア階級が政治的權力

を握つたにした所で、又その一撃によつて全經濟的搾取を除去し得たにしても、又生産方便の全私有財産をすべて社會有にすることが出來たにしても、それで人間の所有慾や企業慾と云ふものが物質の活動のやうに一朝に盡滅してしまふものではないからして、ブルジョア階級の階級は依然として残つてゆくと説いてをる(S. 104)。マルクスを辯護する所のアドラー、或はマルキシズムをその儘實行に現した所のレーニンでさへ、かやうに一の階級闘争が目的を果して濟んだからと言つて、他の一方の敵對階級が、そう容易に消滅してしまふものではないと言つて居る。さて敵對階級が消滅せざる限りは階級闘争をやめてしまふことは出來ない。階級闘争をやる以上には、前に論じた通りに互に益敵對意識を強く且つ熾にして行かなければならない。かくして階級闘争は愈激烈になり深刻になつて、人生は愈修羅畜生道に墮し、非常に悲惨なものになつて行くばかりであらう。階級闘争によつて人類が救はれるとか、理想の境地に導かれるとか云ふことは殆ど考へられないことである。何となれば階級闘争の動機は自己の權利や利益や自由を獲得しようといふ利己的なものである。利己的な動機で闘争をやつてゐる限りは、其

激烈は智力の發達につれて益募るばかりであつて、全然果てしのない者である。彼の孟子があゝの梁の惠王に見えて、惠王の下問に對して、若し國內の誰彼がすべて皆自己の利益といふことのみを主張したならば、「上下交々利ヲ征シテ、而シテ國危シ」といはれたが、洵に適切なる言である。だからして、前にも述べたやうにラルトマン (Woltmann) は *Der historische Materialismus* の中に、人類の歴史は階級闘争の歴史でなくして、むしろその打破の歴史であると説いてをる。實に階級闘争は道德上から見て、むしろある可からざるものである。その階級闘争を打破することは、總て階級的差別を打破することである。階級的差別を打破することは、やがて人類皆相互に平等の人格として互にその尊嚴を認め、互に敬愛の道に出るやうにすることである。そこにこそ道德の根柢は存在するのである。だから階級闘争と云ふことは道德から見て、決して望むべきことではなく、それを打破すると云ふことこそ倫理的理想である。斯う言はなければならぬのである。

四 闘争の方法とその対象

最後に謂ふ所の階級闘争の目的について論じよう。意思を有つてをる人間が闘争するといふ以上、そこに必ず何等かの目的があらねばならぬ。何等の目的を有たずして闘争するといふことは、意思を有つてをる人間にはあり得ざる事である。しからばその目的は何であるか、彼等マルクス主義者の説く所によれば、今日の資本主義的経済組織に於いては、無産者は、彼等の當然取るべき生産物を他の人々即ち資本家に奪はれてをる。その當然な者を取返さうといふのが闘争の目的である。故に目的は経済的なものである。然るにそれは究竟的な目的であつて、その究竟的な経済目的を達せんが爲に、先づ直接的に政治的権力を掌握しなければならぬと説いてをる。共産黨の宣言書の中に、吾等は吾等の運動によつてプロレタリアを一つの階級に形成し、その團體的力でブルジョア階級を顛覆し、政治的権力を吾等プロレタリアの掌中に收めてしまはねばならぬと云ふことを力説してをる。即ち政治的権力を握るのが、階級闘争の直接の目的であつて、それを通

して究竟的目的たる経済的目的を達成しようといふのである。

さて是が彼等が説く所の階級闘争の目的なのであるが、此事はマルクス主義としては自家撞著であらねばならぬ。何となればマルクス及びエンゲルスは、國家の存在を以て各人の平等自由幸福を害する者となし、國家その者を呪ひ其存在を否認しようと云ふ思想を懷抱してゐるものである。特殊國家の對立は、必然に搾取國家と被搾取國家との對立を惹起する者である。それは一切特殊國家の對立を打破して、世界統一の社會を建設しようといふ目論見を有つてゐるものである。それ故國家に對するマルクスの思想はラッサルのそれとは全く反對なものである。ラッサルの主張してゐた社會主義は國家の力に依り、國家の幫助によつて彼等の社會主義的理想を實現しようといふ所謂國家社會主義である。然るにマルクスのは國家は社會主義の實現にはむしろ妨害になるから、國家をなくしてしまふといふのである。かうした意見のマルクス主義が、國家があつて始めて存在し且つ意味ある所の政治的権力を掌握して何になるか。此點に於いて彼等の説は明かに自家撞著である。かくいふと彼等は説くのである。現代ブルジョア國家

が死滅しても、それでブルジョア階級が即刻に消滅してしまふものでない。其ブルジョア階級を吾々プロレタリア階級の者が政治的權力を掌握して絶滅してしまふことを圖らねばならぬ。それが現代のブルジョア國家から眞の理想的な社會へ至るまでの間の過渡的國家である。その過渡的國家の爲に政治的權力が必要であると陳辯するのである。しかし斯く陳辯したればとて、彼等の目的論を是認することにはならないのである。彼等は政治的權力を掌握することによつて奪はれたる彼等の經濟上の自由や利益や權利を取返へすといふてをるのであるが、政治的目的と經濟的目的とが、彼等の立場から當然結合してゐるといふことが出来るであらうか。若し當然結合するといひ得るならば何故今日の修正派ベルンシュタインなどの所謂國會主義といふ者が認められないのであらうか。それ故に以上のやうな陳辯は彼等の立場を辯護することにならず、むしろその反對派たる修正派の立場を裏書する者である。

次に闘争の方法に就いて考察するにその方法には色々ある。或は無産者、労働者等の利害を代表する議員を多數議會に送り出し議會に於いて勝を制すること

によつて被壓迫階級の自由と權利とを奪回しようとする云ふ方法、その他或は出版或は會合或は街頭に於ける示威運動或はストライキ或はサボターージュ、さう云ふやうに闘争の方法はいくつもある。而して是等はいづれも從來労働運動をやつた人達の實行して來たものである。而してそれに就いてもクノーは矢張りマルクス主義を辯護してゐる。クノーがいふのには階級闘争の方法はかやうに随分澤山ある。然しこれ等の方法も當時の經濟事情の如何に支配されて現はれて來るものであつて、是非ともどの方法を探らなければならぬと云ふものではない。マルクス主義の立場から言へば、それが有効であればどの方法を執つても構はないと言ふてをる。然しながら是は全く誤つた考へ方である。國家主義に依つて適法的方法でやつて行かうと云ふのは正統的マルクス主義のなし得ざる所であることは前既に述べた處である。所謂修正派社會主義が正統派から分離して來た點も實はそこに存してゐるのである。即ち修正派社會主義者はベルンシュタイン等が主張してゐる如く國家の力によつて行かうと云ふ立場に立つてゐるのである。國家の力による他の方法の重なる者は革命的方法であらうが、それは如何

なる根據に於いて是認せられる者であるか。それゆゑクノーのどの方法を取らうとそれは取る者の自由であると云ふことは、全く道徳を無視した考へ方であると言はなければならぬ。だから矢張り階級闘争と云ふことに就いては正統的マルクス主義には色々の缺點があると言はなければならぬ。

—「祖國」昭和四年三月號所載—

七 唯物史觀の倫理的・社會學的・心理學的批判

一 唯物史觀の要旨

唯物史觀といふ思想體系は、それは如何なる思想であるかは、今日に於いては日本の學界に於いても略明白になつてをるけれども、それは單に大綱だけのことであつて、その詳細の論點及び概念については、マルクス主義者、非マルクス主義者、いづれの方にも區々の異見が存在してをつて、一見考へた程簡單な者でない。唯物史觀はいふまでもなく、マルクス、エンゲルス等の世界觀であり、歴史哲學であるが、此語 (die materialistische Geschichtsauffassung) その者は、兩人の中、エンゲルスが始めて創案した語であつて、マルクスにはない。しかしながら其語によつて指示されてをる思

想その者は、それは明かにマルクスの者であつて、エンゲルスは多少それを補訂してゐるに過ぎない。此事はエンゲルス自身も既に承認してゐる所である (Engels, L. Feuerbach, S. 49, Anm.)。勿論個々の論點について、エンゲルスは可なり重大なる改訂を加へてゐる處もあるけれども。

唯物史観といふ語が學術上の命名法から観て、果して妥當な語であるか否か。それに就いても學者間に相當議論のあることであるが (cf. Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, III und IV Aufl. S. 675—676) しかし私は今の場合に於いて、その論説の詮義立てに入るの必要を認めないから、それをば省くとして、直ちにその内容に入つて之を検討する時、私達は少くとも二つの異つた方相をその思想體系が有つてゐることを認めざるを得ない。その一は單に歴史の解釋法、若しくは其法則として觀らるべき理論的方相であり、他は彼等の社會主義の理論的骨格、又はその基礎と觀らるべき實踐的方相である。

純理論的方相の唯物史観は人類の歴史をすべて人類が運営する所の經濟的事情から統一的に説明せんとする思想體系であつて、或は自然的環境の差異特質か

ら、或は人種上の區別から、或は神意の啓示から、其他種々の理論によつて歴史を説明するが如き、もろゝの歴史理論と相並んで存する所の、一つの歴史理論たるに過ぎない。併し唯物史観を斯やうに觀るのは、恐らくマルクス、エンゲルス等の眞意を把握した者ではあるまい。その實踐的方相といふのは、マルクス等が之を以て彼等の社會主義の理論的基礎付けをなした方相を指すのである。

二

私は姑く兩方相に亘つて、唯物史観の要旨を窺はうと思ふ。

マルクス、エンゲルス等は、獨逸風の觀念論的哲學を排斥して、その反對に唯物論的哲學を稱揚し、之を以て唯一なる眞正世界觀としたのである。マルクスは「自分の辯證法は其根本に就いてヘーゲルのそれと異つてゐるのみならず、むしろ其正反對である。ヘーゲルは思惟過程を理念なる名義の下に、一個の獨立主體となし、その者は現實的者の神であつて、現實的者は單に其外的現象を形成してゐるに過ぎぬとしてゐる。然るに自分からいふと、それが全然正反對で、觀念的者は、所詮人

間の頭腦に移置、轉換された物質的者に外ならない」(Kapital, IV. Aufl. I, S. XVII)と
 いつて、原始的に實在する者は物質だけであつて、精神は其作用又は變化の様式に
 過ぎぬ者である。然るにヘーゲルは其虚實を逆轉して精神を以て實となし、物質
 を以て虚となしたのである。彼の唱へたる所の辯證法は實に偉大にして深遠な
 思想であるが、その虚實を顛倒せることは甚だ遺憾な事である。「辯證法はヘー
 ゲルに於いては逆立ちをしてをる、吾人は神祕的な被覆の中に合理的な核實を發
 見せんが爲に、その辯證法を顛倒しなければならぬ」(op. cit., S. XVIII)と強く唯物論
 を主張して、つまり物質と精神との虚實に關して、ヘーゲルの見解を顛倒したのが
 眞正なる世界觀であるとしたのである。

マルクス及びマルクス主義に於いては其世界觀に關する限り、「物質」といふ語
 と自然といふ語とは全く同意義に理解されてをる。「自然は一切の哲學と没交渉
 に存在してをつて、それは同じく自然的生産物に他ならぬ吾等人間の成長する基礎
 である。自然と人間との以外には何者も存在しない。吾人の宗教的空想が作つ
 た高等なる生類は、吾等自らの想像的映像に外ならぬ」(F. Engels, L. Feuerbach, Marx-

istische Bibliothek, Bd. III, S. 24)——エンゲルスの此言はエンゲルスがフオイエルバッ
 ハの「基督教の本質」について其内容を述べた者ではあるが、又一方から見ればそれ
 に假託して自説を述べた者と見ることが出来る。それ故にマルクスに於いても、
 ヘーゲルから分離してフオイエルバッハに結び付いた思想上の徑路を明かに窺
 ふことが出来る。「概念の辯證法、即ち哲學者等のみが知つてゐる神の鬭争を撃破
 したのは誰か。フオイエルバッハ。古屑や、又は無限の自覺の代りに、『人間の意
 義』——人間は人間である以上に何等か他の意義を有つてゐる者であるかのやう
 に——『人間の意義』でなく、『人間其者』を据ゑたのは誰か。フオイエルバッハ。唯獨
 り、フオイエルバッハのみ。」(Die heilige Familie, Lit. Nachlass, Bd. II, S. 149)と説いたり、
 或は、「フオイエルバッハに至つて始めてヘーゲルの立場に立つてヘーゲルを完成
 し、批判した。何となれば彼は彼は形而上學的な絶對精神を『自然の基礎に立てる現實
 の人間に解いたから。又彼は宗教の批判を完成した。何となればヘーゲルの思
 辨と同時に、一切の形而上學の批判として、一つの偉大にして卓越した基礎概念を
 立案したから」(op. cit., S. 248)と述べたりしてヘーゲルの觀念論を唯物論に引き直

してしまつた處のフオイエルバッハの功績を讚歎した。けれどもマルクスから觀れば、フオイエルバッハの哲學は猶未だ不徹底な者であつて、フオイエルバッハは哲學者として中途半端な者であつた。氏は下方は唯物論者で、上方は唯心論者であつた。自分達はもつと徹底した唯物論者であらねばならぬとして、彼等マルクス、エンゲルスはもつと突込んで「共產黨宣言書」「哲學の貧困」或は「經濟學批判」等の中に於いて其唯物論を説いてをる。就中「經濟學批判」中の「人間の存在を規定する者は人間の意識でなく、むしろ其反對に意識を規定する者は社會的存在である」(Zur Kritik der politischen Ökonomie, herausgegeben von K. Kautsky, 1897, S. XI)は最も簡明に彼等の唯物論の立場を表現した文章である。斯やうに原始的に實在する者は「斯くある者」であり、「感覺的な者」であり、「自然的な者」であり、「物質的な者」であつて、「當さにあるべき者」「觀念的な者」「非自然的な者」「精神的な者」は、單に第二次的な存在を有つてゐるに過ぎないのである。

三

かくてマルクス及びマルクス主義者の世界觀は唯物論に相違ないのであるが、併し其唯物論といふ者が、エンゲルスなどに言はしめると、それは十八世紀にあつた所の古風な唯物論とは異つてをるといふのである。古風な唯物論では、物質といへばその者としては黙々として静止し、何等活動といふことのない、變化といふ事のない、猶更、成長發展といふことのない、常住恒一の死んだやうな者であると理解するのであるが、近代の唯物論はそんな見地は取らない。生物は言ふに及ばず、諸天體、一切の木火土金水、及び其等の複合體、其等は常に流轉し、變化し、發展して行つてをると觀てをる。而して又人間の社會及び其歴史も亦、近代唯物論には決して除外例でない。それも亦唯物論的に解釋し盡くさるべきであつて、人間の社會、其歴史を除外するが如き唯物論は、決して眞正な唯物論でない(Engels, Anti-Dühring, S. 10 斷章取義)。かうした意味のことを論述してをる。要するにマルクス、エンゲルス等に依れば、古風な唯物論は唯機械的唯物論であるに對して、近代的唯物論は發展史的唯物論であり、古風な唯物論は唯自然のみを説いて、人間の事をば除外するのであるが、近代的唯物論は自然界の事は言ふに及ばず、人間界の事をも其繩張

の中に入れて論ずるのである。否唯物史観といふ立場からいふと、その人間界の事はマルクス、エンゲルスの唯物論の中心題目なのである。

唯物論——物的自然を原本的實在となす所の唯物論と、到底離すことの出来ない一つの思想がある。それは謂ふまでもなく必然論であり、特に人間に關していふ限り必至論である。マルクス主義に取つては上は日月辰星から、下は山川國土に至るまで、一切の物的自然をなしてをる者は、すべて機械的因果的に動かされてゐる者なることはいふまでもなく、普通常識の場合、又はむしろ多くの哲學體系に於いて、物的自然と區別されて自由な者として認められてをる所の人間でも、マルクス主義では、物的自然と同様に必然的機械的に動かされてをる者で、獨逸風觀念論に於いて主張されてをるやうな自由なる者は、決して有る者でないと斷するのである。マルクスは「人間は彼等の生存の社會的生産に於いて、彼等の意思から獨立した、従つて必然的な一定の關係中に入り込む。即ち彼等の物質的生産力の一定の發達段階に相應する所の生産關係中に入り込む。此等の生産關係の總體が、應て社會の經濟的構造を形成する。即ち法律的政治的上層建築の現實的な基礎を形

成する。一定の社會的意識形式は畢竟その經濟的構造に相應する者であり、物質的生活の生産方法が、社會的・政治的・精神的・生活過程一般を制約する」(Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. XI) かくて人間と人間の社會とは、總て必然的に規定されてゐる者であつて、觀念論の哲學で説いてゐるやうな——例へばカントなどが説いてゐるやうな「自由」などは、到底そこに存在の餘地を有たぬ。そこでブルードンが「需要と供給利用と意見との鬭争から生ずる所の價格は、永久正義の表現であることは出来ない。自由な購、買、者としての私の特質に於いて、吾は自分の需要に對する裁判官であり、對象の合目的性に對する裁判官であり、吾がそれに對して附けようと欲する價格に對する裁判官である。他方に於いて爾は自由なる生産者として生産方便にたいして主人公であり、従つて爾の生産費用を減ずることが出来る」。「使用價值と交換價值との對立を惹起する者は自由意思であることは證明された。自由意思の存在する限り、如何にして此對立を解融することが出来るだらうか。而して又人間たることを棄權することなくして、如何にして自由意思を犠牲にすることが出来るだらうか」と述べて、自由或は自由意思が、人間には本質的なもので

あることを説いた點を非難して、ブルードンの説いてゐるやうな需要者、供給者などは、極端な抽象の上に立てられてゐる空虚者であつて、需要者は金を提供するといふ點に於いて同時に供給者であり、供給者はその金を需要するといふ點に於いて同時に需要者である。従つてブルードンの所謂自由なる購買者、自由なる生産者といふが如きは、純乎たる形而上學的特質を附與した者であつて、そんな者は決して存在しない、否存在し得ない者である。「生産者が分業と個人的な交換との兩者の上に成立してゐる社會の中に於いて生産する限り、而してそれはブルードン氏の豫想なのであるが、彼は賣るべく餘儀なくされる。ブルードン氏は生産者を生産方便の主人公とするが、併し氏は、その生産方便の所有は、自由意思に依屬しないことを吾人に對して承認するであらう。加之、それ等の生産方便は大部分生産者が外國から購求した外國の生産品であり、又近代生産に於いては、生産者は彼等が意思する通りの數量を生産することの自由を有たない。生産力發展の現在の状態が、或る一定の規模で生産するやうに生産者を強制する。消費者も生産者同様自由でない。彼の意見は彼の方便と需要とに依屬し、兩者は又彼の社會上

の位置によつて規定せられ、その社會上の位置は一般的社會組織に依屬する」(Das Elend der Philosophie, S. 11-14)と論じて、社會的經濟組織並にその運営はすべて機械的因果的であつて、何等形而上學者の説いてゐるやうな自由なる者が、實際には存してゐる者ではないと説いてゐる。

斯くの如く自然の世界はいふに及ばず、人間の社會にも、自由は絶對になく、ある所の者は必然のみである。エンゲルスが「之が人類の必然の國から自由の國への飛躍である」(Es ist der Sprung der Menschheit aus dem Reiche der Nothwendigkeit in das Reich der Freiheit. Anti-Dühring, Internationale Bibliothek, Bd. XXI, S. 306)などと説いてゐるので、氏は人間に自由といふ者を承認したかのやうに見えるのであるが、それは自由の概念の意味が異つてゐるので、それを判然たらしめると、エンゲルスの自由は觀念論哲學でいふ所のそれとは全然異つてゐる者なることを見出すのである。エンゲルスの自由の意味は、人智未だ蒙昧で、自然法則の何たるかを知らざるに當つては、人類は唯自然に支配されてゐた者であるが、人智進んで自然法を理解するやうになれば、人類はそれによつて自然を利用し、自然を支配し、自然を克服するこ

とが出来るといふことになる。そこで人類は自然の桎梏を脱して却つて之を統制する自由を得たといはれるのが、エンゲルスの自由の意味である。エンゲルスは此理を更に社會の事にまで及ぼして、人類の文化が未だ社會の構成及び其發展の原理——彼等に言はしむれば唯物史觀の原理——を知らざりし時代に於いては、人類は専ら社會其者に制御されてゐた者であるが、従つて何等の自由を有たなかつた者であるが、その原理を知るやうになつて、始めて、人類は從來歴史を支配してをつた處の客觀的な、外部的な諸力を制御するやうになり、そこに至つて人間は始めて、十分なる意識を以て彼等の歴史を作るやうになり、そこに至つて始めて彼等は彼等の運用する社會的原因から、彼等の望む社會的結果を益々導き出すことが出来る様になる (Top. cit., S. 305—306) と説いてゐる。それ故にエンゲルスの自由といふは必然として之を知り之を用ゐることをいふたのであつて、従つてその反對は「必然」でなく、羈絆とか繫縛とか乃至不自由とかいふべきである。自由の此意味は故にベーコンの説いたのと全く同意義である。然るにこれをカントに言はしむれば、さやうな意味の自由は、進行しつゝある時計の針の自由であり、抛られて再び地上に

落下しつゝある石の自由であつて、即ちそれは心理的機械的自由であつて、眞の意味に於ける自由ではない。眞の意味の自由は自律の自由、超越的自由でなければならぬといふのである (Vgl. Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten)。此カントの所謂眞の自由と、エンゲルスのとを比較すれば、兩者は全く異なる意味に於いて自由を理解してゐることが分る。それ故にエンゲルスが自由の世界といつても、それは單に自分達の知らない外部からの羈絆を受けない世界といふ意味であつて、必然から離れた別の世界といふ意味ではないのである。

エンゲルスの自由論について、今一事の説くべきことがある。エンゲルスは個々の人間について觀た時には、彼等は多少の自由を有つてゐるやうに見えるが、しかし之を大數現象として觀た場合には、其等はすべて必然的現象として現はれるといふ意味のことを説いたことがある (Vgl. Engels, I. Feuerbach, S. 56)。しかしかうなると、たとひ個人の上についてではあるが、エンゲルスは自由を認めたとはいへばならぬ。此點彼等の唯物論が幾分の破綻を示したものであらねばならぬ。

かやうにマルクス及びマルクス主義者の観たる人間の社會及び其歴史は、すべて必然的機械的構造を有つてをる者で、そこには何等意思の自由、又は人間の自由といふ者は存在しない否、決して存在し能はないといふのであるから、従つてそこには亦自由の意思が設定したといふ意味に於いての目的といふ者も存在するこゝとが出来ぬ譯である。従つて又必然的世界観はその當然の論理的歸結として、有極的世界観を排斥する。故にマルクス主義は社會及び社會の歴史を、或る一定の目的を立て、それに由つて解釋することを許さない者である。

さてさうしたマルクス主義の因果の系列は如何なる者であるか。パウル・バルトは其點に就いて、それは技術の一定の状態、一定の經營の形式、一定の財産上の秩序、而して其上に更に諸種の精神文化と斷じたのである。右の中、精神文化が因果系列の最後に來る者といふことについては何等の異議もない者として、唯最初三つの系列の順序に對しては、バルトのこの斷定に對して反對を唱へてゐる者があ

る。それはクノーである。クノーはマルクスに於いて技術といふは人間の勞働力の發達を度る尺度であり、社會的關係の指針に外ならぬ者であつて、何等生産過程の原因ではない。少くとも「勞働力や、自然的制約」と相並んで作用してゐる所の部分原因たるに過ぎぬと批評してをる。バルトはそれに對して「けれどもクノーの見解の如きは、マルクスの『手挽臼は諸侯伯の社會を生^{エツケル}じ、蒸汽臼は産業的資本家の社會を生じた』(哲學の貧困)と言ふた事とは如何にして一致することが出来るであらうか。加之マルクスは生産方便、即ち其當時々々の技術の所産である所の生産方便は、經濟の發達時期を區劃するものであるとか或はその生産方便は經濟時期に對してその形成原理であるとかいふことを屢論じてゐるのであるが、クノーの意見はそれ等の點とも一致することが出来ぬ者である」云々と論じて、クノーの批評に答へてゐる (P. Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, III. und IV. Aufl., S. 673-4)。此兩氏の諍論はマルクス解釋學上相當重要な旨趣を有つてゐる者であるが、私は今其諍論に立ち入ることを避け、むしろ直截に私の見る所を述べようと思ふ。

マルクスは「社會の物質的生産力は或る發達階段に達すれば、それが今迄その内部で動いて來た所の既存の生産關係若しくは財産關係——是は前者を法律的に表現したものにすぎぬ——と矛盾する様になる。生産力の發展の形態から、此生産關係はその桎梏に激變する。かくて社會的革命的時代の出現する。經濟的基礎の變化と共に、全部の偉大な上層建築が徐々に又は急激に轉覆する」(Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. XI) といつてゐるが、此文章は「神聖家族」の序文の劈頭語である所の、眞の人本主義は獨逸に於いては唯心論即ち思辨的觀念論程危険な敵を有たない。その唯心論は實在の個々人を斥けて「自覺」とか「精神」とかを擧げ、而して宗教家と共に「生命を爲す者は精神であつて、肉は何等の用をもなさぬ」と教説する者である」といふ文章と共に、最も屢々引用されてゐる文章であるが、兎に角それだけマルクス主義の總括的意義を明白に表現した文章である。餘談はさて置き、マルクスのかうした所論から——而して是と同様な趣意は「共產黨の宣言書」や「資本論」の中にも屢論述されてをる——勞働力、ひいては生産力の變化が第一原因となつて經濟關係の變化を起し、その經濟關係の變化が原因となつて社會組織一般や、乃至一切

の彼等の所謂イデオロギイの變革を惹起するに至るといふ因果系列がマルクスの見た所であらうと思ふ。

併しマルクスは經濟的過程が經濟的組織を變更し、それが社會組織を變更する所の一つの原因となることを主張する者であるのみならず、前にも説きたるが如く、此經濟的過程が一切精神的文化を惹起する原因であつて、従つて其經濟的過程ひいては經濟的關係の變化に伴ふて、精神的文化も亦變化する者なることを主張するのである。「人間の生活事情と共に、彼等の社會的關係と共に、彼等の社會的存在と共に、彼等の寫象觀想概念、一言にしていへば彼等の意識も亦變化することを理解するのに、果して深遠な洞察を必要とするか。理念の歴史は精神的產物は物質的產物と伴ふて變化する者であるといふ以外、果して何を證明してゐるか。或る時代を支配してゐる理念は、常に當時の支配階級の理念であつた。人或は全社會を革新した理念に就いて説くのであるが、それは舊社會の中に既に新社會の要素が形成されてをり、舊社會の理念は舊社會の生活關係の崩壞と共に崩壞してしまつたといふ事實を表現してをるに過ぎない。古代社會が將さに滅亡せんとした

時には古代宗教は基督教によつて撃破されたし、其基督教が十八世紀に於いて啓蒙思想に打倒された時には、封建社會は當時の革命的な者であつたブルジョア社會と血みどろの戦争をやつてをつたのである〔Das Manifest der kommunistischen Partei, 6. Aufl. S. 22—23〕。而も猶それ以後の生産力の發達變化は現在のブルジョア社會の組織と相容れないやうになつた。換言すればブルジョア關係は、彼等が生産した處の富を收容すべく、餘りに狹隘になつてしまつた〔op. cit. S. 14〕のであり、「舊社會の生活條件は既にプロレタリアの生活條件の中では消滅してしまつてをる。プロレタリアは財産を有たない、又彼のその妻子に對する關係なども、ブルジョアの家族關係などと、何等共通な者がない。近代の産業的勞働資本の下に屈する近代的羈軛——それは英に於いても佛に於いても、乃至又米に於いても獨に於いても同様のであるが——それ等はすべてプロレタリアから一切の國民的特質を奪取してしまつた。法律でも道德でも宗教でもプロレタリアから觀ればすべてブルジョアの僻見に過ぎない。而してブルジョアは彼等の利益をその中に藏匿してをるのである〔op. cit. S. 17〕。それ故マルクスから觀れば「此等生活事情の總體が社會の經濟

的構造、即ち法律、政治的上層建築が建設せられる現實的な基礎を形成する。而して一定の社會上の意識形態は、その經濟的構造、即ち現實的な基礎に相應して存する〔Zur Kritik der politischen Oekonomie, S. XI〕といはざるを得ないことになる。此點が唯物史觀の中心思想であつて、一切の精神文化をもすべて經濟事情から説明するといふ意味に於いて唯物史觀に同時に經濟史觀若しくは歴史の經濟的解釋の別名がある所以である。

五

マルクスの唯物史觀は、その辯證法に於いてヘーゲルに、其歴史の經濟的解釋に於いてサン・シモンに、その物質的人間中心主義に於いてフオイエルバッツハに負ふ所あるはヨルトマンの論じてゐるが如く〔Wolmann, Der historische Materialismus〕明白なる事實であるが、又自然及び人間一切が進化するものであるといふ進化論に於いてダーキンに示唆を受けてをることも争はれない事實である。而して其事は著作年代の關係上、特に資本論の中に見えてをる。一切の生物は其生命を持續し、

その子孫を保存せんが爲に、他の生物と競争せざるを得ない。而して環境への順應が最も適當である所の生物は、競争上最も有利の位置に立つ所の生物である。反言すれば環境への順應が適切ならざる生物は、競争上劣敗者となつて次第に衰滅し、その順應の適切なる者が次第に生き残つて發展する。生物は環境に順應せんが爲に、その環境に應じて諸種の組織機關を發生するやうになる。古生物學は生物發展史を究むる上に於いて甚だ重要な學科であるが、今日古代生物の遺骨や遺齒の殘缺を集めて、それによつて略當時の生物の状態を推測するのがその古生物學の任務である。それと同様に古代社會の使用した諸種の器具・機械の殘缺を蒐集し、それを修補し、整理し、比較し、考察して、その器具機械を使用してゐた時代の經濟狀態を推定することが出来る。その推定された經濟狀態からして、その當時の社會一般の狀態、從つて又其當時の精神文化の有様を察知することが出来る。それ故にマルクスは「遺骨の碎片を集めて或る骨格を造つて見ることは、既に滅亡してしまつた動物の組織を知る上に甚だ重要なことであるが、勞働方便の遺物は既に滅亡してしまつてをる社會の經濟組織を評價する上に於いて、同様に重要な

ることである。經濟時期を區劃する所の者は生産されたる物でなく、如何なる勞働方便で生産されたかの方法である。勞働方便は人間の勞働力の發展を度る尺度であるばかりでなく、その勞働が成遂された社會的關係の指針でもある」(Kapital, 4. Aufl. I, S. 142) といつてをる。之に依つてもマルクスが如何に社會の發展をダーキンの進化論式に考察してゐるかを觀ることが出来る。猶氏は「工學は人間が自然に働きかける動作、彼の生活の直接な生産過程、從つて又彼の社會的事情と、その事情から湧き出づる精神的寫象とを露はにする。宗教史でさへも此物質的基礎から抽象されては、それは全く沒批判的な者である。分析によつて宗教的雲霧の中から地的核實を發見する事は、各時代の現實の生活事情からその天化された形式を發展さすことに比して、遙に容易な事である」(op. cit. I, S. 336 Anm.) と説いてをる。又以てマルクスの進化論的考察の方式を窺ふに足りる。

此事をばエンゲルスは更に簡明に言つてゐる。氏は「宮殿の中で考へると、小屋の中で考へるとは異ふ。饑餓のため、貧乏のため、腹の中に何も入つてゐない時は、頭の中、感官心臓の中に道德の作られる材料は何もない」と、恰も管子の倉廩實則

知禮節、衣食足則知榮辱の言をもじつたやうなフオイエルバツハの言を讚歎して法律、(その中には刑法をも含む)、政治従つて國家、道德、宗教従つて教會、哲學等は、すべてその當時の支配階級のイデオロギーに外ならぬと結論してをる (Engels, I. Feuerbach, Marxistische Bibliothek, Bd. 3, S. 45.) この一段の論述などは、最も明かに唯物史觀の見解を表出してをる者である。

マルクス、エンゲルスはヘーゲルの觀念論を排斥してフオイエルバツハ及び其他左黨諸氏の唯物論を稱揚し、しかしそれでも猶不徹底であるとして、彼等一流の唯物論を建設したのである。しかし彼等の唯物論は彼等自身の主張では古風な唯物論とは異つてゐると唱へてをることは既に述べた處であるが、今一度その點に觸れて、此第一節を終らうと思ふ。

エンゲルスはその著「フオイエルバツハ」に於いて、フオ氏が「唯物論は余に取つて人間の本質及び知識の建造物の基礎である。しかしそれは私にとつては、生理學者や狹義の自然科学者、例へばモレシヨットの様な人達が必然に彼等の立場や職業からして考へてゐた様なものとは異つて、建物そのものなのではない。余は後方

には唯物論者と完全に一致するけれども、前方には一致しない」(op. cit. S. 31-32)といつた言を引用して、フオ氏は一般的に物質と精神との關係の上に立つてをる世界を排し、働きのない、動きのない物質を實在とする唯物論を斥けてをることを述べ、エンゲルス自身も古風な唯物論は歴史を除外してをるが、そんな歴史を除外するやうな唯物論は謬論である。古風な唯物論は歴史を判断するのに、實用主義的にやつてをる。従つて觀念的な目的や手段を考へて、それに照して歴史を考察してゐる。ことその事がこれ既に唯物論の立場に矛盾してをる者である。古風な唯物論の謬見は、その觀念的な者を考察の中に取つたといふ處にあるのでなく、その觀念的な者の背後に、如何なる物質的な者があつてそれを動かしてをるかを見ない點に存する。又ヘーゲルは歴史を動かしてをる最後の力が存在してゐることを見たけれども、氏はそれを歴史の中から持來さずして、歴史以外の方面、即ち彼のイデオロギーの方面から移入してをる。それがヘーゲルの歴史哲學の謬點である。自分達の唯物論は以上に述べた古風な唯物論や、ヘーゲルの觀念論と異つて、歴史を唯物辯證法で説明してをる處に其特色が存してゐると詳論してをる。

マルクスも「すべて存在する者すべて水陸中に生存する者は、何等かの運動によつてのみ存在し、生存してをる。(中略)。その運動の純粹なる者とは如何なる者であるか。それは純粹理性の運動である。その純粹理性の運動とは如何なる者か。それ自己を肯定し、又自分自らで自己を否定し、而して最後に自己を統一する所の運動である。所謂定立・反立・綜合である云々」(Das Elend der Philosophie, S. 97-98)と述べてをる。勿論此統一は決して最後の者ではない。それが又一の定立となる。而して既に定立があれば又それに對して必ず一つの反立が起きる。定立・反立相對峙すれば、そこに又必ず綜合が起らざるを得ない。斯くして同様のことが無限に繰返されて、そこに無限の發展がつゞく。此辯證的發展の哲理はヘーゲルの説いた所の者であるが、而してヘーゲルに於いては云ふまでもなく理性の發展形式なのであるが、マルクス、エンゲルスはそれを物質に取入れて、物質その者が辯證的發展をなす者であるとしたのである。それ故にエンゲルスは自分達の唯物論を名づけて辯證的唯物論 (dialektischer Materialismus) といつてをる (I. Feuerbach)。それを又唯物的に考察したる人間の歴史に應用して、それも亦辯證的發展をなす者と

観たのである。

而して右の辯證的發展に於いて定立と反立とは必ず相矛盾した者で相容れざる所の者である。それ故に両者が並び存するといふことは、やがて両者が各其在を主張して相闘争するといふことである。而して綜合はその闘争を統一することである。故に一方からいへば闘争がなければ統一といふこともなくなり、又従つて所謂辯證的發展といふこともなくなるのである。その意味に於いてマルクスは「反對なくして進歩はない。是は今日迄の文明が従つてをつた法則である」(Das Elend der Philosophie, S. 39) といつてをる。之を人類の歴史に當嵌めていふ時には、その闘争は社會的階級間の闘争である。階級闘争があるので歴史は進展するのであつてこれなくして歴史の進展はあり得ない。故に曰く「人類の從來の歴史はすべて階級闘争の歴史である」(Das Manifest der kommunistischen Partei) と。加之、定立があればそこに必ず反立があり、定反二立の對峙があれば、又必ず綜合があるといふのであるから、その立場から觀れば、自然界にも、恒久不變の者はあり得ない、すべてが皆 ^{アラヘン}止揚の契機であつて、一時的の存在を有つてをるに過ぎないといふこ

とになる。従つて歴史の辯證的發展からいへば、社會上の制度文物はすべて皆一時的の存在であつて、永久的な存在でないといふことになる。つまり人類の歴史は辯證法に従つて新陳代謝して無限の發展をなすといふのが、マルクス、エンゲルスの唯物史觀の根本觀である。

二 歴 史 法

一

以上の論述によりマルクス及び其一黨の唯物史觀は一、歴史法、二、其哲學的根據をなす所の辯證的唯物論を豫想として成立してゐる者なることを觀ることが出来る。先づ歴史法の概念に就いて考察しよう。

マルクス及び其一黨は歴史法の概念を如何に理解してをるかといへば、ゾムバルト及びムース兩教授は歴史法に限らず凡そ法則ゲゼツツといふ概念はマルクスに於いては甚だ多義に解されて、従つて極めて曖昧なものになつてをるとして、前者は、一

理想類型的合則性(idealtypische Gesetzmässigkeit) 二合理的又は「内在的」合則性(rationale oder "immanente" Gesetzmässigkeit) 三自然法的合則性(naturgesetzliche Gesetzmässigkeit) 四辯證法的合則性(dialektische Gesetzmässigkeit)の四者に分類し(W. Sombart, Der proletarische Sozialismus, Jena 1924, Bd. I, S. 197-206) 後者は一自然法、二歴史的傾向、三理想類型的法則、四歴史的法則五認識によつて否定される法則、是等五つの意味に種類分けをしてをる。而して兩教授は共に、彼等の分別した法則の諸意義は皆その本質を異にする者で、従つて或る事象に對してそれは或は自然法的合則である、或は歴史的傾向の合則である、或はその他の合則であるといふ時には、その都度に意味がちがつて來ると非難してをる。ムースは例へば自然法は絶對性を有つてをる合則性であるが、歴史的傾向や理想類型的法則は相對的な合則性であるといひ、ゾムバルトは第一義の理想類型的合則性と第四義の辯證的合則性とは矛盾してをるとのべ、更にムースは貸銀法則をば或時には(Kapital, I, S. 609)自然法則の如くに説き、或時には(Kapital, I, S. 500)理想類型的合則性の如くに述べ、又或時には(Kapital, I, S. 605)労働者階級の社會認識によつて制約されたる法則の如くに論じてゐると非難し、更

に進んで若し第五義の認識によつて否定される法則——是はエンゲルスが與へた法則の意味であるが——嚴格に此第五義の法則を法則の意味であるとすれば自然法則の上に建てられたるマルクスの思想構成は根本から震盪せしめられねばならぬと論じてゐる (K. Mühs, Anti-Marx, S. 24)。

かやうにゾムバルトやムースはマルクスに於ける法則概念は甚だ雜駁にして且つ自家撞著を含んでをると論じてゐるが、成程マルクス及び其一黨の思想體系に於ける「法則」の概念は決して一義的に明確なものであるとはいへず、従つて其適用に於いても甚だ多義曖昧な者があることは、恐らく否定することは出来まい。併しながら彼等兩教授が矛盾であるとか、自家撞著であるとかいつて非難してをる中には、往々にして當らざる所があることを發見するのである。例へばムースは資本論第三卷第一冊(一五三—四頁)に於いてマルクスが一般的に經濟的法則といはれてをる所の者は、理論的に單純化されてをる者で、その通りの者が、そのまゝに現實に現はれてをる者でない。「理論に於いては資本主義的生産方法の法則は純粹に發展することが豫想されてゐるが、しかし實際に於いては唯漸次近接する

といふことが存するのみである。而してその近接は資本主義的生産方法が發達すればする程、又それが愈純粹なものになつて、前時代の經濟狀態の遺物との化合が除去されるればされる程、愈大となる者である」と論じてゐる所を批評して、「此論述に従へば總ての法則は其始めは、或は資本主義的生産の最初の發達階段に於いては、理想類型的法則であつたが、資本主義的生産の發達と共に、漸次其性質を失つて、段々絶對的な自然法にまで成熟したものであるとの意見であらねばならぬ」(op. cit. S. 497)と述べてゐる。つまりムースはマルクスの説は始めは相對的妥當性しか有たない理想類型的法則が、資本主義的生産の發達と共に、絶對的妥當性を有つ所の自然法則にまで進んで來たと見る説であると考へた譯である。併しムースの此批評は當らない。何となれば必ずしも人間社會の事に限らず、或は經濟事象に限らず、自然界の事象でも、實際は決して自然法則の通りに現はれてをる者ではない、皆種々に變化せしめられて現はれてをる。例へば隋性の法則は嚴然たる自然法であるが、其自然法は決してそのまゝでは現はれてをらない。それを妨げる外力の影響、例へば摩擦であるとか抵抗であるとかの爲に變化せしめられて、

近接的に現はれるに過ぎない。従つて外部からの妨害を少くすればする程階性の法則は其純粹の姿に於いて現はれるのである。マルクスの資本主義的生産方法の法則を、そのやうに考察すれば、必ずしもムースの批評した様に考へねばならぬ必要はない筈である。即ちその法則は資本主義的生産が行はれてゐる社會又は時代には、必ず嚴存してゐる法則であるけれども、——而して其法則は資本主義的生産といふことを純理的に分析することによつて獲られ得る、又獲られたる法則であるとして——その資本主義的生産といふ者が前時代の遺物などから妨害されて、その純粹な姿に於いて現はれてゐない。従つて其法則も亦如實に表現されてゐないまでであつて、資本主義的生産が純化される程、その法則も亦段々純粹の姿を現するに至る道理である。と斯やうに考察すればムースの批評は當らないと謂はねばならぬ。

要するにゾムバルトやムース教授はマルクス及び其一黨に於ける法則の概念が甚だ混雜し、且つ矛盾撞著してゐることを、力説指摘してをるけれども、彼等の論説は當れる所もあり、當らない所もあるといふのである。——マルクス主義に於け

る法則の概念が明瞭でないのは事實である。

二

故に私はマルクス主義の唯物史觀を檢討するに當つては、むしろ端的に彼等の所謂歴史的な法則(約して之を歴史法といふ)とはどんな者かを吟味するを以て捷徑であると信ずる。

マルクス、エンゲルス等は「法則その者、即ち鐵的必然を以て作用し、徹底してゐる所の傾向」(Kapital, I, Vorwort zur Isten Aufl. S. VI)とか、「反對なければ進歩なし。是れが今日までの文明が随つて來た所の法則である」(Elend der Philosophie, S. 39)とか、「人間を無意思的に支配する所の優強なる自然法則」(Kapital, III, 2, S. 366—367)とか、「分量上の差異は或點に至ると性質上の差異に變じてしまふといふ、ヘーゲルがその論理學に於いて發見した所の法則」(Kapital, I, S. 273)とか、「資本の普遍的にして必然的な傾向」(Kapital, I, S. 280)とか、その他枚擧に違ない程處々に於いて法則といふ語を用ゐてをるけれども、しかし論理的に之を定義した處は見當らない。だ

からマルクス、エンゲルスの用ゐた法則の意義は、かうであると確定的にいひ難いのであるが、しかし以上に列擧した諸例を吟味すれば、彼等の法則の概念も、普通の論理學でいつてをる所の例へばオットー・リープマンの「法則、自然、法、則とは自然の中で一定の實際的諸條件に何時でも、又何處でも同一事象が實際的結果として結付けられる場合に從ふ所の普遍的規律を謂ふ」(O. Liebmann, Zur Analyse der Wirklichkeit, III. Aufl. S. 282) といふ意味の法則、又ミルなどの謂ふ所の自然の齊一性 (Uniformity of Nature) など、その意味全く同一であつて、科學者達が「法則とは吾人が觀察したと信ずる所の多くの類似事の單なる記述、而も時としては誤れる記述に過ぎなからず」(J. H. Poynting, Address, British Association, 1889, p. 616) とか「引力の法則は宇宙に於ける物質の各部分が、他の各部分に關係して、如何にその運動を變ずるか、の簡明なる記述であつて、何故に各部分は、かく運動するかを語る者でなく、又何故に地球は太陽の周圍に一定の曲線を描くかを論ずる者でない。そは唯簡明な數語を以て、廣大なる現象の間に觀察せられたる關係を、簡單に總括するのみであつて、思想の經濟に外ならなからず」(Karl Pearson, Grammar of Science, 1900, p. 99) (以上 A. Thomson,

Introduction to Science, 50-51 に據る) といつてをると、全く同義であつて極めて普通なものである。

ザントの法則の定義はそれ等に比すれば餘程精密である。氏は法則の三つの特質を擧げて、「論理的に獨立する事實の規律正しい關聯」、「法則てふ概念の適用せらるゝ所の關聯は、直接にか又は間接にか因果的又は論理的關係を有つてをる者でなければならぬ」、「法則は新しい事實をその中に包攝してしまふ發見的價值を有たねばならぬ」としてゐる (W. Wundt, Logik, III, 2, S. 133-134)。此定義も唯稍緻密に説明したまでであつて、その内容的本質は前掲の者と異なる所がない。

前段に述べたマルクス、エンゲルス等の法則の概念をこれ等の者と比較して觀るに略近似した意味を有つてをる様である。即ちザントのいつたやうに、論理的に獨立してをると考へられる一定の事象と他の一定の事象との間に存在する一定の合則性を指す者であることが分る。法則の意味がこんな者であるとして、然らばマルクス、及び其一黨の説いた所の歴史法とはどんなものであるか。

マルクスは例へば人口上の法則の如きにしても、あらゆる時代、あらゆる社會に

通じて妥當なる法則などはない。そんな者はすべて抽象であつて、實際存在してゐる者でない。實際存在してゐる所のものは、個々の時代、個々の社會にのみ妥當なる特殊の法則のみである。「各時代は各其獨特な法則」を有つてゐるといふ考を有つてゐる (Kapital, Bd. I, Vorwort zur 2ten Aufl. S. X VI)。エンゲルスは「故に經濟學は本質的に歴史的科學であつて、歴史的內容、即ち常に變化する材料を取扱ふ者である。經濟學は先づ第一に生産と交換との個々の發達階段に於ける特殊の法則を研究する者で、其等の研究の最後に於いて始めて生産及び交換一般に妥當なる所の少數の普遍的法則を發見することを得るであらう。此場合或る一定の生産方法、及び交換形式に對して妥當なる所の法則は、其生産方法や交換形式が共通の者である所の一切の歴史的時代に對しても亦妥當なるべきことは、自ら明かな事である。例へば金屬貨幣が用ゐらるゝに至つて、一群の法則が行はれるに至る。而してそれ等の法則は金屬貨幣が交換の媒介をなす所の一切の國や、歴史的時代に行はれる」 (Anti-Dühring, S. 150) と説いてゐるが、是は前述の各時代は各其獨特な法則を有つてゐるといつたマルクスの言を説明した者ともいへる。

然らばマルクスやエンゲルスの此説と、彼等の根本意見たる唯物史觀と、即ち人間の歴史はすべて經濟事情によつて進展する者であるといふ意見と、此等兩者を如何なる關係に於いて觀るべきであらうか。此點に就いて私はマルクスやエンゲルスから直接彼等の説を聽くことを得ないので、私が勝手に想像するのであるが、是は或はミルの論理に於ける自然の齊一性 (Uniformity of Nature) と個々の自然法 (Laws of Nature) との關係などに比較して觀るべきでなからうかと思ふ。自然の齊一性はミルの歸納論理の根本豫想に基いて、吾人は歸納論理によつてもろく／＼の自然法則を發見することが出来るのである。而して此等もろく／＼個々の自然法則が統一單純化されて自然の齊一性が指示されるのである。故に自然の齊一性はミルの論理に於いては歸納論理の出發點であつて、而して同時にその歸著點なのである。それと類似して、「共產黨宣言書」や「經濟學批判」に述べてゐる所の唯物史觀は一方からいへば各時代に妥當な法則を發見する出發點であり、同時にそれはそれ等法則の歸著點でもある。かう觀るのが最も首尾一貫した觀方のやうに思ふ。

三

然らばその各時代に妥當なる特殊の歴史法とはどんな者か。私達は今や其概念を吟味しなければならぬ時に達した。

此點に就いて考察する時、私達が先づ不審に思ふのは、「各歴史的時代は各その獨特な法則を有つ」といふ命題であるが、又この命題を敷衍した説明であると思はれるエンゲルスの金屬貨幣の行はれる或國或時代に妥當なる法則は、同じく金屬貨幣の行はれる他の一切の國々、一切の時代にも亦妥當するといふ語であるが、是等の言葉からいへばマルクス、エンゲルス等の説いてをる所の法則は、歴史の法則でなく、社會の法則であるやうに思はれる。空間的には妥當なる法則であることは間的には妥當しないやうに思はれる。歴史は諸時代の時間的連鎖であることは猶竹は節を重ねて始めて竹といはれると同様である。従つて若し此處に歴史法則といふ名に値する法則があるとするならば、それはその時代の進展を説明し得る法則であらねばならぬ。故に私はかうした意味に於いて唯或時代の事象を説

明する所の法則は、それは社會の法則であつて歴史法則でないといふのである。——是はミルの自然の齊一性に比すべき唯物史觀内容的に之をいへば生産力の發達の結果、舊社會の腹中に舊社會を破壊してしまふべき核が發生し成長してゐる、といふ觀方についていふてをるのではない。それはたしかに時代進展の説明をなしてをるものやうであるけれども。

さてその各時代に行はれてゐる歴史法則とはどんな者か。又それは果して可能なるものであらうか。

以上は法則を單に客觀の世界その者の中に定在してをる者の如くに觀て説いて來たのであるが、法則にはその他に猶一面の觀方がある。それは他でもない又認識批判からの觀方である。認識批判の立場から觀ると、法則は何等客觀界に存在する合法性でなく、主觀が客觀的世界を統一的に理解する規律に外ならぬ。カントは「自然」をばカオスに對立せしめて、所謂自然法によつて統一されてゐる渾一體と解し、そうした意味の「自然」は、外部から吾に對して與へられた者でなく、吾が創造した所の者であると論じてゐるのは、認識批判の立場からいへば、固より當

然の論である。そこでかういふ風な立場から歴史法則を觀たならばどうであるかといへば、先づマルクス、エンゲルスの説を外にして、是まで歴史法則に對して一は自由といふ事から、二は人間界の事は反復せず、常に一度限的の者であるといふことから其不可能説が唱へられてゐる。私は先づそれに對する私の考を述べようと思ふが、先づ自由の方面より考察しよう。自由には物理的自由、政治的自由、心理的自由、倫理的自由、形而上學的自由等、種々の意義が有るが、しかし今は此等のすべてに亘つて論ずるの必要はなく、唯、心理的自由、即ち選擇の自由だけについて論ずればそれでいゝ。選擇の自由とは、吾が甲・乙・丙・丁等若干の欲求の目的觀念について思慮し、選擇する場合に當つて、吾はその孰れでも、吾の好む所のものを選択することが出来るといふ自由である。歴史法の法則認識を否認する人々は、此の選擇の自由は人間を自然から區別する所以の一つであつて、自然にはかうした自由がない。甲・乙・丙・丁の間に選ぶなどといふことはない。必然にその中の孰れかに歸さねばならぬから、自然法の法則認識は可能であり得るが、人間にはその選擇の自由がある爲に、歴史法の法則認識は不可能であると論ずるのである。しかしそ

れだけでは私は承認しかねる。何となればその選擇の自由といふのは、全然任意の選擇、即ち何等の合則性もない選擇でなく、やはり一定の合則性に依る所の選擇であることは、今日の心理學に於いては全く認められたる事柄である。リップスなどもいつてをるやうに吾等が選擇する際には、明にその欲求を意識してゐる。決して目を閉ぢて籤を抽くやうなものでない(L. Lipps, Ethische Grundfragen)。そうすれば吾等の意思作用は、所謂選擇の自由を主張する人人の説くやうなものでないことが明かである。

斯くいへば或はいはん、若し選擇に一定の合則性があるならば、爰にAなる人ありて、甲・乙・丙・丁の中に選ばんとする際に、Aの未だ選ばざるに先つて、Aはその孰れを選ぶであらうかを豫告することが出来る筈でないか。然るに事實それは出來ないとするれば、その合則性といふことも疑はしい。豫告といふことは法則認識の重要な一特質であると、非難するかも知れぬ。しかし又翻つて考ふれば人間は、非常に複雑で、而も非常に微妙な作用にも感應する者であるので、その成立する一切の素成分を知り盡すことも困難であり、又その感應作用のすべてを知り盡すこ

とも出来ないが故に、人間の行爲について豫告することは殆ど不可能なのである。しかし是は必ずしも人間に限つたことでなく、自然に於いても複雑にして而も微妙な因子を有するものは、豫告が殆ど出来ない、出来ても甚だ不確實なものである。今日の學術上の進歩の程度に於いては、天氣豫報の如きものはそれである。天氣豫報が不確實だからといふて、氣象といふ一群の事實に、自然法が存在して居らなむとは、恐らく何人も言ひ得まい。それ故、その人間といふ因子も出来るだけ之を簡単にし、又、その周囲の事情も出来るだけ簡単にすれば、粗雑ながら幾分の豫告をなすことが出来る。即ち無教育で精神作用の簡單なもの、例へば無教育者、小兒の如き場合及びその人の品性を深く知つてをる場合には、幾分の豫告をなすことが出来るのは事實である。その人の品性は、如何にして生じたかといへばそれは遺傳からも來、又教育からも、境遇からも來る。遺傳については、セリグマンのいつたやうに、ワイズマン派の見解に依るも、新ラマルク派の所説に循ふも、結論に差異は生じて來ぬ。何となれば、その孰れに依るにしても、過去の環界の或る形式が、吾等の品性に作用するといふことだけは動かないからである。セリグマンはその際

唯物史觀を、^{エンバアイロメントセオリ}環界説の一つと見てゐるので、従つて、縱令所謂選擇の自由を許しても、環界説としての唯物史觀は、謬見といへない。否、それを否定するものこそ、統計學、法律學、經濟學、政治學、社會學、又倫理學でさへもの存在を不可能ならしめる、甚しい不合理に陥るのであると論じてゐる。(Seligmann, *The Economic Interpretation of History*, p. 93-95)。(猶此點に就いては、ヴント論理學 W. Wundt, *Logik*, II, 2, *Die Historischen Gesetze*, S. 382-420 参照)。

さて此點についてのマルクス、エンゲルスの説はどうであるかといへば、彼等はすべてを辯證的必然と觀てをつて何等の自由を認めないからして、その意味からして、歴史法の法則認識をいふことの出来る可能性はあり、又假りに個々の人々には多少の選擇の自由が許されても、^{マツセン・エルシヤイヌンゲン}大數現象を認識の對象とすれば、そこにまた合則性を發見することが出来る。エンゲルスはマルクスの嚴格なる必然性の論述に對して幾分緩和のつもりか、大數現象として觀察するときには種々の社會現象は、やはり大きな必然の波に搖られてゐるものであることを説いてをるのである。(Engels, *Ludwig Feuerbach*)。

次に第二の人間現象は、一度切りしか起らない、反復がない、それが一般的法則認識の豫想認識に背反する。故に歴史法の法則認識の可能が疑はしいといふ點について考察しよう。

人間現象は、一たび生起すれば、それが一つで、而してすべてで、同一事象が永久に二度來らぬ。アレキサンダーも、シャーレマンも、ナポレオンも、世界に唯獨りの人で永久に唯獨りの人である。羅馬帝國は再び起らない、佛蘭西革命は二度來らぬ。人間現象は流れて已まぬ時の潮と共に、すん／＼新しい路を辿り、新しい姿を現じつゝ進んで行く。人間現象に反復がない。然り人間現象に反復がない。然らば自然現象に反復があるであらうか。否、自然現象にも決して反復がない。物體の墜落を見よ、彈丸も落下する、羽毛も落下する。落下するといふことからいへば、右は同一事象の反復のやうであるが、決してそうでない。彈丸は彈丸で落下するので、羽毛として落下するので、落下するのではない。だから、空氣中に於いて兩者を並べて同時に落下せしめても、決して同一の現象を呈しない。梅も成長する、櫻も成長する。成長するといふ側か

らいへば、反復のやうであるが、實はさうでない。梅は梅として成長し、櫻は櫻として成長するものである。又、同じ彈丸を、幾度も同じ高さから落下せしめたとしても、決して同一事象の反復でない。かやうに自然現象にも、全く同一事象の反復といふことのないのは、人間現象と同じことである。

然らば自然現象の同一の反復といふことは如何なる事かといへば、例へば物體の墜落に關する多くの經驗を統一せんとする場合に、それに必要な事象のみを抽出して觀、それに關係なしと觀た所の部分をば除斥して觀ていふことである。即ち自然現象の同一事象の反復とは、現象そのものが、如實にそうであるといふのでなく、吾等の經驗統一作用、即ち認識作用が抽象していふことである。若しそういふやうに、或る一群の經驗を統一せんが爲に、それに必要な部分を抽出して反復といふならば、それは人間現象にはなしとはいはれぬ。例へば前に掲出したエングルスの金屬貨幣の通用する云々の説の如きはそれであることを豫想しての説である。又封建社會、ブルジョア社會、プロレタリア社會といふ連續、或は又私有財産制度のある社會、共產制度の社會といふ連續の如きはやがて、そのことを豫想

しての説でないか。その他、家族制度等についても、道德觀念についても、政治についても、皆同様のことがいへるのである。されば認識統一の必要上から抽象していへば、人間現象も亦反復するものなりといふことが出来るのである。故に此の點からいつても歴史法の法則認識は、むげに一般的法則認識の豫想に背反するとは言ひ切ることが出来ぬ。

今一つ歴史法の法則認識に對しての非難がある。それは、凡そ法則認識は歴史の認識でない。歴史の認識は法則によつて一般化されたる認識でなく、個々の事象の真相を闡明した、特殊化されたる認識である。歴史も自然科学と共に一つの経験科學ではあるけれども、認識の性質上、自然科学とは異つてゐるものであるといふのである。是はギンデルバントや、リツカートなどの説く所である。ギンデルバントは経験科學を分けて、自然法の形に於いて一般的のものを研究する科學と、歴史的に規定せられたる形に於いて、個々のものを研究する科學との二つにし、前者は現實生起する事柄の常に同一である所の形を考究し、後者はその唯一度それ自らで規定せられたる内容を探索する。前者は之を法則科學ゲゼツツギツセンシヤフトといふべく、後

者は之をエルアイグニツスギツセンシヤフト事象科學と名づくべきである。前者の科學的思惟は、法則定立的で、後者のそれは自己記述的であると説いてゐる(Windelband, Präludien, III. Aufl. S. 364)。リツカートも「實在は、之を一般的のものの見地より考察すれば自然となり、之を特殊的のものの見地から考察すれば歴史となる」(Rieker, Grenzen, 1602, S. 255)といふてゐる。以上二氏は、自然科学も、歴史も、共に経験科學であつて、その根本的に岐れる所は、科學的研究の對象、そのものによるのではなく、唯、その考察方法の如何によるものであると見てゐるのである。是は、思考は實在コンスタテユイフェス、リシヤフの形成原理であるといふカント認識論の成果を徹底させた者であらうが、それが爲に、ギンデルバントは法則定立的と、自己記述的とを嚴格に區別し、リツカートは所謂「究極自然科学」といふ論理上の理想を立てた。時間空間の中に於ける一切の現象を、「分量の總體」(op. cit. S. 107)にしてしまふのが、自然科学の理想である。勿論物理学の今日の状態は、この理想から見れば甚だ不完全なものであるが、又、恐らく永久にそうであらねばならぬものかも知れぬが、しかし科學の畢竟期する所は、その不完全を出来るだけ制限するにあらねばならぬ。而して吾等が所謂「究極自然科学」を建設すべく努

力する所にあらねばならぬ (op. cit., S. 108)。それは自然科学であるが、之に反して歴史學は、個性の真相を闡明するを以てその目的としてゐるものである。こんな風に、研究の對象といふ内容を全く除外して、専ら考察方法の差異といふ形式の方面から科學の分類を試みてゐる處にカント學風が發揮されてゐる。しかし、直觀及び思考の先天形式が、如何にして後天の内容と交渉し得るかといふ事は、形式と内容とを峻別して考察したカントの第一批判書の難點であり、實踐理性の直言命令が、如何にして可感界の經驗的意思に效驗あらしむることが出来るかといふ事は、その第二批判書の暗所である。自然科学も、新しく發見せられたる經驗的内容に逢著して、それに打ち勝つべく、新しい方法を考察して進んで來たのである。即ち内容は形式を制約し、形式は内容を統制し、兩者相互に影響して進んで行く。若し全然内容から離れ、單に形式からのみで科學の區別が出来るものならば、人間に關する諸の自然科学も可能であり、同時に無機物の歴史乃至生物の歴史といふ科學も可能になつて來る譯である。人間を對象とする自然科学が可能であることは勿論認容し得るが、無機物生物の歴史といふことも歴史といふ概念の如何によ

つては認容されないことでない。英語の Natural history といふ時のヒストリーは、蓋し拉丁語の *historia* 希臘語の *istoria* から派生せられたもので、而して此等の語は「學」「誌」といふ義なれば、漢字の史は誌なりといふ程の意味であらう。此の意味からすれば、單に記述の知識ばかりとしても、礦物の歴史、動植物の歴史があつて然る可き譯であらう。併しながら、その意味の歴史は、無論リツカートなどの考へてゐる歴史といふものでない。それは純然たる自然科学である。されば、内容を離れて全然形式ばかりから自然科学と歴史とを區別しようとするギンデルバント、リツカート等の思想には、まだ考へ残された或る物があるやうに思ふ。

又彼等は、法則認識は、因果的統一の認識であり、事象認識は、價値に關する、従つて規範に關する認識統一であつて、兩者はその點に於いて全然その性質を異にしてゐるものであると説いてゐる。是は如何にも妥當な見解である。何となれば人間は有意的生類である。意思の活動は必ず目的の存在を豫想し、目的の存在は又必ず價値の存在を豫想してゐる。されば社會乃至民族の事象は、必ず一定の目的と價値とを有つてゐる。歴史は決してそれを無視することが出來ず、その目的に

歸向するやうに、人類又は國民の遺した活動の遺跡を目的手段的に換言すれば、目的論的に排列しなければならぬ。而して目的論的に排列するといふのは、一方からいへば因果的に排列するものである。即ちそこに目的又は價値の存在を豫想した法則認識が成立するのである。然るにその目的は、若し自分のものならば直接之を意識してゐるから、自分に知れてゐるのは勿論であるが、他人のそれは直接にそれを知ることが出来ない。唯、彼の態度容姿舉動言語等を通じて間接にそれを知るのみである。而してその他人の態度容姿舉動言語等を精確に知覺すればする程、その目的を愈精確に察知することが出来る。而して次に、逆にその察知せる目的からして、彼の態度容姿舉動言語等を説明することが出来る。それと同じやうに、民族又は人類の諸變動諸事象の中にも、目的價値は存在してゐるが、直接に之を知ることが出来ない。そこで歴史家は先づその諸變動諸事象を覺知しなければならぬ。而も出来る限り精確に覺知しなければならぬ。史料の廣索、嚴檢の肝要な點は、こゝに存するのである。それによつて民族又は人類の目的を察知し、その目的に歸向するやうに、目的論的に史料を排列するのである。そこに所謂目

的論的法則認識は成立する。これ自然科学の法則認識と歴史のそれとの異なる所ではあるまいか。

通例、科學は説明するといはれてゐる。科學で説明といふは、個々の經驗的事實を法則に還元することである。而して法則といふは、殊に生起的法則といふは、唯、或る一群の事象の後に、常に或る一群の事象が現はれるといふただけでは、生起的法則にならない。シムメルがいつた様に、一萬人の一年の死亡者中に、幾人かの自殺者があるといふただけでは法則にならない。(Simmel, Die Probleme der Geschichtsphilosophie, II. Aufl. S. 104)。法則といふからには、先現の一群の事象は原因で、後現の一群の事象は結果であるといふ因果關係が兩者の間になければならぬ。それ故に説明とは、個々の經驗的事實を法則に還元することであるといふは、その經驗的事實を一つの結果として、その原因を持ち來すことである。故に歴史的法則認識に於いて説明するとは所謂個々の歴史的事實をある目的を實現するのに必要な手段であるとして指示することである。勿論その目的には、凡そ人類一般に通じた究竟の目的といふこともあらう、一國民の究竟目的といふこともあらう、又一

般人類及び一國民の一時的の目的といふこともあらう。いづれにしても、その目的はその史料を覺知してゐるものには、如何にもと點頭かれる目的であらねばならぬ。故に良く書かれたる歴史とは、讀んで行く中に或る何ものかが次第に明白になつて行くやうに史實を排列されたるものをいふと思ふ。此の際には、勿論目的設立は、意思そのものの本質であることを豫想してゐるものである。

四

歴史的法則認識は右の如きものとして、そこでマルクスの唯物史觀の歴史法について考察するに、マルクスの豫想せる歴史法は自然法と全然その性質を同じくしてをることは、前述に明かである。しかるに歴史法の法則認識と、自然法のそれとは認識の性質上異つてゐることは、前節に論じた通りである。そこでマルクスも段々研究の歩武を進めて行くうちに、自然前後矛盾したことを説くやうになつたのである。「吾人は爰に眞の人間にのみ屬する形に於いての労働を考察する。例へば、蜘蛛は織工のそれに似た仕事をなし、蜂は蜜房の建設をやつて、多くの人間

の大工を恥ぢ入らしめる。しかし最も拙劣な大工でも、最も巧妙な蜂と異ふ點がある。それは大工はその蜜房を建てるならば、實際それを建てる前に、豫め彼の頭の中にそれを建て、しまふことである。即ち労働過程アルバイプロセスの終りに現はれ來る結果は、其始めに既に労働者の寫象中にあつたものである。即ち觀念的にあつたものである。労働者は、常に自然物の形を變ずるやうに作用するばかりでなく、同時にその自然物の中に、彼の豫め意識してゐた目的を實現するのである。その目的が彼の作業の種類と方法とを決定し、彼の意思を服せしめる所のものである(Kapital, Bd. I, S. 140)。又曰く「労働過程は、使用價値を産出せんとする合目的活動である。人間の需用に適うやうに、自然的のものを我が物とすることである。人間と自然との間の物質交換に對する、一般的條件である。人間的生活の、永久の自然的條件である。従つてその生活の如何なる形からも獨立に、むしろ一切の社會的形式に共通なる自然的條件である」(Kapital, Bd. I, S. 146)。かくマルクスは、他の方面に於いては、歴史法を自然法と全然同様のものゝやうに説きながら、爰では人間的といふ概念の緊要素として、目的の概念を取り入れて、自然法と異なるやうに論じてゐる。

るのである。是は確かにマルクスの自家撞著であるが、マルクスが敢て此の自家撞著をしても目的を引き出して来た處に、歴史の考察には、どうしても目的の概念を逸することが出来ぬことが表現されてゐる。

爰にも一度翻つて説明といふことについて論じて見たい。説明とは、個々の經驗的事實を、法則に還元すること、換言すれば、因果の關係に置くことであると前に述べて置いたが、しかし猶それについて考へねばならぬ。たとひ經驗的事實を因果の關係に還元したからとて、それで徹底的の説明が出来たとはいへぬ。まだそこに残されたる大なるものがある。例へば、彈丸の墜落といふ事實を引力の法則に還元すれば、一先づ墜落の説明はつくが、それは如何にして相牽引するかといふ大きな問題が残されてゐる。又、H₂とOとは相化合して水を生ずるといふのは、化合の法則であるが、併しそれは如何にして化合するかの大問題が残されてゐる。電子論者は、之を電子の作用で説明しようとして企ててゐるが、よしその電子論者の努力が成功した曉に於いても、猶問題は残るのである。即ち如何にして或る状態にある電子は、互に相抱合するかといふ問題が残るのである。かういふ風に、何處までも

推し究めて行くと、そこに生起的法則の認識とは異つた別種の認識が必要になつて来るやうに思ふ。即ち物體をして互に相牽引させたり、元素をして互に相化合させたりする原本的なもの、或は之を原本力といへば、その原本力の認識が必要になつて来る。それは生起の認識でない、生起させるものの認識である。生起的法則の認識は、その原本力の何であるに拘はらず、或る事件と他の事件との因果的關係を認むる認識である。その場合それに添へるのに原本力の認識を以てすれば、始めてその生起的法則認識が完成されるのである。その原本力の認識を、ホリツチャーに循つて、之を力認識と名づければ、(J. Hollischer, *Das historische Gesetz*, S. 1) その力認識が十分であつて、始めて個々の經驗的事實は、十分に説明されるやうになるのである。

ヘーゲルの辯證法に於いては、法則認識と力認識とが備つてゐる。正・反合の三剖法は生起法則で、理はその力である。従つてヘーゲルは人間の歴史をも宇宙進化の一階段と觀て右の二法則を當て嵌めたのである。故にヘーゲルの歴史哲學は、ギンデルバントの謂ふ所の經驗科學ではない。然るにマルクスの唯物史觀は、

ヘーゲル哲學の型を其まゝに當て嵌めたものである。唯心的辯證的哲學を唯物的辯證的哲學としたまでである。マルクスに於いては、生起法則はヘーゲルに於けるやうに三割法である。唯、その原本力がヘーゲルに於いては理であつたものが、マルクスに於いては物質になつてをる。それゆゑマルクスの唯物史觀は、ヘーゲルの歴史哲學の受けた難點の大部分を引き受けねばならぬ上に、猶唯物論にしたが爲に、それ自らで大なる自家撞著をすることになつたのである。ヘーゲルの正・反合の辯證法は、氏の哲學が唯心論であればこそいへるのであるが、唯物論の立場からどうしていへるであらうか。マルクスが哲學上唯物論を取りながら而も無造作に三割法を取り入れたのは、甚だ理解に苦しむ所であつて、此點から生じた破綻は、氏の著述の諸所に現はれてゐる。即ち氏は唯物論を取るといひながら、生産方法の變化は、技術の進歩の爲に起り、技術の進歩は學問の發達に基づくといふ事を諸所に説いてゐる。即ち物質の外に精神の存在を認め、それが社會進化に大影響を與へてゐることを許してゐる。彼はサン・シモンの二元論を非難しながら、彼自らその誤謬に陥つてゐるのである。

——「祖國」昭和四年十月——十一月號所載——

昭和七年一月五日印刷
昭和七年一月十五日發行

藤井博士全集 第五卷
定價三圓五十錢



版權者

藤井元一

編輯・印刷者

小原國芳

發行所

東京府下町田町本町田

玉川學園出版部

振替東京二六六六五番
電話町田六八番

發賣元

東京市牛込區船河原町四

玉川學園出版部

振替東京一五四二三番
電話牛込三六六一番

大杉印刷所

文學概論	文學士 相良徳三著	二、〇〇
西洋美術史	京都女專教授 伊勢專一郎著	三、〇〇
ベスタロツチ全集	(全六卷) 各卷並上	三、〇〇
ウインデ哲學概論	文學士 清水清譯	三、〇〇
フレル人の教育	小原國芳譯	三、〇〇
ウエル教育藝術の理論と實際	成城高校教授 相良徳三譯	三、八〇
カンデンの藝術論	小原國芳譯	六、〇〇
近代支那の政治及文化	文學博士 矢野仁一著	三、五〇
教育と内省	文學博士 岡部爲吉著	三、八〇
宗教教育の理論と實際	小原國芳編	二、五〇
母のための教育學	小原國芳著	二、五〇

部 版 出 園 學 川 玉

教育の本質觀	京大教授 小西重直著	一、二〇
勞作教育	文學博士 小西重直著	一、五〇
玉川塾の教育	小原國芳著	一、五〇
獨逸學校改革の精神	甲南高校教授 黒川惠寛著	一、〇〇
ベスタロツチを慕ひて	小原國芳著	〇、八〇
ベスタロツチに生きる	サイファルト著 市村秀志譯	一、〇〇
ベスタロツチ遺跡巡禮	廣島文理大教授 福島政雄著	一、二〇
若き日のベスタロツチ	成城高校教授 細井次郎著	一、八〇
公民教育の根本問題	東北帝大教授 廣濱嘉雄著	一、〇〇
吉田松陰とその教育	文學士 後藤三郎著	一、〇〇

部 版 出 園 學 川 玉

數學教育の根本問題	理學博士 小倉金之助著	二、〇〇
綴方教授の根本問題	文學士 淺山 尙著	一、五〇
理科教育の根本問題	成城學園訓導 松原惟一著	一、五〇
本間全集	(全五卷) 本間俊平著	一、三〇 一、五〇 一、五〇
三浦全集	(全二卷) 三浦修吾著	各一、八〇
秋吉臺の聖者 本間先生	小原國芳著	一、五〇
ハルナツク基督教の本質	山谷省吾譯	二、五〇
オットー聖なるもの	山谷省吾譯	二、五〇
ヒルティール宗教論文集	上 黑崎幸吉譯 下 山田幸三郎譯	各二、八〇
伊太利紀行	文學士 太宰施門著	三、三〇
百濟觀音	文學博士 濱田青陵著	四、四〇

玉川學園出版部

終